
七つの鍵の物語 - 【人形】

上野文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの鍵の物語 - 【人形】

【Nコード】

N09690

【作者名】

上野文

【あらすじ】

……殺戮の為人形。そう彼女達は呼ばれていた。

共和国に創られた二十体の暗殺人形は、道化師と呼ばれる男の暗殺を命じられる。

ただ共和国の為に戦い壊れる。それだけを理想と刻み込まれた少女少女たちは、彼との出会いによって「人間であること」を取り戻してゆく。茨の道の果て、運命を切り開くことはできるだろうか。

第一話 人形は戦場で道化師と出会う

ロゼット・アインスは、懐中時計を開けて、歯車を見るのが好きだった。

以前の持ち主に似合わない、薔薇ひばの彫刻があしらわれた銀の外蓋を開けると、硝子の文字盤が彼女の顔を映し出す。

アップスタイルにまとめて二つのおさげに分け、両肩に垂らして巻いた黒褐色の髪は土埃で汚れ、冷たい面差しと翠玉色の瞳は、困惑の影を帯びて精彩を欠いている。

まるで捨てられた子犬のように、寂しげな表情。

これでは、いけないと、深呼吸を繰り返す。

文字盤の下では、複数の歯車がかみ合い、廻っている。

歯車は、迷わない。疑わない。

ただ己の成すべきことを果たし、己がすりきれるまで天命を全うする。

そこには、ロゼットの理想が、信じる完全があった。

リユーズを引いて時刻を合せ、ぜんまいを巻く。
きりきりと胸がきしむ音がする。

手が恐怖に震え、心臓が不規則に脈打つ。
狂ってしまったのは、いつからだろう？

わかっている。

あの日、あの時、あの男に出会ってから。

七つの鍵の物語 - 人形 -

第一話 人形は戦場で道化師と出会う

ミッドガル大陸南部にある、中東海諸国は、魔道文明を支える燃料、魔法石を掘り出す貴重な地域だ。

苛酷な環境から草一本生えぬ荒野では、魔法石の鉱脈を巡って、各国の陰謀が渦巻いている。

そして、掘り出した魔法石を運ぶ海上交通路もまた……。

共和国暦1007年、若葉の月（3月）10日目。ロゼット達、『メルダー・マリオネッテ』が統率者ドクトル・ヤーコブから受けた指令は、西部連邦共和国が支援するアースラ国にある反政府海上義勇兵団に魔術武器や法術弾薬を届ける護衛だった。

仕事はつつがなく終わり、義勇兵団の根拠地で一泊の休みをとったのだが、運悪く近隣都市の開放に出かけた兵団の一部隊が、アースラ政府軍の駆逐艦に尾行されたのだ。

戦闘が始まった。義勇兵団は手に手に石弓や槍などの武器をもち、村の高台から火矢を放った。歴戦の海の猛者達だ。たとえ陸戦であっても、彼らの強さは十全に発揮されるだろう。同行していた西部連邦共和国の商人達は、軍需物資を積んだ荷車と一緒に、すでに陸路で村から逃げていた。正規軍と違って、義勇兵団は護るべき拠点を持たない。支援者が居る限り逃げれば、いつまでも戦い続けられる。それが、彼らの強みだった。

ロゼット達は、商人や義勇兵団が逃げる時間を稼ぐため村に残った。殿軍しんがりを勤め、少数精鋭でかく乱するには、ロゼット達『メルダー・マリオネッテ』がうってつけだった。むろん、彼女達だけではない。義勇兵団によって悪しき政府軍の支配から解放された村々の少年少女たちが、広場に集められ、注射を打たれた。

骨と皮のようだった手足が膨れ上がり、瞳から迷いが消える。小さな身体を黒い魔方阵に包まれて、まるで獣のように四つ足で跳ねながら、彼らは政府軍の駆逐艦から漕ぎ出す揚陸ボートに突撃した。揚陸ボートに乗った兵士達が石弓を撃ち出して、少年少女たちの身体に矢が突き刺さる。でも、止まらない。蒼い海に黒々とした血の跡を遺しながら、彼らはボートに取り付いて、……爆発した。

驚くことはない。

彼らもまた、『メルダー・マリオネッテ』と同じ、ドウグだっただけのこと。

違うのは、純度と練度だ。

ロゼット達は、数百体分の未完成だったドウグを淘汰して生き抜いた、高級な二十体の殺戮人形。

ゆえに使い捨てられることはない。

壊れるその時まで、主のために戦って戦って、戦い抜かねばならない。

自爆攻撃を避けて、上陸に成功したアースラ政府軍の兵士達は、石弓を持ち剣を抜いて、隊列を組みながら突撃してきた。

だが、所詮は生身の人間だった。人間は武器を扱う存在。”武器そのもの”と戦って、勝てるはずはない。

「もろい肉体ですわ」

ロゼット・アインスは、何の感情も見せずに打ち出された矢の雨をかわし、的確に喉や額に石弓を撃ちこんだ。

隣では5（フェンフト）と11（エルフ）が同じように矢を放ち……。

後方では、7（ズイーベン）と14（セバルツ）が、突出した兵士達の喉首をナイフと銃剣で刈り取ってゆく。

メルダー・マリオネッテは、動体視力も反応速度も筋力も、常人

とは比較にならないほどに、魔術と薬物で強化されている。

「それに、大きくて、にぶい」

何よりも優位なのは、子供の肉体という身体の小ささだ。

戦場では大人は射線を少しでも避けるため、中腰や背を屈めての移動を行う。

だが、そんな小さなことから、ロゼット達には必要ないのだ。

「そんな役立たずは、壊れてくださいな？」

石弓の矢を使い切ったロゼットは、愛用の小さな槌に持ち替える。大人の兵士達の脚の間を潜りぬけ、膝を砕き、腹を穿ち、頭を飛ばす。

血飛沫が舞う。血霧に濡れる。

黒褐色の髪も白い肌も、皮のつなぎも、赤黒い血でドロドロに汚れてゆく。

儚い命を。ひねり潰すように、小さな死神の槌は、閃き続けた……。

歩兵部隊による制圧に失敗したアースラ正規軍は、鳥型の魔造人^{ゴイレ}形を改造した浮遊戦闘人形を、駆逐艦から飛ばして来た。

愚かだとロゼットは笑う。

戦力の逐次投入は無能の証明。……最初から切り札を切っておけば、兵士達を犬死にさせずに済んだかもしれない。

「全員、撤退します」

手持ちの石弓では、浮遊戦闘人形の高度まで届かない。

上空から一方的に狙い撃ちにされるだけだ。

だから、ロゼット達は逃げ出した。岸壁や茂みを利用して、カーキ色に塗装された浮遊戦闘人形が撃ち出す連発式の矢を避けて北を目指す。

おそらく、長くはもたないだろう。高度と長射程は、戦場での決定的な勝機となる因子だ。地上では、一見迷路のように見える入り組んだ岸壁も、上空からは一望できるただの通路となる。

ロゼット達にできることは、分散してやり過ごし、商人達の護衛についた仲間達との合流を目指すだけ。一方の浮遊戦闘人形は、連発式の矢をばら撒いて、茂みを穿ち岩を削りながら、メルダー・マリオネッテを追い詰めてゆく。

最前線で戦い、脚を負傷していた11（エルフ）の回避行動が遅れた。栗色の髪と左肩を掠めて矢が走り、避けようとバランスを崩した彼女は、足をとられて転倒する。

メルダー・マリオネッテは、20体で完成した工具箱だ。

ロゼット・アインスは、茂みを飛び出して、仲間の前に躍り出た。白い指が綴るのは、魔術文字。世界樹より染み出す魔力^{マナ}を用い、『世界を書き換える力』

防御の魔術が発動し、光輝く盾のようなもので、飛来する矢の雨を弾いた。

同じように飛び出してきた14（セバルツ）が11（エルフ）の手を引く。

5（フェンフト）と7（ズイーベン）が当たらぬ石弓で牽制し、再び散開する。

間が悪かった。

地面を揺らす独特の振動と、大地を叩く足音。

浮遊戦闘人形から逃れるだけでも難しいのに、東と西から巨大な西洋甲冑型ゴーレムが三体ずつ、支援用の人形駆動車両とともに近づいてくる。

「そう。包囲されてしまったの」

退路を断つてからの包囲殲滅は、戦術における基本中の基本だ。

おそらく駆逐艦の指揮官が先走っただけで、本来は陸軍との共同作戦だったのだろう。陸軍と海軍の仲が良くないのは、西部連邦共和国だって同じだ。功名や嫉妬にかられたか。

ロゼットは、先に離脱した商人や補給部隊の安否が気にかかったが、無事だろうと判断する。あちらには、メルダー・マリオネッテ15体が同行している。そして、今回動員されたアースラ政府軍に20（ツヴァンツィヒ）を止められる者はいないはずだ。

「1（アインス）。右うでから血が」

「たいしたことはございません」

何十本もの矢を、盾一つで受けるのは不可能だった。

魔術の守りを突破した矢が、右腕を裂き、赤い血液が漏れていた。

11（エルフ）が治癒の魔術文字を綴り、ロゼットの傷口に当てようとするのを止めて、彼女の脚に向けた。

「……だいじょうぶです。私はかくれますから。」

1（アインス）は、14（セバルツ）達と先に向かってください」

「11（エルフ）。ワタシ達は20体そろって一つの工具箱です。だつらくも、泣き言もゆるしません」

ロゼットは、11（エルフ）の頬をパンとはって、服を裂いて止血した右腕で彼女の手を引いた。

「そ、そ。あの人ならこう言うぜ。おとこの約束第なん条。しちゅうに活あり！ って」

「14（セバルツ）、私、女です……」

「ちちもしりも無いくせに、とあの人なら。ぐはあっ」

「バカなことばかり言っでないで、走りなさい」

ロゼットは、赤毛とそばかすの浮いた鼻の間をナイフの柄で殴って、14（セバルツ）を黙らせた。

あの男と会った日から、メルダー・マリオネッテは、多かれ少なかれ変わった。

が、どうも男達は多分によくない方へ影響を受けたようだ。

三千！ もあるらしい、彼から押し付けられた男の約束とやらを、何かにつけ引用するようになった。

「おい、矢の攻撃がゆるまったんじゃないか？」

「でも、ゆうどうしてるみたい」

14（セバルツ）と11（エルフ）の言うように、鳥型浮遊戦闘人形は上空からの攻撃を止めて、旋回しながらの誘導に切り替えたようだ。

おそらく矢の残弾がなくなっただろうが、油断は出来ない。ロゼット達は再び荒野を走る。そうして、眼前に一体の西洋甲冑が現れた。

全高10m^{メルカ}以上。灰色の巨躯が、鉄塔のような棍棒を振り回し、ロゼット達の逃げ道を塞ぐ。

人間とゴーレム。絶対に越えられない差が、ここにあった。

「ワタシ達は、メルダー・マリオネッテ。人間じゃない」

轟音をあげて叩きつけられる棍棒。

土埃の舞う中、ロゼット達に恐怖はなかった。

5（フェンフト）の手から戦輪が放たれ、足部の装甲の隙間を切り刻む。

7（ズイーベン）が繰る鋼線が、腕部に絡み付いて一瞬だけ動きを止める。

11（エルフ）の詠唱と魔術文字が不毛の地に芽を生み出し、それは瞬く間に巨大な木の通路となった。

14（セバルツ）とロゼットは、魔術で作られた階段を昇り、ゴーレムの頭部へと挑みかかる。

「これがっ、おとこのロマンってやつだあ」

「他に言いようはないのですか」

鼻血を垂らした14（セバルツ）が、自身の身長ほどもある長大な筒を叩きつけ、引き金を引く。

バールバンカー
杭槍が、ゴーレムの頭部を撃ちぬき、後方に爆煙が伸びた。

重ねるように、跳躍したロゼットの槌が穿ち、閃光が兜を模したゴーレムの頭部を破壊した。

上空を旋回する鳥型浮遊戦闘人形の乗員達は、友軍機の破壊に動揺したのか、目暗滅法に矢を浴びせてくる。

ばら撒かれる矢を光の盾で受け止め、仲間を庇って身体を刻まれながら、ロゼットは落下する。

その時、かすかな破砕音が、風を切り裂いた。

「……命令違反ですわよ。20（ツヴァンツイヒ）

苦い気持ちで、ロゼットは勝利を確信した。

一発の弾痕を中心に、まるで蜘蛛の巣のように、鳥型浮遊戦闘人形のガラスがひび割れていたから。

陸を走るゴーレム達も、支援車両も、次々と倒れ、火花をあげた。

20（ツヴァンツイヒ）。

メルダー・マリオネッテ最年少の固体は、金色の髪を風になびかせて、小さな身体で岸壁の上に立っていた。

彼女が蒼い瞳で標的を見つめ、長銃の引き金を引くたびに、人形の四肢が砕け、車両の車輪が凍りつき、追撃が終わる。

彼女が従える長銃は、古代遺跡から発掘される、己が意思をもつ魔術兵装だ。
アーティファクト

契約神器と呼ばれるロストテクノロジーは、世界樹より魔力を引き出し、個人の魔術をはるかに越える規模で現実を書き換える。千年前、神々の大戦の時代に造られたとされるこれらのオーパーツは、事実上、現代のあらゆる物理・魔術兵器を凌駕する。

その所持者である”盟約者”、20（ツヴァンツイヒ）が命令違反を犯し、ロゼット達の救出に戻った時点で、この戦いの勝利は確定した。

あの男によって、『アンチマテリアルライフル』と名付けられた、第六位契約神器”エルブンボウ”
メルカ

有効射程2000m以上を誇り、氷の魔術と併用されるかの魔銃

に穿てぬものなど、ありはしない。

けれど、それでは駄目なのだ。

ロゼットは思う。

いらない。あの男の助力など要らないと。

（ワタシたちは負けない。絶対に負けない。

二度と、あの日のような不覚はとらない。

我らがあるじ、西部連邦人民共和国政府パラディース教団の為に、ワタシ達の価値を証明する）

心に誓うように、自分に言い聞かせるように、ロゼットは深い息を吸った。

2

共和国暦1003年霜雪の月（2月）17日目。

メルダー・マリオネッテは初陣に臨んだ。

殺すことに迷いなく、殺されることに怖れなく……。

人間ではなく、人形としての本分を果たすため、殺すただけに育てられた彼らは、模擬戦では共和国の精兵すら打ち負かした。

はじめての任務に成功することで、彼女達の性能は評価され、その信頼性はゆるぎないものとなるはずだった。

目的は、ニードル・ゲレーゲンハイトという、敵対軍閥の工作員を抹殺すること。

彼は先史時代の遺跡にもぐり、魔術道具や契約神器を発掘する遺跡荒らしだが、これまでに何度もマルティン・ヴァイデンヒュラー

前主席教主の意向を妨げ、数々の破壊活動を行ったという。その上、大酒のみで女好きの外道で、関わる女性悉くを辱めた最悪の鬼畜犯罪者だった。

準備には万全を期した。

ロゼット達は、彼を雇ったシュターレン軍閥の領地深く、誰も近寄らない古代遺跡周囲の森に数多の罠を仕込み、退路を断つための地雷魔方阵をしきつめた上で襲撃をかけたのだ。

血のように赤い黄昏時。ウィット遺跡の入り口、洞窟から出ようとするとターゲットに、ロゼット達は、「眠りの雲」という魔術を発生させる筒を投げ込み、一斉に矢を浴びせかけた。

「本日のおゝ営業はあ、終了いたしました。

またのご来訪をつ、待つわきゃねえだろうがあ！」

長身を弓なりにそらして突撃した、男の野生の獣じみた反応は、予想外のものだった。

彼は場違いな台詞を怒鳴りながら、魔術文字をつづり、爆炎を呼び出して催眠ガスの雲を焼き尽くす。

撃ち込んだ矢の1割は、男が背負ったズタ袋によって防がれた。残る9割は、穂先に三日月の刃がついた変形十文字槍によって叩き落とされていた。

初手でしとめ損ねたメルダー・マリオネッテは散開し、チームを組んで攻撃を続行した。三人が矢を浴びせ、三人が火球や氷柱、雷刃を呼び出して牽制し、刃をもった近接攻撃者が次々と襲い掛かる。標的が絶命するまで続く、終わらない死の輪舞曲。

「こんな魂のこもらん刃や魔術で、この俺様が倒せるかああああ」

だが、けばけばしい真紅のコートに身を包み、長い黒髪を振り乱

して闘う男の前に、メルダー・マリオネッテは一矢すら当てること
ができなかった。

仕掛けた罠は悉く焼き払われた。人数差なんてハンデにもならな
かった。死は怖くなかった。痛みなど慣れていた。けれど、空すら
焼くほどの男の激情が、ロゼット達の歯車を狂わせた。

二〇人いたメルダー・マリオネッテが、一人、また一人と倒され
て、気が付けば、残ったのは、ロゼットと二〇（ツヴァンツイヒ）
だけだった。

石弓の矢は尽き、魔術を行使することも出来ず、二体は刃を手に
無謀な戦闘を続行する。……まだ、最後の手段が残っていたから。
ナイフを手に跳躍したロゼットは、ニードル・ゲレーゲンハイト
の振り回す槍の石突によって跳ね飛ばされ、大地へ叩き付けられた。
「……」

切れた口から血を流しながら、ロゼットは無感動に勝利を確信す
る。任務は果たされた。

ロゼットが稼いだわずかな時間を使って、二〇（ツヴァンツイヒ）
は自決用の呪文を唱え終わっていたから。

迷彩色のつなぎから伸びた白い手足を、蜂蜜色の髪を、赤黒く明
滅する文字が覆い尽くしてゆく。

メルダー・マリオネッテは、四肢の骨に爆薬が埋め込まれている。
一度起動の呪を唱えれば、槍で彼女の胸を貫こうと、首をはねよう
と爆発は止まらない。魔術と炸薬が引き起こす衝撃は、彼一人を殺
して余りあるだろう。

二〇（ツヴァンツイヒ）は武器を捨て、まるで父を求める幼子の
ように、両の手を開いて標的に飛びついた。

ニードル・ゲレーゲンハイトは、呆然と死を運ぶ人形を見つめ、
槍を放り出して、自分を殺そうとする二〇（ツヴァンツイヒ）を胸
に掻き抱いた。

「女に無理心中を迫られる。俺の死に方としちゃあ悪くない」

20（ツヴァンツイヒ）が、ロゼットが。

いや倒れながらも、意識を保っていたメルダー・マリオネッテ全員が、驚きに目を見開いた。

彼の言葉と行動は、想像もしなかったことだったから。

「だが。惜しいかな。乳と尻が足りないっ！」

そう激しく意味不明で恥ずかしい言葉を堂々と付け加えて、男の背から異形の何かが飛び出した。

それが、なんだったのか、ロゼットは、覚えていない。

シュターレン軍閥領、ウィツエト遺跡から少し離れた山肌に、遺跡のモンスターを監視する詰め所があった。

ニーダルはその警備兵に連絡して、子供達を運ぶのを手伝ってもらった。

……巻き添えで殺されたのではと心配したが、杞憂だったようで、彼らは無事に元気な姿を見せてくれた。

昏倒した子供達と一緒に詰め所の広間へと運んだ後、ニーダルは兵士達に後の業務を彼に任せて帰るよう伝えた。

「ニーダルさん、これから二十人を相手に乱交パーティーですか。相変わらずお盛んですね」

思いがけない休暇に心はずんだか、そう兵士達がイイ笑顔で喜んでくれたので。

「ハッハッハ。俺ってば絶倫だしいい」

と、ニーダルもイイ笑顔で答えて、……ボコっておいた。

結果、彼らは微妙に無事ではなくなったような気もするが、気にしない。

気にすべきことは、他にあるのだから。

ニーダルは、詰め所の小屋を出て、赤いコートから掌大の水晶球を取り出した。

「クソジジイ。俺だ。今どこに居る？」

水晶の中に、ベッドの上でナイトキャップを被って眠そうに欠伸をかみ殺す老人が映し出される。

パラディース教団主席教主アブラハム・ベーレンドルフ、パラディース教団前主席教主マルティン・ヴァイデンヒュラーに次ぐ、軍閥の主にして財閥を束ねる企業家、エーエマリッヒ・シュターレンだ。

「ガートランド王国だよ。商売のことで揉めていてね。こうして直接出向くことになった。

動かぬ証拠をつきつけられてさえ、何もかも王国が悪いと責任転嫁する教団上層部には困ったものだ。

彼らは、『自分がどのように改善するか』ではなく、『他人にどう報道させるか』しか頭にない。

これでは信用など築けぬし、真面目にやっている我々にまでとばっちりが飛んでくる。

尻拭いする企業の立場にもなって欲しいものだ。

……さて、愚痴はここまでだ。ニーダル。何があった？」

「ウィツエト遺跡で、ヴァイデンヒュラーの刺客に襲われた」

エーエマリッヒは、灰の混じった栗色の口ひげをひっぱって目を細め、不敵に笑った。

「わしの領内でやってくれる。

遺体が残っているのなら、首でももいで送りつけてやれ。

まとめて借りを返してくれる」

「ガキだった」

ニーダルがこぼした言葉は、かみ締めるように小さなものだった。

「今何と言った。ニーダル？」

「襲ってきたのはガキだったんだ。」

魔術による精神拘束に、薬物投与の洗脳、ご丁寧に身体に爆発物と術式まで埋め込んであった。

「いったい何考えてんだ。ヴァイデンヒュラーは！」

激昂し、怒りをあらわにするニーダルに、エーエマリツヒは冷ややかな視線を送る。

「よくあることだろう？ 行方不明者の臓器がバラ売りされているご時勢に、何を今更怒っているのかね？」

「怒りもするわっ。ガキだぞ！ ガキが爆弾背負って暗殺に来たんだ。なんでアンタはそう冷静なんだっ」

「わしは、酸いも甘いも噛分けたナイスミドル。君は、青臭い若造。それだけの話」

「あ、あ、あああ」

振り上げた拳を下ろすに下ろせず、ニーダルは悶絶した。

「そんなことで一々ホットラインを繋ぐな。酒なら今度つきあってやるから、ちゃんと処分して置くように」

話を打ち切ろうとする老人に、青臭い若造はこう突っ返した。

「嫌だぞ。俺は」

「まさか、何人が生かしてあるのか？」

「全員殺してねーよ」

口を歪めるニーダルに、老人はベッドの上の水差しを一口飲み、大きく口を開いた。

「”翼”を使ったか。この馬鹿造があああつ！！」

「当たたり前だ。全部焼き払ってやったわあああ」

老人は頭痛がするばかりに、しわの浮いた大きな手で目を覆った。

「むごい事をする。君の行為は、人形へ人間になれと命じるようなものだぞ。」

ヴァルハラ
天の国へ送ってやるべきなのだ。いつものように」

「くそじじい。俺は人面獣心のヒトモドキをぶつ殺すのにためらいはねえ。だけど、善悪もわからんガキに向ける槍はもってねえ」

「蜜より甘いことを言うな。そやつらは子供でなく兵器だよ。生かしておけば、必ず我らに仇を為す」

「俺にとつちやただのガキだ。」よくあること”と言ったのはアンタだろう。たとえこいつらを殺しても、別のガキが爆弾を背負わされるだけだ」

「……」

水晶を通して、ニーダル・ゲレーゲンハイトは齒をむき出しにしてにらみ、エーエマリツヒ・シュターレンは冷徹にその視線を受け止める。

エマリツヒは言う。子供とはいえ、敵対軍閥の暗殺者だから始末しろ、と。

ニーダルは返す。たとえこの子達を始末しても、代わりなんぞすぐに用意される、と。

この若造はいつもそうだと、軍閥の主は苦い唾を飲み込んだ。どれほど奇抜に振舞おうと、どれほど道化じみた戦振りを見せようと、最後の最後で頑迷なまでの保守性を発揮する。

「道德など、時代と場所で変わる。それがわからぬ君でもあるまい」

「はン！ 一つの時代、どこの場所だって、ガキを殺す道德なんぞ知ったことかあ！」

「……子供のような理屈を」

ニーダルが論理でなく、感情を優先した以上、もはや水掛け論だった。利はエーエマリツヒにある。他国ならいざ知らず、ここ西部連邦共和国ではニーダルの糖蜜じみた正論は意味を成さない。だが、そんな男であればこそ、老人は若造を信用できた。彼が絶対に裏切らない、筋を通す侠と認めていたのだ。

「勝手にするがいい。交渉の後、引き渡すよう取りはかろう。」

だが忘れるな、ニーダル。君の行為は、ただの自己満足だ。

魔術による拘束を外し、薬物の洗脳を解き、身体に埋め込まれた

爆発物と術式を破棄しても、それを彼奴らが喜ぶと思うな。いずれ、ツケを払うときがやってくる」

「もう一生分、先払いしちまったよ」

老人よりも枯れた瞳で、ニーダルは笑った。

そうして水晶が暗くなり、何も映さなくなるのを、異国の宿でエーエマリツヒは見送った。

「あやつめ」

軍閥の主は、遺跡荒らしの心中を思った。

そうだ。あの男にはもはや何も無い。

帰るべき故郷、守るべき国、喜びをわかちあう友、愛する女。

彼がすべてを失ったことを、エーエマリツヒは知っていた。

温もりを失った彼に残されたものは、すべてを焼き尽くす魔術と、復讐という熾火だけ。

「それでも、お前はお前自身であり続けるのか？　あるいは、過去の残滓を演じているのか？」

老人の問いに答えるものはおらず、沈黙の闇に沈んだ。

3

ロゼット達が目覚めたのは、翌朝のことだった。

なぜ自分たちが生きているのかわからなかった。全員、傷には簡単な手当が施され、床にひかれた毛布の上でタオルケットに包まって雑魚寝をしていた。

「おーし、ガキどもお、もう起きたかあ」

ガンガンと、フライパンとおたまをぶつけあわせながら、ニーダル・グレーゲンハイトが部屋へ入ってくる。

「顔を洗って、歯を磨いて、まずは飯にしようぜ」

この施設は、小隊規模の兵士達が詰められるよう準備されたものらしい。

おそらく封鎖された遺跡から迷いでるモンスターを監視する為の

施設だろうと、ロゼットはあたりをつけた。

食堂には、パンと目玉焼き。それに野菜と干し肉を使ったスープが用意されていた。

全員、なすべきことをなすために、席に着く。

食前に祈りを捧げ……。

ニーダルがパンに口をつけた瞬間、ロゼット達はスプーンとフォークを握り締めて、彼に襲い掛かった。

動きを止めるために、熱いスープをぶちまけ、顔面に皿をぶつける。

たとえナイフでなくとも、フォークは身体の肉を裂き、スプーンは目玉をえぐる武器となる。

「ツケ、かよ」

しかし、ニーダルはメルダー・マリオネッテの上を行っていた。

炎の魔術文字を綴ってスープを焼き払い、肘と手足を使って、食器を手に襲い来る暗殺者を無手のまま叩きのめす。

時間にしてわずか10分^{コッ}足らず。ニーダルは、ぐったりとのびたロゼット達十九人を引きずって、広間へと放り込んだ。

「俺はお前たちを殺さない。交渉が済み次第返すから、しばらく大人しくしておけ」

最後に、彼は人数分の傷薬を投げると、こう付け加えた。

「あとな。食い物を粗末にするやつは、俺は大嫌いだ」
ドアが閉まる。

メルダー・マリオネッテは、毒が含まれていないか、細心の注意を払いながら手当てを行い、何を馬鹿なことをと胸中で呟いた。

自分達は兵器だ。標的を、あの男を殺すためにあるのだ。たとえ壊れたとしても、あの男さえ殺せば、任務は達成される。

「20（ツヴァンツィヒ）は？」

ロゼットの問いかけに、部屋へ集った仲間達は、首を横に振った。いち、に、さん、……じゅうく。

一人足りない。

ロゼットの心に、ノイズのようなざわめきが走った。

相手は鬼畜で知られた漁色家だ。

20（ツヴァンツイヒ）の小さな身体に、獣欲をぶつけてうさを晴らすくらい、やってのけるだろう。

これまでのロゼットならば、それも任務と割り切ったはずだ。だが、最年長である彼女は、生き残った最年少の少女を気にかけていた。いつもなら生じ得ない、小石がこすれるような落ち着かない気持ちに押されるように、ロゼットはドアノブに手を伸ばした。

無用心にも、鍵はかかっていなかった。

廊下に出ると、食堂から人の気配がする。足音を忍ばせて、そつと中をうかがうと。

ニーダルは、無残になった食事の残骸を片付けていた。ぐちゃぐちゃになったパン、黄身と白身が床にぶちまけられた卵、とびちった野菜や肉……。かつては食べ物だったものを、バラバラになった食器の破片と一緒に集めて、獣皮の袋につめてゆく。

彼の横では、20（ツヴァンツイヒ）が、スープ溜まりに古新聞をあてていた。

「いいのか、俺の手伝いなんかして」
「ん」

20（ツヴァンツイヒ）は頷いて、彼女の小さな背と伸びた蜂蜜色の髪が、わずかに前へ揺れた。

「ま、いいけどよ」

二人は、並んで作業を続ける。

それを見守るロゼットは、知らず掌を握り締めていた。

こうして、暗殺者と標的の奇妙な共同生活がなし崩し的にはじまった。

ニーダルは、ロゼットたちを閉じ込めることもなく、詰め所に常

備された武器すら隠そうとしなかった。

自然、メルダー・マリオネットのニーダルへの襲撃は続く。

ニーダルが寢所に選んだ宿直室にトラップが仕込まれるなど、まだ序の口。

衣服を洗えばナイフが閃き、シーツを干せば矢が飛びかう、非日常の日々。

夜討ち朝駆け、果ては色仕掛け等のからめ手に至るまで、あらゆる手段が試された。

その全てをニーダルは受け止め、殴り倒して乗り切り、……誰も殺さなかった。

とはいえ、7（ズイーベン）や14（セバルツ）達、男に色仕掛けを受けたときはさすがに堪えたのか、男全員を集めて「ニーダル・グレーゲンハイトによる漢の約束3000」という怪しげな講義を丸一日かけて行った。

授業の内容はわからないが、以後、彼らがそういった行動を慎むようになったのは事実である。

……ロゼットからすれば、反動で若干おかしくなった気もしたが。

六日目が過ぎたある日の朝、強い雨風を伴う嵐がこの地域一帯へやってきた。

詰め所も例外ではなく、ニーダルは「もう着替えがない。どーすればいんだー」とか喚いていたが、不意に出るなと言付けて、小屋を出て行った。

雹の混じった冷たい雨と吹きつける風が、着込んだ真紅の外套越しに、ニーダルの体温を容赦なく奪ってゆく。

「つめてー。こんな日は、外じゃなくて、毛布の中で女といちゃいちゃしたいものだぜ」

ニーダルの趣味はナンパだが、さすがにこんな森にまでやってくる物好きはいないだろう。

彼が向かっているのは、遺跡の入り口だった。

むせ返るような土と樹がかもす森の匂いに、刺激的な異臭が混じっている。

動いている。ぞろぞろと、ずるずると、夜のように暗い森の闇を、うずうぞと何かが蠢いている。

「こんばんわあ、なーんつつて、今は朝だぜっ」

高い草と雑木の藪をかきわけ、異物へと接近する。

泥にまみれて蠢いていたのは、全長3mに達するだろっ、巨大なあめふらしの出来損ないのような怪物だった。

「……封鎖結界が破られたか。偶然だか故意だかは知らんが、面倒な真似をしてくれる」

通常、遺跡には、モンスターがはい出ぬよう、魔術師による厳重な儀式と術式による結界が張られている。

が、封印の手間とは裏腹に、相応の知識を持った工作者が要石を壊したり魔方阵に手を加えれば、結界は短時間で無力化され、地下から怪物どもが這い出てくるのだ。

無論、そんなことはめったに起こらない。起こらないが、起こしてしまうのが西部連邦共和国であると、ニーダルは熟知していた。

ニーダルが、雨に濡れた手で魔術文字を描く。この天候では、炎はよく使えまい。

かすかな煙をあげて転送されてきた三日月十文字槍を掴むと、ニーダルは跳躍した。

あめふらしもどきが酸のような液体を吐き出し、先ほどまでいた大地と草をドロドロに溶かしてしまう。

「……業だな」

三日月の穂を鎌のように振るって首を切り裂き、粘着質の皮膚を裂いて拳を突きこむ。

あめふらしもどきの体内を、魔術文字が荒れ狂い、巨躯が炎に包まれて燃え尽きた。

ほぼ同時に、上空からドリルのような嘴を回すからくり鳥が飛来し、茂みから鋭い牙を光らせた犬の首がついた鬼が飛び出した。

「はは。はははっ。あーっはっはっ」

笑う。笑う。ニーダル・ゲレーゲンハイトは狂気じみた高笑いをあげて、犬の首がついた小鬼を、からくり鳥を、あめふらしもどきを狩り続ける。

血の匂いと声に吸い寄せられるように、遺跡から迷い出た怪物たちが、砂糖を前にした蟻のようにわらわらと集ってくる。

小鬼を切り飛ばし、あめふらしに槍の穂先を突きこんだニーダルが、わずかに槍を引き抜くのが遅れた。

その隙について、一羽のからくり鳥が飛礫のように飛来して、ニーダルの喉首を狙って嘴を突き出した。

普段なら炎で焼き払っただろうが、この雨では不可能だ。急所だけでなく外そうと横っ飛びに跳んだ瞬間、鳥の喉首に一本の矢が突き刺さった。

魔像人形^{ゴレム}を動かしているのは、有人であれ無人であれ、多くの場合頭部に刻まれた魔術文字による回路だ。

ここを破壊されたことにより、魔術仕掛けの機械鳥は、そのかりそめの命を終えた。

「……誰だ？」

雨の中、森の闇に隠れて石弓を撃ったのは、黒褐色の髪を二本のおさげにわけた、翠玉色の瞳の少女だった……。

「止せ。オジョー……。冗談なら後でつきあつてやる。今の俺は、加減がきかん」

ニーダルは、幼い暗殺者が自分を襲いに来たものと考え、苦虫でも噛み潰したような表情で彼女に背を向けた。

ここで己が彼女に討たれれば、止めるものがなくなった怪物たちは、嵐に紛れて、シュターレン領の居住地へとなだれ込むだろう。逆に彼女を失神させて、あるいは手足に傷を負わせて無力化しても、怪物たちの前で美味しい餌の一丁あがりだ。

生きながら貪り食われるくらいなら、いつそ一息に首でも刎ねたほうが、まだしも救われるだろう。

ロゼットが、ニーダルの背中を向けて石弓を構える。

ニーダルが、ロゼットの視線を受けながら、荒い息を整える。

そして、三日月十文字槍が少女へ飛び掛かかる小鬼を貫き、”二本の”矢が遺跡荒らしを狙うからくり鳥に突き刺さった。

「この子があなたを心配して、とびだしましたのよ」

ロゼットの小さな背から、更に小さな蜂蜜色の髪の少女が顔を出した。

「ン」

「ガキンチョ……」

ニーダルは、20（ツヴァンツイヒ）の蒼い瞳を覗き込んだ。

髪を撫でようと手を伸ばしかけ、青や紫の血で汚れていることに気づいて引っ込める。

彼にできたことは、首を横に振ることだけだった。

「俺は大丈夫だ。必ず帰るから小屋へ戻れ。お前らがいると集中できん」

言い切られた20（ツヴァンツイヒ）は俯いて、残念そうに頷いた。何度も振り返りながら、森を後にする。

この程度の怪物が相手なら、問題はないだろう。彼女達の強さを、ニーダルは身をもって知っていた。

「お前もだ」

「いやです」

ロゼットは、従わなかった。ニーダル・グレーゲンハイトは、彼女に命を下すあるじではない。

「たったひとりで、怪物たちをしょぶんするつもりですか」

「ああ、叩き返す」

「むりです。むぼうです」

「無理じゃないし、無謀でもない」

ニーダルは、頑固だった。

槍をぶん回し、命のかけひきの只中にありながら、一步も譲らない。

犬頭の鋭い爪を槍で受け、あめふらしもどきの酸をかわし、踊るように槍で命を裂いてゆく。

「オジョー。俺は帰れと言っている！」

「ワタシはオジョーなんて名前じゃない」

ロゼットもまた、なぜか譲れなかった。

自分の気持ちすら掴めないまま、石弓の引き金をひく。

強靱な生命力を誇る軟体生物や、獣じみた速度で接近戦をししかけてくる鬼を相手取るには、いささか武器の相性が悪い。

だが、空を飛ぶ相手には、槍よりも射程に優れた石弓が向いているのだ。

「俺は、ガキを数字で呼ぶ趣味はねーんだよっ」

「でしたら、ロゼットとお呼びください。ロゼット・クリュガー」。

それが、ワタシの本名ですわ」

気が付けば、周囲の怪物たちは、動かぬ屍をさらしていた。

だが、これで終わりではない。からくり鳥の鳴く奇声や、小鬼が走り回る音、あめふらしもどきが這いずる音が聞こえてくる。

「ロゼット。ロゼット・クリュガー」

ニーダルは青黒い血で汚れた手をハンカチで拭いて、赤い外套の内ポケットから銀色に光る何かを取り出して、ロゼットに向けて投げた。

雨に濡れてかじかむ手で受け止めると、つるりとすべって、慌て腕の中に抱き込んだ。

どこで手に入れたものだろうか。およそ似つかわしくない繊細な細工が施された女物の懐中時計だった。

「お前達の仕掛けた魔方陣があるだろう。あれを30分後^{「トッ}に起爆させろ」

「あなたはどうするんですの？」

「こつも多くちゃ面倒だからな。そこまで追い込んでくる」

「わかりましたわ……」

引き際だと理解して、ロゼットは退いた。

確かに昨日まで自分の命を狙っていた相手に、背中では預けられないだろう。

ふと、思った。自分が起爆しなければ、ニーダルを葬るという使命は果たせるのではないか？

（それこそ、むりですね）

二十体のメルダー・マリオネットの猛攻を捌ききる男が、たかが怪物にしとめ切れるはずがない。

ロゼットが戦場を見渡せる小屋へ戻ろうとすると、メルダー・マリオネット達は、すでに森の入り口で手に手に武器を持ってモンスター達と戦っていた。

「どう、あのヘンタイさんはぶじだった！？」

からくり鳥を投げナイフで叩き落としているのは、5（フェンフト）だ。

「ええ、ピンピンしてましたよ」

「こかんもびんびんになんつって、うはあ」

下品なことを言いながら、14（セバルツ）は詰め所に仕舞われていた槍で軟体生物と格闘していた。

取りあえず、悪影響受けすぎだと思う。一週間前まで無口で静かなやつだったのに。

「14（セバルツ）。危ないです。頭を下げてください」

軟体生物の吐き出す溶解液を、11（エルフ）が木々の枝を伸ばしてブロックする。

彼女がこの手の術が得意だとロゼットは、この一週間で初めて知った。

「あの男は先にいるのか？」

一見変化がなさそうなのが、7（ズイーベン）だ。

わかめみたいに伸びた長髪の下で、茫洋とした顔をロゼットに向ける。

「僕らが森にしいた魔方阵がつかえると思う。つたえにいこうとおもうのだが」

前言撤回。変わらないのは見た目だけ。戦場の只中で、落ち着いた理知的な瞳を輝かせている。

「そこまで追いかんでくれるそうよ。ワタシはじゅんぴをします」

フ（ズイーベン）と言葉を交わす間にも、メルダー・マリオネットの放つ矢が飛び交い、次々と怪物たちを仕留めてゆく。

「20（ツヴァンツィヒ）……」

中でも獅子奮迅の動きを見せているのが彼女だった。

「あの子、あんなに強かった？」

動きが見違えるように違っている。最年少で、どうしても筋力に劣る彼女は、石弓でもナイフでも、他のメンバーに比べて若干見劣りするところがあった。でも、今は違う。怪物の動きのすぐ先を的確に読んで、致命打となる一撃を次々と撃ち込んでいる。

メルダー・マリオネットは、パラディース教徒を守るための武器として作られた。

仕える主はヴァイデンヒュラー様。でも、シュターレンに繋がるパラディース教徒もまた『人形』である自分達が奉仕する『人間』に変わらない。

だから、怪物どもは駆逐するのは間違っていない。あの男に手を貸すのも、これもまた任務なのだと、ロゼットは自分に言い聞かせた。詰め所に戻った彼女は、起爆用の陣を描いて、地雷魔方阵を起爆させた。

森の中で、爆音が轟き、高い煙があがった。

さ迷い出たモンスターを殲滅したメルダー・マリオネットは、小屋の広間でニードルの帰りを待ち続けた。

40分、50分、彼は帰らない。不可思議な沈黙と、裏腹な胸中のざわついた動揺が、重い空気となって人形達を包んでいた。

「むかえにいく」

20（ツヴァンツイヒ）が立ち上がって、救急箱に傷薬や解毒薬をつめ始めた。

11（エルフ）や14（セバルツ）達数名が彼女に続こうとして、5（フェンフト）や7（ズイーベン）ら残りのメンバーがロゼットを見上げる。

「まちなさい」

ロゼットは止めた。

「あの人はかならず帰るといった。だから、しんじましょう」

小屋の外では、雨がかわらず降り続いていた。

吹きつける風は、いつになっても止まなかった。

叩きつける水音と、荒れ狂う大気は、不安をかきあげる。

（もしもあの男が死んだら、ワタシ達はどうなるのだろうか？）

迎えとの合流期限は、ニーダルを襲った当日であり、いまさら救出は望めない。

ロゼットたちは、敵対軍閥の領内に取り残され、待っている末路はどうあっても悲惨なものだ。

あるいは、ニーダルは、シュターレン閥の兵士達を呼びに行っているのかもしれない。

一般の兵士達ならどうということはないが、ニーダルが相手となれば、全員で挑んでもうち勝てない。

十重二十重に囲んだ兵士達に、男は殺され、女は……

（逃げる？ 今なら逃げられる。追っ手がかかっても、盟約者が相手でなければ逃げられる）

ロゼットの動揺はとまらない。ふと、預かった銀の懷中時計を開いた。

彼に似合わぬ、繊細な薔薇の彫刻があらわれた銀の外蓋を開けると、硝子の文字盤が彼女の顔を映し出す。

アップスタイルにまとめて二つのおさげに分け、両肩に垂らして巻いた黒褐色の髪は未だ乾かず、冷たい面差しと翠玉色の瞳は、不安の影を帯びている。

これでは、いけないと、深呼吸を繰り返した。

カチカチカチ。文字盤の下では、複数の歯車がかみ合い、廻っている。

歯車は、迷わない。疑わない。ただ己の成すべきことを果たし、己がすりきれるまで天命を全うする。

（歯車。きつと、これがワタシの理想）

すつと、憑き物でも落ちたように、ロゼットの顔から不安が消えた。ガラスに映る面差しは相変わらず冷たいが、血色が戻って気品のようなものさえ宿っていた。

そうだ。使命は変わらない。たとえ打ち捨てられようとも、我らがこの身はヴァイデンヒュラーの御ために。

「おい、ゆうひだ」

14（セバルツ）がすつとんきょうな声をあげた。

雨がようやく止んで、厚い雲の隙間から、僅かにオレンジ色の光が射していた。

「かえってきた！」

20（ツヴァンツィヒ）が小屋の外へとんでゆく。5（フェンフト）が「安心したぜ」と呟いて寝転がり、11（エルフ）は「お夕食のしたくしなきゃ」といそいそと立ち上がる。7（ズイーベン）が「入れなおすか」と言いながら、20+1個のカップに琥珀色の茶を注ぎ始めた。

「いよう、無事だったか？　　たたく一仕事だったぜ」

窓の外では、赤いコートも灰に汚れ、あふろのように髪がばさばさになったニードルが、飛びついてきた20（ツヴァンツイヒ）を抱いて、くるくると回っていた。

「……………」

かつん、と、新しい紅茶が注がれたカップが目の前に置かれた。
7（ズイーベン）だ。

「やぶられた”封鎖結界”を、なおしていたんじゃないかな？」

「ええ。そうかもしれませんわね」

紅茶は熱く、ロゼットの身体に染み渡った。

第二話 運命の風は扉を叩く

第二話 運命の風は扉を叩く

4

ウィット遺跡の封鎖結界ふうさけつかいを復元し、モンスターの地上侵攻を止めたニードル・ゲレーゲンハイトは、シャワーを浴びて詰め所の外へと出た。

黒い長髪を森から吹く風になびかせるままに、訓練場の大石に腰掛けて、夜空を見上げる。

星空を肴さかなに、褐色の酒を瓶から喉へと流し込むと、湯上りの身体に、焼けるような熱気が走った。

そうして、しばらく時間が経つと、彼が羽織った赤いコートの内ポケットが振動を始めた。

連絡用の水晶だ。そろそろ、エーエマリッヒ・シュターレンから通信が入ると思い、待機していたのだ。

「よう爺さん。元気に酔っ払ってるかい？」

「ふむ。馬鹿造、君はいつも元気そうだな。羨ましいぞ」

水晶に映る老人も、手にグラスを持っていた。ベッドスタンドには、紅麦の蒸留酒と、薬草蜜酒が並んでいる。

「……いくら紅麦酒で割つても、それ甘すぎねーか」

「この風味が好きなのだよ。君こそモローの火酒とは、甘い性根に似つかわしくない」

「男なら火酒一択だろ」

「米麴酒、二百三十七本。米蒸留酒、百五十一本。麦酒・火酒他、九十八本。君が、これまで我が家で飲んだ酒瓶の数だが？」

「金持ちが細かいこと気にすんじゃねーよ」

「甘いいう。金持ちだから細かいことを気にするのだ」

「うおつ、なんか正論のような気がする」

と、そんな馬鹿なやり取りをしながら、ニーダルはエーエマリツヒが憔悴せうすいしていることに気がついていた。

灰色の混じった栗毛の髪や、いつも手入れをかかさぬ自慢の髭がつやを失い、昼ならば化粧で隠すのだろうクマが目の周りに浮いている。

「それで、仕事の方はどうだったんだ？」

ニーダルが問いかけると、エーエマリツヒはグラスに酒ではなく、水を注いで一気にあおった。

「難航しているよ。」

そちらでは報道管制が敷かれているだろうが……。共和国のある工場が、基準値の6万倍以上の高濃度農薬が混入した食品を、王国へと輸出した」

「……6万倍つて、それ冗談だろ。死ぬ……ぞ……」

沈んだエーエマリツヒの言葉に、ニーダルの顔が凍りついた。湯と酒の熱気が一瞬で冷めてしまう。

「幸運だった。」

医師の手当てが良かったか、幸いにも被害者は一命をとりとめたのだが、その後が不味かった」

続く老商人の言葉が何なのか、ニーダルは予想がついていた。

「工場と教団公安部が、いつものように王国へ責任を被せようとしたのだよ。」

我が国の管理体制には一切の非がなく、毒物は王国内で混入されたものだよね。

件の農薬は王国内に存在せず、発見された有毒食品には、完全密封のもののさえあったというのにだ」

ニーダルは、口元を歪め、焼け付くような香りの酒を呷った。

「それがパラディース教団だろう」

天より与えられた“徳”として、常に己だけを正義と位置づけ、決して非を認めない。自身が行った悪行の悉くを他者に転嫁し、意

に沿わぬ者を力づくで葬り去る。理も論拠も関係ない。「唯一教団のみが是、他者（蛮族）は悪」この行きつめた選民思想こそ、教義の根幹であり、古来より他民族を討伐し、資源と労働力を奪いつくしてきた、西部連邦人民共和国の国風そのものなのだ。

「そう、それがパラデイス教団だ。」

だからこそ、彼らは自国にとどまらず他国の報道機関にまで干渉を行い、幻想を見せ続けていた。

平和・人権・友好・平等・安全。我が国が掲げるこの言葉に、実態が伴ったことなど、建国以来一度もない」

教団は、知られてはならなかったのだ。

真実を知れば知るほどに、幻想はひび割れて、パラデイス教団の、真の姿が浮き彫りになる。

虚言と情報統制によって塗りつぶされた前兆は、これまでにもおそらく多々あっただろう。それでも教団は、信じやすい、「悪意ある虚構の嘘すらも好意的に解釈してしまう」国々を騙し通すことができた。だが、少なくとも王国において、命すら奪う嘘を平然と突き通す外道を衆目にさらした今回の事件は、パラデイス教団という幻想を映す鏡へと投じられた一石となるだろう。

「ジジイ、貿易への影響は？」

「前年度に比べ、先月の共和国から王国への輸出は全体で2割近く落ち込んだ。生鮮食品輸出の落ち込みが顕著で、およそ30%が減少した。」

慌てふためいた教団は、「王国の食生活は共和国食品無しに成り立たない」といったプロパガンダを王国で流して、兵糧攻めとばかりに食品輸出を停止したが。

……まったくの逆効果だったよ。王国の共和国製品離れは一層加速している、今月はおそらく前年比40%減少は避けられないだろう。流通網が整った王国では、国産の生鮮野菜が普通に売られているのだからね。

そればかりか、問題を聞きつけた諸国が「安全」を看板に掲げて、

ここぞとばかりに王国へと売り込みをかけはじめた。王国内で流通が成り立つということは、本国製品のブランドイメージを保証する、ひとつのステイタスとなるからな」

エーエマリツヒの言葉に、ニーダルはなるほど頷いた。

かつて、王国と浮遊大陸アメリカとの間で病牛の取引が問題となつた時も、アメリカ側はなんとか強引に押し切ろうとし、失敗するとうにか関係を持ち直そうと努力をはじめた。「王国で売れるか、売れないか」は、それなりに他国にあたえる指標となるのだ。その時は、共和国も「安全で安価な共和国産肉類を」と営業に回つたはずだ。こういった事態となつては、皮肉の効いた笑い噺にしかないが。

「で、ジジイのところもとばっちりを受けたわけだ。いちおう、対策はしてきたんだろう」

ニーダルが知る限り、水晶に映る軍閥の主は、いつかこういった事態が起こりうることを確信していた気がする。

「当然だろう。わしは逆に好機だと考えているぞ。

教団上層部は理解していないが、信用というものは純金よりも価値を持つ場合もあるゆえな。

なに、付き合いは新参者よりも長い。ここからがわしの腕の見せどころよ」

「商人だねえ」

この柔軟性こそが、ベーレンドルフとヴァイデンヒュラーの二大軍閥に挟まれたシュターレン閥を生き延びさせたのだと、ニーダルは得心し、エーエマリツヒに敬意を払っていた。

無論、事実はそのだけではない。ニーダル・グレーゲンハイトという希代の遺跡荒らしによつてもたらされた、膨大な数の契約神器と魔術武器による精兵こそ、シュターレン軍閥を支えるもうひとつの要だった。かつて軍事力を持たなかったネメオルヒス国は共和国によつて蹂躪され、住人は苛烈な支配によつて塗炭の苦しみを味わい続けた。一方、軍事力に秀でたベトアーナ国は浮遊大陸アメリカ

の軍事干渉を力づくではねのけ、懲罰戦争という名目で侵略した共和国軍も追い返した。結果、長きに渡る半鎖国状態を余儀なくされたが、近年は王国との距離が近づき、かの国の援助もあって目覚しい経済隆盛をとげているという。平和は、常に機敏な外交戦略と軍事力によって守られるのだ。

「それよりも」

エーエマリツヒはグラスを置いて、ニーダルを見据えた。

「感謝する。よく領民達を守ってくれた」

「おいおい、薬草酒にあたったか」

ニーダルは、大仰におどけて流そうとする。

「ふむ。少々、甘みが過ぎたようだ」

エーエマリツヒもまた、彼に合わせた。

笑い出す。他人行儀は必要ない。二人は、そういった関係だった。

「……二日後に、ドクトル・ヤーコブの使いと名乗る者が接触してくるだろう。そやつに人形達を引き渡せ」

「感謝するぜ。じじい」

「馬鹿造には、火酒は強すぎるのではないか？ 珍しい言葉が聞こえたが」

「ほっとけ」

通信は終わり、水晶に映る紅いコートを着た青年の姿が消えて、エーエマリツヒ・シュターレンは、グラスに蒸留酒と薬草酒を注いだ。薬草酒に含まれる蜜の甘い匂いが鼻をくすぐる。

「甘いよな」

ウィツエト遺跡の封鎖結果が解かれたことは、すでに報告が入っていた。下手人は、メルダー・マリオネツテか、彼らを消そうとしたヴァイデンヒュラー閣工作員のどちらかだろう。いずれにしても、ニーダルが人形達を処分しておけば、この事件は怒らなかった。もし領民達から一人でも犠牲者が出ていれば、エーエマリツヒは躊躇無くニーダルに命じただろう。「全員を殺せ」と。彼は、迅速な対処で領民達を守り、そしてメルダーマリオネツテを守ったのだ。

「ニーダル。共和国は、人間一人の重さなど考えぬぞ。誰かが元凶を断たねばならない。この国を正しく作り変えねばならない。」

それでも、お前は、革命に賛同しないのだな」

ニーダル・ゲレーゲンハイトは、詰め所へと戻った。

酒蔵から火酒を数本持ち出して、寝床である宿直室へと向かう。ドアを開けようとすると、警戒して隙間に挟んであった髪の毛が落ちていた。

「（まったくあいつらときたら……）」

こんな日くらいは寝かせてくれ、と、ニーダルは苦笑いする。

以前、扉を開けたときは、仕掛け矢が飛んできた。その前は、クローゼットから襲撃された。

慎重に気配を伺い、糸などがないことを確認して、開け放つ。

「おい、悪戯なら明日にしてくれ。もうてめえらが俺を襲う理由は」
ニーダルは、言葉の途中で絶句した。彼の手に握られた酒瓶が、
ごんという音を鳴らして、床に落ちる。

「こんばんは」

ベッドの上で、二つにわけた黒褐色のおさげ髪が揺れて、翡翠色の瞳と桜色の唇が柔らかに微笑む。

薄絹をまとった身体からは、壊れそうに小さな白い手足が伸びていた。

ロゼット・クリュガーは、まるで招くように手を差し伸べた。

5

沈黙が流れた。

男は無言でクローゼットから毛布を引き出し、ベッドへ向かった。

少女は、媚びた視線で彼を迎えようとして。

「ふぎや。な、何をしますの。そんならんばうなっ」

「乱暴にしてるんだっ」

ロゼットは、ニーダルに毛布で簀巻きにされて、ぽいと部屋から放り出された。

「おやすみ」

「ま、待ちなさい。それがレディに対するたいどですかっ」

「れでい？」

「わざわざ区切らないでください。何か文句でもあるんですの！」

「ロゼット・クリュガー。君が淑女を名乗るには、ひとつ足りないものがある」

ニーダルは、拾った酒瓶を教鞭のように振り回し、胸をそらして断言した。

「な、なんですの」

教養だろうか？ 気品だろうか？ やはりこのやり方は、はしたなかっただろうか？ ロゼットは、毛布で簀巻きにされたまま彼の答えを待ち。

「それは、貞操帯だ」

「そこで下ネタに走りますかっ」

「何を言う！ あれも立派な貴族文化だぞ。人類の歴史は、色と情欲と変態が重なって出来ているのだ。ビバ、エロ！」

「かつてなことをっ」

ロゼットは思わずむきになって床を蹴り、ニーダルの顔面に強烈なドロップキックを決めてしまったりした。

「ふっ。いいキックだ。この俺のマゾヒスティックなハートは、モエにモエてビンビンさ。じゃ、おやすみ」

鼻血をダラーと出しながら、ニーダルは親指一つ立てて、ドアを閉めた。

「こらっ。話くらいきいてくれたって、いいじゃないですか。はくじょーもの〜」

「だったら、別の格好に着替えて来い」

かくして、ロゼットは宿直室から追い出され、二〇分後^{コッ}。ドアが叩かれた。

「ニーダル・グレーゲンハイト、少しお話が」

「はいはい。で、こんな夜遅くに、何の」

男は、ドアを開けて、言葉を最後まで紡ぐことができなかった。

少女の小さな肢体を包むのは、黒い皮で作られたボンテージ。こ丁寧^ニに、貞操帯のイミテーションまでつけている。

「さすがにホンモノはよういできませんでしたけど」

「お や す み」

「こらっつ、話がちがうじゃありませんの!」

「いや、いくら何でもその格好はないだろ? 俺にその手の趣味はねーよ」

「さつきマゾだつていったくせにっ」

「幻聴だっ。ともかく、もう一度やり直し」

「注文の多い方ですわね!」

その後もドアを巡るロゼットとの来訪は続いた。

ロゼットは、大きなスリットの開いたドレスから、変に丈が短い体操服みたい何か、バニーガール、猫耳、果ては犬のきぐるみまで次々と着替えては直室に出向き、そのたびに駄目だしを受けた。結局、最後に折れたのは、ニーダルのほうだった。

「普段着で来いっ」

「最初からそれが趣味ならそう言うてくださいいっ」

ロゼットは、詰め所の倉庫にあった男物を仕立て直したシャツを着て、ローブを裂いて縫い直したスカートを履き、ようやく寝室に入ることができた。

「何が趣味かつ。だいたい、あのコスプレ衣装はどこから手に入れたんだ!」

「11（エルフ）がぬいましたわ。彼女、おさいほうが趣味ですも

の」

「なんて才能だっ」

両手を広げて、天を仰いだのがニーダルの隙だった。

ロゼットは床を思い切り蹴って突進し、ニーダルの鳩尾に、背に隠し持ったナイフの柄を叩き込んだ。

ニーダルはとっさに後方に跳躍し、急所への直撃を外したが避け切れなかった。ベッド脇で咳き込んだところを、ロゼットに押し倒され、馬乗りになった彼女に首筋へとナイフをあてられる。

「……どういふつもりですか？」

「何が？」

「こうなるまでワタシ達をころさなかったことです。

工員なんて、血祭りにあげるのがふつうでしょう？」

ニーダルが遺跡から帰るまでに、ロゼットが想像したこと。あれは、本来ならば、そうであるはずの現実だった。

シュターレン閥の施設に連行され、全員の息の根が止まるまで、精神と肉体を壊される。それが、本来メルダーマリオネツテを待っていたはずの末路。

にも関わらず、彼はロゼット達を捕らえながら、拷問にけるわけでもなく、武器をとりあげるまでもなく、ただ自分を襲うに任せていた。

こんなこと、酔狂というには、程がある奇行だ。

「……」

案の定、ニーダルは答えなかった。そして、ロゼットはもう半分答えにたどり着いていた。

ニーダル・グレーゲンハイトという男は、甘いのだ。私情を切り捨てられず、ささいな感情に振り回される。

ならば、ツケコマナクチャイケナイ。ダッテ、ソウイウ道具トシテ、自分達ハツクラレタノダカラ。

「ニーダル。あなたは、いつまで小さなシュターレン閥の用心棒なんてやってますの？」

ロゼットのナイフが、ニーダルのコートのボタンを弾く。

「あなたは強い。あなたはもつと羽ばたけるし、もつと多くのものを手に入れられる」

ロゼットのナイフが、ニーダルのシャツを切り裂く。

「ワタシ達と一緒にヴァイデンヒュラー閥に行きませんか？ そうすれば」

ロゼットのナイフが、ニーダルの胸を薄く裂いて、血がにじんだ。少女は、舌を伸ばして、ぴちゃぴちゃとなめとった。

彼女の桜色の唇が朱に染まり、頬と顎に赤い雫が飛び散る。

「ワタシ達だって、あなたの自由にできる」

血の混じった唾をひきながら、ロゼットはニーダルに唇を重ねる。

「いひゃいひゃいっ」

る寸前に、無骨な指で両の頬をふにとつねられた。

「伸びるな、これ。餅みたいだ」

「な、な、なにをするんですか」

目じりに涙を浮かべ、真っ赤になってロゼットは怒る。

「そうゆうのは、大きくなってから好きあった相手とやれ」

ニーダルは押さえつけられたまま、視線を外して、ベッドの方向を見た。

「あ、あいじょうなんてなくなっちゃって、できます」

「阿呆。愛情があるからいちやいちやするのが楽しいんだろぅが」

ニーダルの言い方に、ロゼットはかつと血が昇るのを感じた。そんなものは知らない。そんなものはわからない。なぜならメルダーマリオネッテは。

「怪我すんなよ」

中途半端に突きつけられたままのナイフを、ニーダルは歯で啜え、奪い取った。

そのまま腰を浮かし、自分の両脚をロゼットの脇に差し込んでひっかけると、勢いよくベッドの方へ放り投げた。

「ええっ」

ロゼットは信じられなかった。こんな技は、見たことも聞いたこともなかった。

布団にからまったままベッドからも転がり落ちて、彼女が立ち上がったときには、胸を朱に染めたニーダルが眼前に立っていた。

「っ」

とっさに服の乱れを直し、両手で胸を抱くように、ロゼットは薄い絨毯の上でちぢこまった。

だが、ニーダルは、ただ手を差し出しただけだった。

「ほらよ、とつとと起きろ。でもって寝ちまえ。」

お前達の上の方と話がついた。ドクトルなんちゃらの使いが迎えに来るとき。明後日にはヴァイデンヒュラーに帰れるさ」

ニーダルの言葉は、想像もしなかった言葉だった。

喜ぶべきはずの事実。何よりも望んだはずの結果。そして、

この穏やかな詰め所での日々の終わり。

ロゼットの胸中で膨れ上がったのは、歓びではなく、不可解な激情だった。

「どうしてっ。さんざん、犯してきたんでしょう？ はずかしめてきたんでしょう？」

ワタシはあなたを殺そうとした。あなたを傷つけた。どうしてワタシをおそわないのっ」

「だから、俺はらぶらぶいちゃいちゃするのが好きなの。」

何吹き込まれたかしらんが、俺はこれまで女を口説いたり、デートに誘ったことはあっても、乱暴した覚えはないぞ？」

薄々は気づいていた。作戦の前に聞かされた、ニーダルが数々の女性を陵辱してきた強姦魔だという報告は、きつとでたらめだ。この男には、無理だと、わかっていた。

「ワタシには魅力がない？ たりないのはむね？ それともおしり？」

「年齢」

「うそつきっ」

ロゼットはニーダルに掴みかかった。今度はニーダルも倒れなかった。それでも少女はただがむしゃらに、握った拳を男へ叩き付けた。

「にくいのなら、そういつてよ。人形のあいてなんてできないって、そういつてよ」

「ロゼット。ロゼット・クリュガー」

ニーダルは、ロゼットを抱きあげて、胸の中に抱きしめた。

鉄錆びの匂い。むせるような、血の味とぬくもりを感じた。

彼は、少女が着たシャツの袖を二の腕までめくった。そこには、昼の戦いで付いた浅い傷が、まだ残っていた。

親指で撫でられると、ロゼットはわずかな痛みを感じ、赤い血がにじんだ。

「もう一度言うぞ。お前達は、人間だ。俺と同じ人間だ。」

古き支配が、お前達に人形であることを強いるなら、それこそが誤りだ。

「もしも、お前が望むなら」

ニーダルの黒い瞳が、ロゼットを映す。

黒褐色のおさががみ、困惑に揺れる翡翠色の瞳。白い小枝のような体躯を包むのは、クレナイの……

「いいえ。ニーダル・グレーゲンハイト。」

ワタシは、ワタシ達は人形です。だからこうやって、ゆうわくしにきましたの」

ロゼットは、ニーダルが言葉を繋げる前に、そっと離れた。

白いシャツは、返り血でべっとりと濡れていた。

「おやすみなさいませ。ニーダル・グレーゲンハイト」

礼を示し、ロゼットは宿直室を出た。

廊下を走る。食堂を走り抜ける。玄関を出て、庭の井戸へと走った。

水をかぶる。両の瞳が酷く熱い。自分が泣いていることが信じら

れなかった。

「ワタシは、人形だ。ヴァイデンヒュラーのためにある人形だ。歯車はまよわない。うたがわれない。こんな気持ちでくるしむこともない。」

「そうです。そうでなければ。ワタシは……この手は……」
「どれだけの血を流しただろう？ どれだけの命を散らしただろう？ 食事を取り、眠るよりも、命を奪うことが日常だったのだ。」

「薬物と欲望に穢された肉体と精神。この血塗れの姿こそ、自分に相応しい。」

「風邪をひくぞ。アインス」

「ないてるの？ けがをしたの？」

「わかめみたいに伸びた髪の人影と、月光に照らされ輝く蜂蜜色の髪の少女が、心配そうに玄関口からかけてきた。」

「ううん。この血は、違いますのよ。20（ツヴァンツイヒ）」

「ロゼットは、7（ズイーベン）が投げたタオルを受け取り、濡れた髪と身体を拭いた。」

「ふられたか」

「殺しそこなったか、とは、7（ズイーベン）は尋ねなかった。」

「いいえ。ワタシからふりましたのよ。あんな見る目のない男、こちらからおことわりですわ」

「そうか……」

「彼を殺す必要も、なくなりました。明後日、むかえのものが来るそうです。ワタシ達は、ヴァイデンヒュラーへ帰ることができます」

「7（ズイーベン）も、20（ツヴァンツイヒ）も、はっと息を呑んで、無言でうつむいた。」

「でも、にんむはまだおわってません。20（ツヴァンツイヒ）、あなたがさいごの一人。殺さなくていいけれど、ゆうわくしてきなさい」

「ン」

「20（ツヴァンツイヒ）は頷いて、決意したように詰め所の小屋」

へ戻っていった。

「フ（ズイーベン）……」。

ワタシは、人形だから、ゆうわくすることしかできなかった。

でも、もしも人間だったなら、愛することや、求めることもできたのかしら？」

ロゼットの問いに、少年は長い髪で視線を隠した。

「アインス。僕達は、みんな少数民族だ。この国では、どうあっても人形としてしか生きられない」

パラディース教徒を中心とする主要民族と違い、他の少数民族には人間としてまともに生きる権利など与えられない。

子供は学校に通うことを許されず、大人には賃金もろくに払われない過酷な重労働が待っている。

結婚は他民族との婚姻を国家によって強制され、出産も一人に限定される。孕めば中絶を強いられたり、暴力で強制的に流されたりする。そして、それでもなお、生まれてしまった望まれない子供は、捨てられるか、売られるのだ。

「そうね。生まれたときから、ワタシ達は人形だった」

あの時、ニーダルは何と続けようとしただろう？ 頼み込めば、メルダーマリオネット全員が「殺された」ことにして、逃れることもできたかもしれない。

でも、結末は同じ。いや、現在以上の悲惨な生活が待っているだけだ。人形に戻らなくちゃいけない。正義を果たさなければならぬ。研究所で、同じ境遇の同胞との戦いを強制され、殺して、殺して、殺しつくして、ロゼット達は生き延びてきたのだ。今更運命から逃れられるものか。この詰め所での日々は、人形が夢見た、人間として生きた儚い夢だった……。

「もどきましょう。ワタシ達自身にもどるための、じゅんぴをはじめなければ」

「ああ」

玄関を開く前に、ふいにフ（ズイーベン）は立ち止まった。

「アインス。僕は、ここまで僕達をひきいてきたあんたを尊敬している。」

ぎむでもすりこみでもない。この俺の たしかな感情だ」
「ありがとう」

そして、ドアは開かれ、 閉じられた。

第三話 夜と別離と

第三話 夜と別離と

6

1（アインス）と7（ズイーベン）に送り出された20（ツヴァンツイヒ）は、宿直室のドアをノックしたが返事はなかった。

鍵はかかっていなかったで、部屋へと入り込むと、血と消毒液の香りがむつと鼻を刺す。

1（アインス）と彼の間に、いったい何があったのだろうか？ ニーダル・グレーゲンハイトは、ベッドの上で布団にくるまって眠っていた。ひどく苦しそうな顔で、額には脂汗が浮いていた。

「……ン」

20（ツヴァンツイヒ）は肩をゆすつてみた。……起きない。

薄い羽根布団をめくると、ニーダルは赤いコートを着たまま眠っていた。

ボタンは千切れていて、空いた胸元からはシャツと、わずかに血のにじんだ包帯が見えた。

「……………」

たぶん息苦しいのだろうと思う。

暗殺人形として育てられた少女は、目の前でうなされている遺跡荒らしと自分達との闘い、そして、遺跡の怪物たちとの戦いを思い返した。

彼の外套は、ナイフを通さず、石弓の矢を弾き、魔法や腐食液といった攻撃さえ致命打とならなかった。たぶんそういう特別な品でも、眠るのには向いていない気がした。

「ここを、こうして……」

外套を脱がそうと試みた。腕を抜くのに手間取ったが、ボタンが

外れていたで、それほど苦労はなかった。

ニーダルは起きることもなく、20（ツヴァンツィヒ）の為すがままにされていた。

「だいじょぶ。……アナタをまもるから」

そうして、少女は道化師の布団にもぐりこみ、目を閉じた。

ニーダル・ゲレーゲンハイトは悪夢を見ていた。

否、もはやそれが悪夢なのかすらわからない。何度も、何度も繰り返し夢見た地獄も、悲しむという感情がなければ悲劇にはならない。

王国暦1102年、晩樹の月（12月）25日にガートランド王国を襲った天変地異、巨大地震をきっかけに、その日、国中の遺跡を塞ぐ封鎖結界が一斉に無力化された。

数少ない王国軍は、被災者の救出と怪物に対する防戦の板ばさみになり、狂乱の中で軍人も民間人も、多くの生命が失われていった。王国軍人だったルドウィン・ハイランドの所属する技術試験隊も迎撃に駆りだされ、山中の遺跡から郊外に迫る怪物の群れを、どうか街へ侵入する前に止めることができた。

任務に成功して、浮かれていたのかもしれない。

たとえ、そうでなくても、信じられなかっただろうが。救援に來たはずの友軍に、背後から奇襲を掛けられるなど。

帰るはずの町、アルター州サンフィス市の第8区画は、血塗れの死体で溢れて燃えていた。

神器・魔術の中には、遺跡の怪物を操るものが存在する。だが、それを守るべきはずの国民に向けて使う狂気を想像できなかった。

”味方のはずだった”部隊の砲撃と、怪物どもの強襲を受けて、

ルドウィン達の部隊は殲滅された。

石弓の残弾もなく、神器を使う体力や精神力も枯渇した状態で、あれほど持ちこたえられたのは仲間達だったからこそと、感情の壊れた今でも誇りに思う。

でも、”仲間だから殺せない軍隊”と”敵として殺しに来た軍隊”がぶつかった時、どちらが勝つかなんて、山と街を焼き滅ぼす焰をみるより明らかだった。

負傷した銀色の髪の子。部隊に同行していた民間協力者を背負い、炎に包まれた山と町の中を、ルドウィン・ハイランドは仲間の名を呼びながら、生存者を探して走り回った。いくつの角を曲がり、いくつの道をかけただろう？ 確認のしるしを道路に焼きつけていると、着弾の破碎音と建物の崩れる音の中から、かすかな救いを求める声が聞こえていた。

ふたつ先の角の住宅街。折り重なった死体の中、死臭の中で、母親らしい女の細い手が、そっと子供を押し出して……力尽きた。もう、どれほど呼んでも動かない。でも、屍の塔から逃がされた幼い少年は、顔色こそ死人のようで唇さえ紫に染まっていたが、まだ生きていた。

怪我で動けない女。酸欠で気絶した少年。少年にボンベをつけて背負い、銀の髪の子を抱き上げて、焰から逃れようと交差点に出た彼の前に、二体の青銅機兵と、巨大な角笛のような何かを手にした銀髪碧眼の男が立ちはだかった。

「なんだ。ルドウィン。やっぱり生きていたのか？ どこまでも生き汚い」

ルドウィン・ハイランドは、その男の顔を知っていた。その男の名前を知っていた。同じ隊の仲間だったはずの男だった。なぜ殺した、と火と煙に焼けた喉を震わせて、尋ねた気がする。

「なぜって、大罪人だからさ。君達も、この町の連中も。我々以外の王国人は、生まれながらにして原罪を背負った咎人だ。」

我々は世界を正しく導くよ。歪んだこの国も、大陸も、全てをた

だしく作り直す。

民主主義とか、民族主義とか、国粹主義とか、そんなものがあるからエゴが社会を食いつぶす。

国境なんていらぬ。政治家もいらぬ。企業もいらぬ。必要なのは正しい価値観と、人を正しく導く選ばれた存在だ。

それさえあれば、世界はひとつになれるし、争いも起こらないんだ」

男はうつとりと自分に溺れるように胸に手をあてて、陶醉した表情を浮かべた。

「……………」

ルドウィン・ハイランドは、呻くように息を吸った。

「我々は大陸を、世界をひとつにするよ。その為には、君達が邪魔なんだ。

忌々しい古い血統を守護する家も、国も。その盾となり矛となろうとする君達も。

わかるだろう？ 知識も、力も、選ばれし者……新しき民の王とその使徒だけが持ち、管理すべきだって」

「……………」

碎けてゆく。みしみしと、ぎしぎしと音を立てて、ルドウィン・ハイランドという存在が壊れてゆく。

「でも、彼女は別だ。

渡してほしい。もう死んでしまったみたいだけど、我々なら生き返らせられる。

君だって、その方が嬉しいだろう？ いつまでも未練たらしく、そんな死体を抱いても仕方がないじゃないか？」

知っていた。知っていたとも。冷えてゆく彼女の亡骸。もうそこにはいないと知っていたながら、抱かずにはいらなかった。

「死者の蘇生は神の領域だ……。そんなことができるのは、神話の世界の住人だけだ」

現代の大陸に、契約神器や魔術道具を遺した一千年前の大戦

。旧世界を滅びに導いた黒衣の魔女は、無より生命を創造し死者すら蘇らせる無限の魔力で、彼女を倒して世界を救った神剣の勇者を苦しめたという。

「確かに。失われた魂と精神を戻すのは、我々にだってまだ無理さ。

でも、賢しい知能なんていらないだろう？ 必要なのは肉体だけだ。君だって、そう思ってるから昔、ナンパとかやってたんじゃないか？」

愉快そうに嗤う男を、戦友だと信じていた己が信じられなかった。前兆はあった。根拠もあった。それでも、仲間を信じるのは当然だと感情的に目を塞いだ。

「とんだ俗物だったんだな。お前は」

「俗物？ 何を言ってるのさ？」

私は言わば救世主だよ。

一千年前に偽りのメサイア 神剣の勇者が”救い損なった世界”を救った。

世界樹へと至る七つの鍵のひとつ。無限の威光で怪物たちさえ平伏させる、第一位契約神器ギャラルホルンの力だね」

暗くなる視界に、愛しげに異形の角笛を撫でる男が見える。陶醉した声も、もうよく聞こえない。

こんな男と問答している時間は無い。今背に負った小さな生命を救うため、状況を打開しなければならぬ。

抱きしめた女の銀の髪を一房切って、薔薇の彫刻があらわれた懐中時計の鎖で縛り、軍服の内ポケットへ入れた。

すまないと心の中で念じる。謝ったら決して彼女は許さないだろう。こんなとき、誰よりも子供の救出を望む、そんな女だった。

口付けを交わす。何度も何度も交わした接吻、その最後の味は、冷たい死の味がした。

「ケヴィン・エンフォード。俺達を狙ったのは正解だ。けれど、お前のクーデターごっこは、決して成功しない」

銀の髪の女。ルドウィン・ハイランドが生涯ただ一人愛した女の遺体が火に包まれて、花が散るように消えた。

「ルドウィン！ 今、何をやった？ そんな魔術は」

ケヴィン・エンフォードに、黙れとばかりに手帳をぶつける。

目を通した男の浮かべた傲慢な笑いが、見るも無残に引きつった。「殺せ！ その男を決して逃がすな。

我々が目指す調和溢れる平和と未来の為に、生かして出すなっ！

勝利を！」

勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を

唱和しながら、二体の青銅機兵が巨大な鉄塔の如き帯剣を振り下ろしてくる。

剛剣を避け、跳ね上げる石畳の欠片をかわし、ルドウィン・ハイランドは燃え盛る木造建築の壁を蹴って、三角跳びの要領で宙を舞った。火に巻かれながら、次々と炭化した柱を蹴り上げて、空高くへ跳躍する。

高度から、敵包囲網を観察する。ケヴィン・エンフォードが率いていたのは、最新式の有人青銅機兵20輜と四足自走機砲兵8門。いずれも陸戦型の重量兵器だ。機動力はおよそ時速80kmと60km。移動速度では勝ち目は無いが、どちらも対空兵装はないはずだった。

「っ」

轟音をあげて自走機砲兵が放った砲弾が、ルドウィン・ハイランドの跳ぶはるか上空で裂けて、雨のように鋼鉄の弾子をばら撒いた。とっさに魔術文字を綴り、炎の防壁を張ったが受け止められるものではない。降り注ぐ鋼鉄の弾子は、壊れかけた建物を次々と薙ぎ倒し、かすめた一弾に左肩と二の腕の一部をこつそりともつていかれた。

「どうだい、ルドウィン。榴散弾の味は？」

モンスター鎮圧用の兵器も、優秀な私なら、こういった使い方が

できる。

君がもたらした異世界の知識が、君自身を滅ぼすんだ。素晴らしいだろう！」

歓喜とばかりに天を仰ぎ、両腕で自分を抱いて嬌声をあげるケヴィン・エンフォードが目端に映る。

奇跡的に、子供には怪我は無い。腕もまだくつついている。足も動ける。ルドウィン・ハイランドは、吹き飛ばされながら魔術文字をつづつて、落下速度を減少させて着地する。

そこに、ケヴィン・エンフォードのギャラルホルンに操られた怪物たちが突撃してきた。巨大な芋虫、豚の顔した子鬼、いくつもの首の生えた異形の獣達だ。対するルドウィン・ハイランドは徒手空拳。武器一つ無く、両の拳と足での迎撃を余儀なくされる。

詰んでいた。空へと逃げれば榴散弾の餌食になり、地上では何匹居るかもわからない怪物と、大隊規模の機械化歩兵部隊が待ち構えている。契約神器ももたない魔術師一人でかなうわけがない。それでも、戦った。生きている以上、戦わねばならなかった。背には、守るべき存在がいる。ここには、同じ志に生きた仲間達がいる。幸い、炎は、ルドウィン・ハイランドにとって味方だ。拳と足に纏いつかせて、怪物たちを迎撃する。

やらせない。芋虫の牙を折った右腕が貪られ、肉塊と化した。

喜びが、壊れる。悲しみが、壊れる。楽しさが、壊れる。

彼女と過ごした甘い日々、仲間達と繰り返したバカ騒ぎ。

そういった自分を構成する記憶が真っ黒に塗りつぶされてゆく。

守ってみせる。豚鬼を蹴り飛ばす、足が刃に切り刻まれて使い物にならなくなった。

皆殺しにされた町の人々。引き裂かれた仲間。銃弾と砲撃に散っ

た仲間。そして、朱に染まる彼女。

抑えきれない慟哭と怒りが、狼や蛇の如く荒れ狂い、理性と正気を打ち砕いてゆく。

一人も一匹も通しはしない。四肢が使い物にならなくなり、腹をえぐられながら、炎を叩きつけるようにして殴り倒す。

もう熱さも痛みも感じない。真っ暗な海の中を、手探りで泳いでいるかのよう。

「ここは、あいつらが命をかけて守った俺達の国だ……」

「違うね大罪人。ここは、私達”選ばれし者”の国、私達”選ばれし者”が救う世界だ。」

古き守護者もろともに、呪われた悪鬼よ滅べ。今こそ新しき歴史、新しい世界が幕をあける！ 勝利を！」

勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を勝利を

音声素子からでたらめなオーケストラのように勝利と言う単語を連呼しながら、青銅機兵が包囲を狭め、怪物たちを踏み潰して突進してくる。

「とうさ…かあさん…」

ボンベのマスクが取れて、背負った幼子が呻いた。

「いい子だから、目つぶってる。すぐに、終わる」

怪物たちは、その数を減らしている。ルドウィン・ハイランドは進む。戦いながら、身を削りながらの移動だった。這うような速度で、されど、ついにその場所へたどり着いた。

「ケヴィン・エンフォード。お前らが阿呆なのは、自分達を絶対上位に位置づける、その身勝手な思い込みだ」

燃え盛る炎を媒体に、生命反応を探る。……30箇所。この町で生きている人間は、自分と背おった少年。ケヴィンが率いる機械兵たちだけ。

「こいつは、お前達に殺された人々への弔いの炎だ」

道路の石畳に最後のしるしを刻み

魔法陣を起動する。

蒼い炎が、火柱となってしるしとしるしをつなぎ、点と点の間を
奔り抜け、円陣と方陣、五芒星、五芒星や魔術文字を複雑に組み合
わせた巨大な炎の魔法陣を創りだす。それは、迫り来る怪物や青銅
機兵どころか、遠くから包囲していた四脚自走砲も、否、山と荒野
で外界から隔絶したアルター州サンフィス市の第8区画を完全に包
み込んでいた。

「どうかその御霊に安らぎを」

爆発し、消失し、消滅する。

炎も、虐殺された遺体も、砲撃と炎で碎かれた建物の残骸も、青
銅機兵も四脚自走砲も、何もかも飲み込んで、魔法陣は町の全てを
焼き尽くした。

例外だったのは、第一位契約神器ギャラルホルンに守られたケヴ
イン・エンフォードと、起動したルドウィン・ハイランド、背負っ
た幼子だけだ。

先ほどまでバカ笑いをしていた男は、燃え盛る炎の海の中で、ク
ーデターの失敗を悟っただろう。

虎の子の最新鋭装備と、一個大隊に匹敵する同志を失った。これ
では、いかに混乱に乗じようと、王国制圧は不可能だ。

「最初から狙っていたのか。クーデターの調査を書いた手帳を私に
見せたのは、我々をここに引き付けるため。君を狩るつもりで、罠
に誘い込まれた？」

「政治権力は銃身から生まれる。とはよく言った台詞だ。

歴史の中で、お前達のようなとち狂った独裁者と全体主義国家が
生み出した、粛清と浄化の犠牲となった死者は戦争の数十倍に届く。
ここで逃がせば、この町のような惨劇が何度も繰り返される。そ
んなことを許すものか」

「ふふふふ。……ふざけるな！ 貴様如きに、貴様なんぞに、我々の計画があああああ」

ケヴィン・エンフォードが異形の角笛を吹き鳴らした。

世界が壊れる。空間が圧縮され、時空が歪み、ガラス細工の絵のように、赤と青の火柱が砕けてゆく。

「万人の幸福がつ、人類社会の幸福がつ、世界平和がつ、永劫の理想郷があああつ。我らが夢を、我らが希望をつ、その命をもって贖え、大悪魔！」

「お前達だけ」の幸福と理想の為に、他者を踏みにじる夢や希望など捨てちまえ」

ボロ雑巾のようになった身体をしばりつける布を解き、背負っていた眠る幼子を地面に横たえる。

腕を横に振るうと、砕けゆく火柱が一定の軌道で変化し、新たな文字を形作る。

「神剣の勇者と、黒衣の魔女が遣した連鎖魔術の真髄を見せてやる」
其は、ルドウィン・ハイランドが愛した女と、技術試験隊が研究を進めた最悪の禁呪。

七つの鍵と呼ばれる第一位級契約神器や、あまたの魔術道具を悪用する破壊者達に対抗すべく、古代の術者達が組み上げた最終手段「ケヴィン・エンフォード！」

たとえこの身魂魄を打ち砕こうと、必ずや仇をとる。
仲間達を守ろうとした国を、この子を守ってみせる。

我は二エとして我を捧げ、封じられし九つの箱を破る。
顕現せよ。呪われし焰。世界樹の敵。天を滅す異形の翼よ！

システム
呪詛機構 始まりにして終わりの焰 レイヴァティン アクセス 接続

「

ここに、ルドウィン・ハイランドと呼ばれた男の心は砕け、目覚めたひとつのシステムによって焼き滅ぼされた。

あらゆる神器を破壊するためだけに生み出された呪詛。しかし、肉体に刻まれた憎しみと、守りたいという意味が、無色の機構を赤と白に染める。

切り捨てた。焼き払った。薙ぎ裂いた。自身と幼子に迫る空間の滅びは、一陣の風となつて解け消えた。

背に現れた異形の何か、炎とも血霧ともつかぬなにかを燃やしなから、名すら意味を無くした人型の人形は走る。

その手には、太陽よりも煌煌と燃え盛る炎の長剣が握られている。

壊される世界を焼き滅ぼし、炎も風も土も、母なる世界樹をも灼き尽くす焔が、ケヴィン・エンフォードと異形の角笛に迫る。

「知らない。識らないぞ私は！

神器ですらなく、第一契約神器と渡り合える魔術なんて有り得ない。」

そんな魔術師なんているわけがないっ」

角笛が燃えて、逃げる敵を追撃した。

貴様を殺す。

貴様の意思も、野望も、その全てを駆逐する。

其れだけが、ただ独り狂いながらも生き残ってしまった、自分の存在意義。

我は復讐者、我は道化、この焔が尽きるまで走り続ける松明。

「だいじょぶ。……アナタをまもるから」

温もりを感じた。

感情の悉くが燃え堕ちた、自分には余計なものだ。

ルドウィン・ハイランドは、そんなものに固執したから大切なも

のを守れなかった。
だから、殺す。

『……』

ニーダル・ゲレーゲンハイトは、振り返りざま手刀を叩き込み、
その臓腑^{はらわた}を焼き尽くそうとする。

させない

だが、叶わなかった。
その前に、強烈な拳が顔面に打ち込まれたからだ。

逆立った短髪。黒い瞳。ニーダル・ゲレーゲンハイトより低い背
と幼い顔立ち。

『ッ』

それはかつての。この世界に来たばかりのルドウィン・ハイラン
ドと同じ顔をしていた。

7

過去は終わる。

眠りから覚めて、上体を起し、瞳を閉じたまま深呼吸する。

自分を再構築する。人間が人間であるためには、理性と感情が必
要だ。

あの真っ黒な衝動に突き動かされるだけの『人形』では、目的は
達しない。

だから、創り上げる。

真つ黒な燃えカスに、焼け砕けた『ルドウィン・ハイランド』という欠片を拾い集めて上書きし、『ニーダル・ゲレーゲンハイト』にならなければならない。

かの禁呪は、絶大な破壊力と引き換えに使用者の精神を焼き滅ぼす。

生き延びた者は記録にはなく、ほぼ全員が一年以内に狂死し、あるいは廃人となって死んだ。

けれど、『自分』はまだ生きている。生きている限り、復讐と守護の誓いは果たさなければならない。

まどろみの中で、たゆたうこと数十秒^{セント}。ニーダル・ゲレーゲンハイトは、ふと隣にばかばかとした何かを感じた。

「（ああ、昨夜は誰と寝たんだっけ？）」

人肌の温もりは好きだ。触れていると、焼け焦げた残滓のような冷たい自分が、まだ人間であるかのように錯覚できるから。

目をあける。蜂蜜色の髪。下着に包まれた白く小さな身体。20（ツヴァンツィヒ）が穏やかな寝息を立てていた。

別の意味で、硬直する。冷や汗がたらりたらりと流れる。

「冷静になれ。冷静に」

いくら記憶があいまいだからといって、こんな子供に手を出すほど、『自分』は無節操ではないはずだ。

たとえば、一人じゃ寂しいからもぐり込んだ（注、彼女らは大部屋で布団をひいて雑魚寝です）とか、雷が怖くてやってきた（注、昨夜は雨もあがっていい星空でした）とか、……納得できる理由はいくらでもある。はずだ。

「だいたい俺は女と寝るとき以外は、このコートを着ているだろう。間違いなんて起こるはずが無い」

その紅い外套は、ベッド脇の椅子の上へ丁寧に畳まれて、上半身は思いつきり裸でした。

ザアアアアアと、血の気が引く音を、ニーダル・ゲレーゲンハイトは自覚した。

ついでに、銀色の髪の子を筆頭に、かつての仲間達が「ロリコン死ねや。この鬼畜野郎」とか書かれたのぼりと武器を手に手に、修羅の笑顔を浮かべるのを幻視する。

「うわあああああつ」

思わずベッドから転げ落ちる。

「20（ツヴァンツイヒ）、大丈夫かつ！」

途端、ドアの前で待っていたかのように、徹夜明けらしい充血した目の少年が部屋へと飛び込んできた。

確か、14（セバルツ）とか呼ばれている少年だ。

「おいその出歯亀野郎」

「は、はい」

「俺を殴れ」

「へ？」

ロゼット・アインスが珍しく、いつもより5分遅く起きると、騒ぎはもう始まっていた。

「どうしたの？」

歯を磨き終わり、髪にブラシをかけていると、女子が20（ツヴァンツイヒ）の周りに集まってきやあきやあと歓声をあげていた。洗面所から見えた中庭の方では、男子が見守る中、14（セバルツ）がシャワー一枚のニーダルに殴りかかっていた。「腰が入ってないぞ」とか「脇をしめろ」とか、なぜか殴られながらニーダルがアドバイスしている。まあ、あの人はマゾらしいので、また変な趣味にでも目覚めたのだろう。

「おはよう。1（アインス）、聞いておどろくなよ。20（ツヴァンツイヒ）が大金星だ」

5（フェンフト）が嬉々として、首に飛びついてきた。

「はあ？」

「だからっ、あのヘンタイさんを才としたんだって。攻略完了だって。くううう、どうやってくだいたんだろ」

11（エルフ）が紅茶の入ったカップを持ってきて、説明を加えてくれた。

「20（ツヴァンツイヒ）がニードルさんと寝たそうですよ。いま、くわしい話をきこうとしていたところです」

「あ、そ」

この時点で、ロゼットは半ば真相を把握していたが、それでもほんの少しとげがあったりなかったりした。

20（ツヴァンツイヒ）は困ったように目を伏せて、食堂で話し始めた。

「ドアから入って」

「うんうん」

5（フェンフト）や11（エルフ）達が待つてましたと身を乗り出す。

「ニードルさんはねむっていたの。おこしてもおきなかった」

「うんうんうん」

5（フェンフト）や11（エルフ）達が目をきらきらと輝かせる。

「でも、とても苦しそうだったから、コートをぬがせたの」

「うんうんうんうんうんうん」

5（フェンフト）や11（エルフ）達がもう絶好調と言わんばかりにもりあがる。

「ベッドの中に入っておやすみしたの」

「きゃああああっ……て、え？」

食堂にいた全員の頭の上に、大きなクエスチョンマークが浮かんでいる。

「あの、さ、20（ツヴァンツイヒ）。ひょっとして本当にねむっただけ？」

「ン」

20（ツヴァンツイヒ）は、ほんの少しだけ照れながら、にこりと微笑んだ。

「それって、寝るは寝るでも、本当に寝ただけじゃ……」

「全滅？ 私たち试着きよくなし？」

食卓に並んだ全員が、脱力してぱたりと倒れ、5（フェンフト）達がどんよりしながら囁きあっている。

「あれ、でも、でしたらどうしてあの人は」

11（エルフ）が疑問に思ったか、あれ？と首をかしげた。

ロゼットは紅茶を飲み干して、あっさりと言い放った。

「そんなの決まっているでしょう。バカだからよ」

「「ああっ！！」」

20（ツヴァンツイヒ）を除く全員がはたと手を打った。

中庭では、相変わらず14（セバルツ）がニーダルに殴りかかっていた。

「ぬるい。ぬるいぞ。お前の怒りはそんなものか！」

「御忍！」

殴ってるはずの14（セバルツ）に泣きが入ってるように見える。

「男なら、俺くらい殴り倒して見せろ」

「男ならっ、うおおおおっ」

14（セバルツ）は吠え叫んだ。気合をこめ、拳を握り締め、強く大地を踏み込む。

そこに、玄関口に出たロゼットが声をかけた。

「ニーダル。もういいわよ。昨夜は何もなかったって」

「なにっ」

ニーダルが一步下がる。14（セバルツ）の拳はわずかに逸れて、伸びきり。

無防備に突っ込んだ胸板に、ニーダルの拳がめり込んでいた。

「あ？」

「ぎゃらくていか〜」

よくわからない悲鳴をあげて、きりもみしながら14（セバルツ）は吹っ飛んだ。

水きり石のように綺麗にバウンドしながら、玄関口まですっとなで来て、あら器用ねなんて思ってしまう。

「ね、ねえ。14（セバルツ）だいじょうぶ？」

11（エルフ）が駆け寄って、治療の術を掛けようとする。

「お、おれは、もうだめだ。助からない」

「そんな、気をしつかり」

11（エルフ）に抱き寄せられた14（セバルツ）は、ぐったりとしてこう続けた。

「せ、せめてさいごにキスを」

「!？」

突然のことに硬直していた11（エルフ）へ、14（セバルツ）は口をタコみたいに伸ばして顔を近づけて。

唇が彼女に届く前に、何処からか伸びて来た鋼糸でぐるぐる巻きにされて、ひきずられた。

「ちょ、フ（ズイーベン）、なにすんだよっ」

「いいかげんにしろ阿呆」

「男のロマンだろ。わかれよ」

「それがロマンだなんて、僕の、俺のロマンは認めない」

「い、いたい、おれる、きれる、ゆるめろ」

ふう、と、ロゼットは重いため息をついた。

「（ワタシ達、これから大丈夫かしら）」

この日の夜は、皆で石を積んでバーベキューをした。これが、「人間」でいられる最後の時間だっただけだった。だから、皆必要以上に笑って、騒いで楽しんでいた。

初めての体験だったから、ふもとの町で買い込んできた肉は生焼けだったり、焦げすぎていたり、酷い出来だったと思う。

それでも、本当に、美味しくて涙が出るほど愉快だったのだ。

ニーダル・グレーゲンハイトも笑っていた。その笑顔が眩しかったから、ロゼットはちよつとだけからかってみたくなった。

「こんな食事なのに、楽しそうですわね」

「そうか？」

「ええ。ずいぶん、いい笑顔ですわよ。ほら」

手鏡を見せる。焚き火の焰が、ニーダルのちよつと間が抜けた笑顔を映し出す。

「つつつ」

よつぽどつぽに入ったのか、ニーダルは腹を押さえて笑い出した。目の端には涙すら浮いている。

「ど、どうしたんですの」

「つつつつ。いや、ひどい顔だな」

「あら、今頃気づきまして。でも、ワタシは」

ロゼットは、続く言葉を言えなかった。笑っているはずのニーダルが、なぜか泣いているように見えたから。

彼女は知らない。不意打ちで見せた手鏡に映ったニーダルの笑顔。それは、断じて作り笑いなどではなかった。

「つつつ」

皆で火を囲んだ最後の夜。

メルダー・マリオネット

少年少女たちは殺戮人形に戻ることを決め、壊れた復讐鬼は人間に戻っていたことを自覚した。

第四話 操りの糸を断つために

第四話 操りの糸を断つために

8

ニーダル・ゲレーゲンハイトと、ロゼット達『メルダー・マリオネッテ』の別れは、あっさりとしたものだった。

翌日、ドクトル・ヤーコブの使いの女が来て、ヴァイデンヒュラー領へと連行された。

任務に失敗したにも関わらず、廃棄されなかった理由は、今でもわからない。ニーダルが何か手立てを打ってくれたのか、それともヤーコブ博士の気まぐれだったのか……。メルダー・マリオネッテは再び精神拘束の魔術をかけられた後、一人ひとり散り散りにされて、ヴァイデンヒュラー閥の工作員や魔術師の下で調整された。

ほとんどの者にとって、その記憶は苦痛に満ちたものだった。例外は、『紫の賢者』と呼ばれる魔女に師事した5（フェンフト）と、もうひとり、20（ツヴァンツイヒ）だけだったろう。

20（ツヴァンツイヒ）が送られたのは、シュターレン軍閥専属の遺跡荒らしとして有名な魔術師、ニーダル・ゲレーゲンハイトの元だった。彼女はそこで「イスカ・ライプニッツ」という名前と、保護者を得ることになる。ニーダルは、20（ツヴァンツイヒ）を敵対軍閥から預けられたドウグではなく、「養女^{むすめ}として引き取ったのだ。彼は彼女に養父として接し、戦士として育て上げた。二人で遺跡から発掘した第六位級契約神器、『アンチマテリアルライフル^{アーティファクト}』と名付けた長銃を与えて。

一年後、メルダー・マリオネッテはヤーコブ博士によって再び集められ、特殊工作部隊としての使命を果たすことになった。

そして、そこには、20（ツヴァンツイヒ）の姿もあったのだ…

…。

共和国暦1007年、若葉の月（3月）11日目。

メルダー・マリオネッテは、護衛していた商人達を拠点まで送り届けると、新たな指令を受けた。

命令書のサインは、ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキング戦闘教官。三年前、ドクトル・ヤーコブの使いとして、メルダー・マリオネッテを連れ戻しに来た工作員。そして、ロゼットを引き取り、『調整』を施した師でもあった。

彼女の命により、メルダーマリオネッテは休む間もなく再び荒野に向かい、西の果てにあるサウド湾を目指すことになった。

7（ズイーベン）が深刻な顔で、ロゼットに話しかけてきたのは、出発からしばらくたってからのことだった。

「1（アインス）。昨夜のことで話がある」

昨晚、命令違反を犯して救援に戻った20（ツヴァンツイヒ）を、ロゼットは皆の前で激しく叱責した。

が、20（ツヴァンツイヒ）は、退路の確保と護衛対象の安全圏までの離脱という任務を果たしており、仲間の救援に駆けつけた彼女を責めるのは、隊全体の士気にも関わるのではないかと7（ズイーベン）は忠言した。

「そうね、7（ズイーベン）。確かに昨日はワタシの判断ミス。

最初に敵戦力を読みちがえたのは、ワタシなのに、20（ツヴァンツイヒ）を責めるのは筋違いだったわね」

「そういう意味じゃない。

アインス。君は、ここのところ、20（ツヴァンツイヒ）にだけ厳しすぎる。

まさか、あんな噂を信じているわけじゃないだろう？」

茫々とわかめのように伸びた前髪の下で、鋭く光る7（ズイーベン）の目に射抜かれて、ロゼットは思わず首から下げた銀の懐中時計を握り締めた。

「まさか、信じるわけありませんわ」

20（ツヴァンツイヒ）を引き取って以来、ニーダルの鬼畜や強姦魔といった醜聞に、新たな項目が加わった。

曰く、ロリ。曰く、幼女趣味。

依頼人が宿を訪ねると真昼間から素裸で奉仕させていたのだ、客にはまず彼女を抱かせてサービスするのだ、高官達の乱交パーティーに破廉恥な服着せて娼婦デビューさせたのだ、それはもう、散々な噂が飛び回っていたのだ。

が、実際に帰ってきた20（ツヴァンツイヒ）は、かつて以上にニーダルを慕っていたため、ロゼット達は「またいつものでっけか」と納得していた。

「むしろ、男子の目が気になりますけど。

いつもエロスな14（セバルツ）だけでなく、たまに変な目で見ている者がいると、11（エルフ）が怒っていましたわよ」

思いもよらぬロゼットからの反撃に、7（ズイーベン）もまた、わかめ髪の下で視線をそらした。

「そりゃあ、僕達だって年頃だ。

20（ツヴァンツイヒ）は、あの人の私生活については触れられなかっただろう。

そこまで過激でないにしても、なにかあったんじゃないか？ と勘ぐるヤツだっている」

俺は違うぞ、と、彼らしくもなく言い訳して、言葉を続ける。

「あの人は、妙齢の女性に会えば食事にさそい、ベッドにいざなうことを礼儀と考えてる節があったんだ。

……正直、父親としてどうふるまっていたか、なんて想像もつかない」

目的地であるサウド湾は、まだ遙かに遠い。ロゼットは水筒の水で喉をしめらせると、ちよっとだけひねた笑みを浮かべた。

「聴きたい？」

「あ、ああ」

ロゼットの背後に、なにか得体の知れないもやのような迫力を感じて、わずかにフ（ズイーベン）の足運びが乱れた。

「海水浴に出かけて、二人で砂のお城を作った」

「は？」

なんかこう、ざっぱんと波の押し寄せる風景を想像して、フ（ズイーベン）が前髪の下の目を見開いた。

「紅葉がきれいだったので、サンドイッチをもって滝を見に行った」
「……」

落葉の中、ゴゴゴという滝の叩きつけるような風景を想像して、フ（ズイーベン）が口をあぐりと見開いた。

「遺跡近くの泉で二人で釣りをした。他にも栗拾いとか、キノコ狩りとか、知人の農園でブドウの収穫やイモほりを手伝ったとか。」

春や秋のお祭りにも参加したそうですわ。あの人、意外に観光が好きみたいで。

それにね、彼、お菓子作りがしゅみで、休日には20と一緒にかまどの前に立つの。信じられる？」

フ（ズイーベン）は、20（ツヴァンツイヒ）と一緒に、朗らかな笑顔でクッキーを焼くニードル・ゲレーゲンハイトを想像した。

なんかもう、色々台無しとゆうか、めちゃくちゃだった。

「すまない。僕には、俺には、そちらの方がでっぴあげに聞こえる」
「同感ね」

ロゼットは、バックパックの中から緑色の小さく丸い何かが3つ刺さった串を取り出すと、フ（ズイーベン）に勧めた。

「ユーカミの粉に、ヨクサの葉をまぜて蒸したもののよ。」

昨夜、20（ツヴァンツイヒ）と一緒に作ったの。ダンゴという、あの人の故郷のお菓子に似せたものだそうよ」

口に含まると、よくわからない食感がした。歯ごたえも、喉越しも悪くない。聞いたことも食べたことも無い菓子。

不意に、どうしようもない痛みと寂しさが、フ（ズイーベン）の胸に穴を空けた。

「話さないわけだ。僕たちに、俺たちに気を使っていたのか」

それが、親子にとって当たり前前の風景なのかどうかは、親という存在を知らない7（ズイーベン）には判別もつかない。

けれど、少なくともニーダル・グレーゲンハイトと20（ツヴァンツイヒ）は、二人で親子として過ごす時間をもとうとしたのだ。

それがどうしようもなく、痛く、辛く、燃えあがるほどに……妬ましかった。

「優しいだけでは、なかったそうですけど。

ご飯を抜かれることもあったそうですし、平手で打れたこともあったそうですわ」

だが、理不尽に鞭打たれたり熱湯をあびせられることはないだろう。汚物や毒物を口にねじこまれることも。

それよりも、なによりも、この胸を焼く痛みと熱さにくらべれば。

7（ズイーベン）は、灼熱する胸を醒ますように、深く、深く息を吸った。

冷静にならなければならない。メルダーマリオネッテの男で、1（アインス）の支えになれるのは自分だと、自分だけでありたいと7（ズイーベン）は自負していた。だから、感情をなだめる。冷静に、平静に、彼女の助けとなり得るように。

「だから、君は20（ツヴァンツイヒ）に厳しくしていたのか」

「ええ、嫉妬していたの」

搾り出すように俯いて、二つにわけた黒褐色のおさげ髪が力なく揺れた。

「違う。20（ツヴァンツイヒ）を守るためだろう」

7（ズイーベン）は、あれはてた荒野を見据えた。風と岩だけが続く大地。

ここに住まう者は、一度とて思わなかっただろうか？ 水と緑が欲しい、と。

あるいは、水と緑のある大地を、知らなければ耐えられたかもしれない。

しかし、あの日、あの道化師は与えてしまったのだ。

殺すこと、殺されることしか知らない、殺戮の為人形達に、無条件の安全と愛情を。

その居場所は、七日の後、夢幻の如く取り上げられ、20（ツヴァンツイヒ）だけが与えられ続けた。

なぜ、なぜ、何故！？

いつそ醜聞通り、20（ツヴァンツイヒ）がああ男を籠絡したというのなら、諦めもついただろう。

彼女がそれだけ、優秀な工作員だった、ということなのだろうか。

事実が異なることを、メルダー・マリオネッテの全員が知っていた。機会は平等にあつて、選ばれたのは偶然で、にも関わらず20（ツヴァンツイヒ）だけが父親を得た。アーティファクトを与えられ、遺失魔術を学び、幸せな時間を過ごした。どうしてそれが、私ではなかった？ 僕ではなかった？

たとえ、20（ツヴァンツイヒ）自身に非がなくとも、そういった黒い感情を誰もが持っていたはずだ。ゆえに、1（アインス）は厳しく当たったのだろう。20（ツヴァンツイヒ）に。

「5（フェンフト）には、そういった感情は向けられていないのか？」

「彼女の場合、師事した相手が特殊でしたから」

「特殊って？」

「『紫の賢者』は女の子が大好きなんだそうです」

一瞬、脳がショートしたように、7（ズイーベン）は、発言の意味がわからなかった。

「影響されて、『やっぱり女の子同士っていいよね。男と違って、汚くないし、固くないし、臭くないし。真実の愛は、同性にこそあると思うんだ』なんて熱っぽい目で言われてみなさい。毒気も何も抜けますわよ」

7（ズイーベン）は、想像してみた。14（セバルツ）が頬を赤

らめた熱っぽい目で、話しかけてくるとする。

『やっぱり男の子同士っていいよな。真実の愛は、同性にこそあると思うんだ』……最悪だった。

「フ（ズイーベン）、吐きそうな顔してますけど、大丈夫？」

「そ、その、『紫の賢者』こそ大丈夫なのか？」

「危険人物ですわよ。初対面で、5（フェンフト）が趣味はなんですかってたずねたら、幼学校に登校する児童の観賞なんて答えたのよ」

「通報しろよ！」

「ヴァイデンヒュラー軍閥の魔術顧問なんて、誰が逮捕できるというんです！」

二人して、つい声を高く上げてしまい、慌てて声を低める。

幸い、14（セバルツ）の周りで5（フェンフト）達が騒いでいて、誰も興味をもっていないようだった。

「おまけに、その人、ヤーコブ博士と仲がいいの。」

真の萌えとは何か、エロスとは何か、そもそもこの二つは異なるものだから、なんてお酒を片手に、真面目に討論してましたのよ」

「うちの研究所が心配になってきた」

「おまけに二人とも、あの人に興味津々で、ぜったい仲間に取り入れてやるって、研究所裏庭の桃の木の下で息巻いてましたわ」

フ（ズイーベン）は、ヤーコブ博士とニードル、そして紫の賢者とやら杯を交わす場面を想像してみた。

年甲斐もなくあれっばいプリントTシャツを着たヤーコブ博士と、男らしくふんどし一丁のニードル、それに紫のローブを着た変な女性グラスをぶつける。

『我ら三人、姓は違えども兄妹の契りを結びしからは、心を同じくして助け合い、萌えとエロスの道を探求せん。若きはゆりかごから老いは墓場まで節操なし。同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に死せん事を』

湧き上がるERO！ ERO！ という歓声。三人は笑顔で集う同志に応え、変態による変態の為のウェーブを起こして、変態センサーシヨンの渦が全世界を席卷し、ついには全世界同時変態革命が起こるのだっ！

「い、嫌すぎる」

「せ、世界の危機ですわね」

取り合えず会わせない様にしなきゃ、と二人は誓いあった。

ニードルは大抵の場合、シュターレン老の依頼でどこかの遺跡に潜っているだろうから、出会う可能性は著しく低いのだが。

その時、14（セバルツ）が悲鳴をあげて、5（フェンフト）が何かノートのようなものを手に、1（アインス）に飛びついてきた。「ああ、やっぱり抱き心地いいなあ、1（アインス）は……
「いたいたい」

「正気に戻りなさい」

ロゼットは、5（フェンフト）の耳を思いっきり引っ張って、ひるんだところを引き剥がした。

「もう、軽いスキップじゃない。ほらほら、それより、これ、見てよ」

「だめ、見ちゃダメっす」

14（セバルツ）が何か喚いていたが、気にせず渡されたノートを見る。

「スクラップブック？」

それは、エブリデイポストという王国の新聞社が海外向けに出したコーナーの記事を集めたものだった。

「ええ、なにに、」 王国人は海外旅行で、少年少女を銃で撃つハンティングを楽しむ”

まあ、あの外道な国なら、それくらいやるでしょう。

”王国のレストランでは、豚と性行為するシヨーを行った後、それを具材に調理する”。

うわっ。リヨウキテキですわね。

”王国の母親は、受験を控えた息子の為に、勉強の前に性処理をする”

”王国のOLの72%が、セックスを堪能するための技術を学ぶ特殊キャンプを経験する”

”王国では売春産業が盛んであり、通常の売春に食傷した彼らの間で最近ブームになっているのは小学生と老女である”

”王国人女性の55%が出会ったその日に男に股を開く淫乱である”

”王国の病院では女性看護師がお尻の穴にバ…”
って、何よ、このポルノ記事のスクラップはっ。

14（セバルツ）、貴方、こんな記事を集めて恥ずかしくないの！
”

”ひいい、20（ツヴァンツィヒ）、やめて、そんな目でおれを見ないでっ”

”王国って信じられない国ね。道德の崩壊なんてじげんの話じゃないわ。

こんな、こんな国にいたから、きつとあの人は変態になっちゃったのよ！”

”1（アインス）、あの人スケベなのと王国に因果関係はないぞ。だいたい14（セバルツ）が集めた記事はでっちあげだ”

”エブリデイポストの名前から知ってるわよ。タブロイド紙ならともかく、仮にもクオリティーパーがそんな真似するわけないでしょ”

”やったんだよ。ほら、エブリデイポストが”王国国内向け”に出した訂正記事だ。

7（ズイーベン）は、ぺらぺらとスクラップブックをめくり、最後のページを見せる。

今年の7月20日に、『海外向け通信、出直します』というタイトルで、訂正の通知が出ていた。

「チェック機能に不備がありました。……って、そんなじげんの問題？」

「さあな。色々言い訳を書いているが、” 具体的にどんな記事を書てきたのかは、不快になる人もいるだろうから書きません”

それが、エブリデイポストの意思表明なんだろう」

「ふうん。14（セバルツ）、これは没収ね」

「ひ、ひどいっス」

「いいから行進。昼までには、ギーゼキング教官と合流するわよ」

はあい、と気のない返事を返して、再びメルダー・マリオネットは荒野を歩き始めた。

「7（ズイーベン）。貴方の前の任地は王国でしたわよね。」

ひよっとして、これもうちが、共和国が関係してる？」

7（ズイーベン）は、しばらく迷ったようだったが、答えた。

「僕だって、あまり詳しいわけじゃない。」

記事の主な執筆者二人のうち、一人の外国人は、オーリア島の過激な反王国グループと密接な関係を持つているようだ。また、もう一人は王国人名義だが、複数人によるペンネームの可能性もある。そして、このPNは、浮遊大陸カナード国の反王国工作団体の活動に頻繁に名前があがっている。

1（アインス）だって、共和国が、オーリア島やカナード国の反王国工作団体にどれだけ出資しているか、知っているだろう？ 多すぎて、どこの軍閥がどういった意図で指示したのか、あるいは指示していないかったのかさえ、わからない。少なくとも、エブリデイポストによるでっちあげが、王国や王国人の評判に痛烈なダメージを与えたのは確かだと思うけれど」

王国は、数年前アメリカに「政府は人身売買を防ぐための努力を怠っている」と批判され、「監視対象国」にリストアップされた。クオリティペーパーであるエブリデイポストには、根拠となるソースの資格があるのだ。他にも、アメリカの不良兵士が王国の少女を襲った際に、「和姦だと思った。無理強いなどしていない」という

ふざけた答弁を行っている。これらの事件に、エブリデイポストの影響はなかっただろうか？

「それにしても、王国って変わった国ですわね。普通、ここまで悪し様に報道されたのを知れば、デモのひとつや二つ起きるでしょう。まったくの無関心なんて、国民の品位が知れますわね」

「本当に、そう思うかい」

「ええ、ちょうどワタシ達があの人と出会った頃でしたわね。

共和国が王国に輸出した食品に毒薬が混入されていたとか。あの時も、ろくに抗議すらしなかったそうですもの。

きつと、ゴーレムのように、感情がまひしているんじゃないかもしれません？」

ロゼットの言葉に、フ（ズイーベン）は賛同しなかった。土埃除けのローブを目深に被り、答える。

「まずエブリデイポストのでっちあげだが、王国で事情を知った者たちによる不買運動が始まっている。

本格化する以前の6月時点で、前年に比べ売上10万部が減少、抗議を受けて広告をひきあげた企業も続出した。

元々企業にも、宣伝効果が怪しまれていたこともあったから、ちょうど引き金になったようだ。

そして、共和国から王国への輸出は、あれから時間が経っても事件前の三割以上おち込んだままだ。

魚介類や生鮮野菜の影響が特に大きくて、四割以上少なくなった品もある

旅行者も激減して、かつての四割、旅行会社によっては、六割近く減少した。

王国の対共和国感情は、目に見えて、悪化しているようだ」

「待つて。でも、王国は大陸運動祭のリレーを迎えたときも、友好的に接して……」

「その友好的に接してくれた王国人を、リレーの観客として動員された共和国留学生が、国旗を飾った金属竿で小突き回したんだ。ど

「なるか、なんてわかるだろう」

ロゼットは、深く息をついた。粉っぽい土が、口の中に入り込んでじゃりじゃりした。

「詳しいですわねフ（ズイーベン）」

「僕もその場にいたから。途中で交代したけど、走者の護衛としても走ったよ」

「あの自称”ボランティア”の？」

「どこから漏れたのか、妖精大陸のメディアには、特殊部隊員が混じっていることをすっぱぬかれていたけど」

「1（アインス）は、少数民族であるフ（ズイーベン）をリレーに併走させたことが信じられないのだろう。」

彼自身、指令を受けたときは驚きだった。けれど、後にある情報を得て、自分を加えた理由を理解する。

あの日ニーダル・ゲレーゲンハイトがリレーを襲う、というデマが流れていたのだ。

（ありえない話だ。それは、あの人の流儀じゃない）

それでも、フ（ズイーベン）にとっては、心騒ぐ事件だった。

共和国パラディース教団は、わずかにしか接点をもたないメルダ・マリオネッテが、ニーダル・ゲレーゲンハイトに対する抑止力となる可能性がある、と判断したのだ。背筋の凍るような一件だった。

「王国では、その日、ネオメオルヒス騒乱の犠牲者を、近くの寺院でいたんでいたよ。」

騒乱で亡くなったネメオルヒス人や他の少数民族と、パラディース教徒の双方を供養していた」

フ（ズイーベン）の呟きに、ロゼットは目をつぶり、こぼすように吐き出した。

「王国は、ワタシ達の味方になってくれるかしら」

「王国は、西部連邦人民共和国パラディース教団の味方だよ」
「そうね。心強いわ」
その問答がもつ意味は重かった。だからこそ、7（ズイーベン）は嬉しかったのだ。

9

サウド湾についたのは、予定時刻より2時間早い正午のことだった。

ヨゼファイヌ・？・ギーゼキング戦闘教官は、他には誰もいない浜に揚陸したボートの甲板に腰掛けて、メルダー・マリオネツテを待っていた。

「遅かったな」

短く刈った艶やかな黒髪の下、感情を宿さない硝子玉のような灰色の瞳で、彼女はロゼットを一瞥した。

「申し訳ありません」

ギーゼキング教官は、美しい女性だった。細身だが胸から腰にかけてなだらかな稜線を描き、どこか人目をひきつける蠱惑的な雰囲気をもとっていた。

だが、それがまるで、よく出来た美術像のように、あるいは能面のように見えるのは気のせいだろうか。

「次の任地に向かう。早くボートに乗れ」

メルダー・マリオネツテは動かなかった。いつも真つ先に駆け出す14（セバルツ）も、杭槍を握り締めて警戒している。

南船北馬とは、常に旅をするという意味の熟語であるが、この言葉は、西部連邦人民共和国の都市や軍のあり方を示してもいた。北に地盤を置くベーレンドルフ閥は陸軍に、南に地盤を置くヴァイ

デンヒュラー閥は海軍に、それぞれの軍資金をつぎ込むのだ。自然、両者の装備は異なる様相を見せていた。

ロゼットは、皆を代表して、自らの師に訪ねた。

「教官、沖に見える船は、ベーレンドルフ軍閥のものです」

「次の任務は、ベーレンドルフ領で行う。その為のものだ。余計な質問を挟むな」

ロゼットは、そつと胸元の懐中時計に触れた。

かちかちと、三つの針が回りながら時を刻んでゆく。

誰もいない、” 気配だけは存在する ” 浜に、一陣の風が吹く。

風が運ぶのは、刃金と血と、死の匂い。殺す意志を宿した人の匂い。

かちりと、歯車がかみ合う音を、聞いた気がした。

乾いた唇を、かみ締める。

「ギーゼキング教官。ヤーコブ博士は内通者を疑っていました。ヴァイデンヒュラー軍閥の情報が、あまりにもベーレンドルフ軍閥に流出していたからです。

今回の件だってそう。反政府軍の船がアースラ海軍の駆逐艦に尾行された偶発戦闘なら、陸軍が村を包囲できるはずがありません。

最初から、村の位置は特定されていたのですわ」

「それで？」

ギーゼキング教官がちろりと、赤い舌で自らの唇をなめあげる。

そんなわずかな仕草さえ、花のように美しく、蛇のように恐ろしい。

「最初に気づくべきだった。3年前、貴女は監督官として、ワタシ達と一緒にシュターレン寮に同行していた。

遺跡を塞ぐ” 封鎖結界 ” をピンポイントで破壊できる魔術師など、そう多くない。でも、貴女なら可能です」

「……」

「今回の任務はどこがおかしかった。

メルダー・マリオネッテ全員を共和国の外に出したこと。商人が

見かけない顔だったこと。最後に、兵を海岸に伏せてワタシ達を迎えたこと。

任務なんて茶番だったのでしょ。貴女の目的は、ワタシ達を、いえ、20（ツヴァンツイヒ）をヴァイデンヒュラーから引き離すこと」

メルダー・マリオネツテ全員が、20（ツヴァンツイヒ）を中心に円陣を組んで、石弓を構えた。

「やはり、お前は欠陥品だな。1（アインス）。

お前達は余計なことを考えず、任務だけを果たせばよい。

それが出来ないのなら、処分するだけだ」

風が吹いた。砂が舞って、隠されていたものが姿を現す。

後方に、巨大な西洋甲冑型ゴーレムが五体。左と右の側面にそれぞれ兵二十名。

単純計算で戦力差は3倍以上、退路はなし。

ヨゼファイヌ・？・ギーゼキングは、20（ツヴァンツイヒ）に手を差し伸べるようにして、冷酷に言い放った。

「20（ツヴァンツイヒ）。私と共にベーレンドルフ軍閥に来い。

それが万人のためであり、貴様のためでもある。

逢いたいのだろうか？ ニーダル・ゲレーゲンハイトに。

我々なら、会わせてやれる」

ふるふると、20（ツヴァンツイヒ）は首を横に振った。

「わからないのか？ 私は貴様が領けば、メルダー・マリオネツテ全員の命を保障すると言っている。

それとも、貴様は、ともに育った仲間が皆殺しにされるところを見たいのか？」

「ア……」

20（ツヴァンツイヒ）が震える。蒼い瞳を閉じる。砂浜にこぼれた雫は、涙だろうか？

ロゼットは、彼女の気持ちが手に取るようにわかった。自分が人形に戻れば、兄妹たちが助かると、そんな阿呆なこと考えてる。

ぎゅっと、恐怖にふるえる妹の手を、握り締めた。

5（フェンフト）が、7（ズイーベン）が、11（エルフ）が、14（セバルツ）が……、20人のメルダー・マリオネット全員が末の妹に手を伸ばした。

行かなくていいと、お前の居場所はここだと示すために。

「ふっ」

それを見た、ギーゼキング教官があざ笑った。

「爆ぜろ、苗よ」

彼女がコマンドを口にした瞬間、空気が、世界が変わった。

「がああああああっ」

「くうううううう」

5（フェンフト）の二の腕から木の根が飛び出した。7（ズイーベン）の髪からツタが伸びた。11（エルフ）が、14（セバルツ）が、身体中から異質な植物性の何かに身体を食い破られ、呻きながら倒れてゆく。仕組まれていたのだ。食事が、外科手術か、以前埋め込まれた自爆用の術式と同様に、メルダー・マリオネットを、「人形に変える為」の呪詛が埋め込まれていた。

「そのまま引っ張って来い」

ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングが、命令する。ロゼットの腕が、指が、木の棒のように変化して、20（ツヴァンツイヒ）の腕を血がにじむほどに強く掴んでいた。意識が欠けてゆく。組み替えられてゆく。操り主にとって都合のいい人形にするために。

ロゼットは、まわらぬ舌と唇を懸命に動かして言葉を紡いだ。

伝えなければならない事がある。伝えたい気持ちがある。それは、人形では叶わぬことから。

「……大丈夫よ、20（ツヴァンツイヒ）。アナタは、自分の意志で帰るときまで、ここに居ていいの。」

だから、イスカ・ライプニッツ・ゲレーゲンハイト。メルダー・マリオネットが指揮官、アインスが許可します。

「やっちゃんないなさい」

「ン！」

渾身の力を込めて、意志の全てを懸けて、ロゼットは、仲間達は、20（ツヴァンツイヒ）を突き飛ばした。

彼女は身の丈より長い銃身を砂面に向けて、特製の弾丸を装填し、……撃ち込む。

「ほう」

文字が溢れる。着弾点を中心に、湧きあがった文字は球状の魔法陣を描きながら宙空を舞い、ロゼット達を包み込んだ。

氷結する。凍結する。メルダー・マリオネッテの体内に巢食う異常な魔力を凍りづけにし、破碎した。

腕から生えた木の根が、頭から伸びたツタが吹き飛んで、棒切れのように変化していた肢体が生身の肉を取り戻す。

「突撃！」

ロゼットが叫ぶ。指で指し示す方向は後方、西洋甲冑型ゴーレム。ここは敵の掌中だ。包囲を破り、互角に戦える場所までたどり着かなくてはならない。

「行かせると思っのか？」

真っ先に駆けて行く14（セバルツ）を見送り、ロゼットは殿軍としてギーゼキングを迎え撃つ。

振るわれる鉄扇の一撃を、槌の柄で受け止める。

火花が散り、ロゼットは下から、ギーゼキングは上から、互いの得物を振るい合う。

「教官。貴女ほどの人がどうして裏切ったのです！？」

「裏切ってなどいないよ。私は言わば埋伏の薬。

最初から、ベーレンドルフ側の、否、秩序と正義を守る側の人間だ。

メルダー・マリオネッテ・アインス。お前が、勝てぬと知りながら、ヴァイデンヒュラーに与えられた任務を果たそうとするように。私にも果たさねばならぬ使命がある」

「使命？」

「こういうことだっ」

ギーゼキングの左手が魔術文字の輝きをまとい、見えない風の刃を作り出す。

対するロゼットは、光の盾を呼び出そうとするも、間に合わない。不可視の刃がロゼットの首をはねる寸前、後方から飛来した20（ツヴァンツイヒ）の弾丸が結界球を創りだし、風の魔術文字を凍結、破砕する。

アンチマテリアルライフル
「対物狙撃銃とは良く言った名前だ。本質を隠し、本質を顕わしている。」

20（ツヴァンツイヒ）の魔銃には、魔術の素たる文字自体を破壊する力がある。

隠していたのだろう、あの男は、そしてお前達は。その《力》の重要性を知りもせずに」

ロゼットは砂を蹴り上げ、間合いを取って、光の矢を撃ちだして牽制した。

対するギーゼキングは、風を集めて盾を創り、いとも容易く受け止めて見せた。

「魔術戦とは、文字が生み出す《力》と《力》のぶつかり合いだ。どちらのエネルギーが勝るかで、優劣を決する。けれど、20（ツヴァンツイヒ）の銃、そして、あの紅い道化師の焰は《魔術文字そのものに干渉する》……。」

その《力》が必要なのだ。再び神焉の刻を迎える今、次なる世界を正しく導く為に！」

ギーゼキングの推測は半ば正しい。20（ツヴァンツイヒ）の銃に撃たれたゴーレムが行動を停止するのは、装甲を無力化され、魔術文字による回路の一部を凍結、破砕されるからだ。その一撃は強力無比で、同じアーティファクトでなければ防げまい。

（でも、違う。違います。あの焰の翼は、もっと異質な……）

後方で14（セバルツ）が関の声をあげ、ゴーレムの地に崩れる音が聞こえた。

5（フェンフト）が呼んでいる。けれど、離脱できない。そんな隙を与えてくれる相手じゃない。

「メルダー・マリオネッテ・アインス。

私とお前は、欠陥品かそうでないかの差はあれ、同類だ。与えられた使命を果たすただけにここにいる。

だから、破壊してやろう。その役目を果たし、再び地にかえれ人形」

鉄扇から繰り出される風と、槌から放たれる光が交錯する。

光は散り散りに切り刻まれ、ロゼットの胸元が無残に引き裂かれた。

あかい血が迸り、首から下げた銀の懐中時計が宙に舞う。

文字盤の下では、複数の歯車がかみ合い、廻っている。

歯車は、迷わない。疑わない。

ただ己の成すべきことを果たし、己がすりきれるまで天命を全うする。

そこには、ロゼットの理想が、信じる完全が

「ちがう」

思い出した。

思い出してしまった。

忘れていた、忘れようとしていた、あの夜のこと。

「1（アインス）。今助けるっ」

「木よっ」

「ぶっぱなせ」

7（ズィーベン）の繰る鋼糸が、ロゼットに絡みついて、後方へと引っ張った。

風の刃を、11（エルフ）が呼び出したサボテンが盾となって受

け止めた。

5（フェンフト）の掛け声に合わせて、メルダー・マリオネッテが次々と矢を浴びせかける。

「あの日は、ワタシは決意したんだ。人形に戻ろうって。どうしてそう思ったのか、忘れてた」

そうすることで、皆で生き延びようと思ったんだ。

メルダー・マリオネッテの全員が、失われることなく、生きていたいと思ったんだ。

その感情は、すでに人形ではない。人が、抱くもの。守りたいというオモイ。

「ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキング。

ワタシは貴女とは違う。与えられた使命の為だけに戦ってるんじゃない。

使命とか、万人のためとか、そんな薄っぺらな誤魔化しの為じゃない」

その一瞬、ほんのわずかにギーゼキングの能面が割れた。怒りという感情が仄見えた。

「悲しい結末だってわかってる。苦しい結末だってわかってる。

それでも、ワタシは決めたんだ。私達姉弟の未来は、ワタシ達の手で切り開こうって」

着地する。

7（ズイーベン）が鋼糸を解くのに合わせて、ロゼット・アインスは走る。

ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングは、鉄扇で全ての矢を叩き落とすと、魔術文字を紡いだ。

風が吹きすさぶ。砂が捲れる。海が轟く。

創り出されたのは、竜巻。人の手では抗えぬ、暴威。

「そんな魂のこもらない風や魔術で、このワタシを倒せるものですかあああつ」

叫ぶ。

槌に光が集う。ロゼットは、蛮勇にも風の渦に向かい、小さな腕を振り上げた。

腕を振り下ろすと同時に、砂浜を割って光の柱が出現した。貝が、流木が、風が、光の中へと溶けてゆく。その莫大なエネルギーは竜巻をも飲み込んで、ギーゼキングの張った風の障壁ごと海へと吹き飛ばした。

けれど、吹き飛ばされたロゼットの師は、空中で反転し、波打ち際へと着地する。

自らの主を守るように、左右両翼から、半ば人形化した兵士達が集い、壁を作った。

「心の力、とでも言うのか。」

メルダー・マリオネツテ・アインス。姉弟の未来と言ったな。

親に捨てられた劣等民族の人形風情が、家族ごつこのつもりか？」

ギーゼキングは、鉄扇を軍配団扇代わりに高々と掲げ、強襲の為の配置を整える。

「パパは、パパになってくれた。イスカは、パパの娘になった。

行こう。おねえちゃん。だいじよぶ。……いっしょにたたかおう」

長い銃を携えて、蜂蜜色の髪の少女がロゼットの隣に進み出た。

散開したメルダー・マリオネツテが、一人、またひとりと集まって、迎撃と離脱の為の構えを取る。

「20（ツヴァンツィヒ）……」

たとえ血が繋がっていても、子を捨てる親もいる。

たとえ血が繋がっていなくても、親となり、子となろうとするものがある。

愛し合い、夫に、妻になろうと人は寄り添う。

家族とは、血のつながりだけじゃない。きっと、家族であろうとする意思が、絆となって結ばれるのだ。

ならば。

「みんな」

見回す。誰もが笑みを浮かべていた、強い意思を瞳に宿していた。

「戦いますわよっ」

応っ、と強い叫びがあがる。

これは自分達の戦い。家族を守るための、愛するものを守るための、人として当然の戦い。

迷いはない。心を殺す必要も、人形になる必要もない。

（なぜなら）

この鼓動が、脈打つ命の音色が。

（ワタシ達の生きている証だから）

「いいだろう。私は、教主直属部隊”無限の自由”が一人、ヨゼフ・イーヌ・？・ギーゼキング。

火の巨人ロキ、海の巨人エーギルと並び立つ、古の風の巨人を冠する神器が一つ、第三位契約神器カーリが盟約者。

メルダー・マリオネッテ……お前達を殲滅する」

第五話 自らの足で大地を駆けよう

第五話 自らの足で大地を駆けよう

10

「全員、海岸からはなれて。コードS！ I地点で合流の後、コードRで迎撃する。急いでっ」

ロゼット・アインスの指示に従い、三人一組のチームを組んだメルダー・マリオネッテは、東方へ向けて走り出した。

「逃がすと思っているのか」

ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングが鉄扇を前方へ掲げる。根やツタのような魔術生物に寄生された、黒い戦闘服の兵士たちが左右に別れて追撃する。

（ふん。浜に仕掛けた罠は役に立たんか）

ヨゼフィーヌは、予め海岸に武器を隠し、いくつかの物理・魔術からなるトラップを仕掛けていた。

ロゼット達が、違和感に気づきながらも、伏せられていた兵士たちの姿を視認できなかったのもそのひとつだ。

（小賢しい真似をする。戦術を教えたことなど無かったはずだが）

ヨゼフィーヌは、ロゼットを弟子として引き取ったものの、指揮官として必要な知識や技術を教えることはなかった。

彼女にとって、少数民族とは生まれつきの愚者であり、使い捨てるべき蛮族の系譜でしかなかったからだ。

「 1と 2は先行、 1と 2はえん護にまわって。退路を閉ざさせないでっ」

ロゼットは魔術文字を綴って光の盾を展開し、飛来する石弓の矢を最後尾で受け止めながら、次々と指示を飛ばした。

青銅巨人^{ゴレム}を破壊して脱出口を開いたものの、依然状況は最悪のままだ。

殿軍^{しんがり}を押しつけられる事に慣れているメルダー・マリオネッテといえ、撤退戦が圧倒的に不利な事実は変わらない。

だが、反撃の為には、ここで持ちこたえなければならない。

「……っ」

上、右、左、絶え間なく繰り出してくる黒尽くめの兵士達のナイフを、魔術文字の盾で受け、槌で捌きながら、必死で後退を続ける。「ワタシ達は負けないっ。諦めないっ」

小槌を盾に襲い来る三人の刃を受け止めて、ロゼットは魔術文字を綴る。

かつて、 20（ツヴァンツイヒ）が強くなる方法を教えてと訊ねた時、ニードル・ゲレーゲンハイトは、こう答えたという。

『イス力。強さってのはなア、どんな不利な条件でも投げ出さずにあらゆる状況を利用して、勝つ為の布石をひとつずつ積み上げることだ』

彼は、20（ツヴァンツイヒ）が夜眠れないと駄々をこねた折、よく語って聞かせたという故郷の昔話を例にあげて説明した。

『一寸法師は巨大な鬼の腸を突き破って、長靴を履いた猫は魔法使いの巨人をひと呑みにしただろう？ 真の強さってやつは、必ずしも腕力や魔力だけを指すものじゃないんだ』

『じゃあ、ゆうきとか、きてん？』

『そうだ。でも、それだけじゃアない。三枚のお札を効率よく使った時、便所に隠れた非力な小僧は、人食いの夜叉の巢から逃れて、返り討ちにできる。こいつを、 戦術って云うんだよ』

そう教えた当の本人は、自分が戦術家ではないと自覚していたらしい。『突撃一本槍な俺には無い力だ。だから、お前が身につけると、励ましたそうだ。』

教えられたイスカ、20（ツヴァンツイヒ）もまた『パパのいうことは、時々むずかしくてわかんない』といまひとつ理解していなかった。……素直すぎて向いていないのだろう、とロゼットは思っている。

”戦術”という強さを欲していたのは、得なければならなかったのは、他でもないロゼットだった。

20（ツヴァンツイヒ）から又聞きしたニードルの言葉をきっかけに、ロゼットは机上と実戦の両面から戦術を学び、身につけてきた。

幸いにも、師匠はすぐ身近に居た。無論、ヨゼフィーヌではない。今や見る影も無く変わってしまったとはいえ、殺戮人形計画の責任者であるドクトル・ヤーコブは、一昔前にはヴァイデンヒュラー閣にその人在りと謳われた、参謀だった。

（……今は、ただのエロ爺ですけどっ）

ロゼットが宙空に綴った文字が光を発する。目眩ましの閃光で襲撃者の目を灼いて、彼らがひるんだ一瞬の隙に、鳩尾を殴りつけて昏倒させる。

「アインス、聞こえるか？」

先行する7（ズイーベン）が、風の魔術で声を飛ばしてきた。行く手に黒尽くめの兵士が待ち構えているという。北と南からも、伏せられていたらしい部隊が、退路を閉ざすべく回り込んでいるそうだ。

「コードSでI地点へ移動、コードRで迎撃。作戦に変わりはないな？」

「ええ、お願い。教官のことだから、3枚はふせていると思う。前方はまかせせるわ。上手くやってちょうだい」

「死ぬなよ」

「当然」

ロゼットは歯を食いしばる。赤い荒野を駆けて、最強の敵がもう目の前に迫っている。

「よくやる。今回配置した殺戮人形は、肉体性能も、魔法能力も、お前たちの30%増しに調整してあるというのに。ドクトル・ヤーコブ謹製の指揮個体というのは、本当らしいな」

ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングは、倒れた黒尽くめの兵を踏みつけにして、自らが第三位契約神器カリーと呼ぶ鉄扇を振るつてきた。

ロゼットは、受け止めただけで風圧と風の刃によって打ちのめされ、3m^{メルカ}近い距離を吹き飛ばされる。

「……むっ」

ヨゼフィーヌはロゼットに止めを刺そうとするも、追撃を思いとどまり、鉄扇を開いて竜巻の盾を作った。

イスカ・ライプニッツ・ゲレーゲンハイト。20（ツヴァンツィヒ）が撃ち出した弾丸が直撃し、生み出された風の渦は、乾いた大地に霜を残して溶け消えた。

「こちらに加減しているとはいえ、この威力。第六位級神器の水準ではないな」

アブラハム・ベーレンドルフ教主や、パプティスト・クロイツェル総帥は、数年前からニードル・ゲレーゲンハイトを”神焉戦争を勝ち抜くための鍵”と呼び、ベーレンドルフ閥と直属部隊である”無限の自由”に招こうとしていた。

ヨゼフィーヌも、彼女の父、ルートガー・ギーゼキング中將も、生粋のパラディース教徒ではない彼を登用しようとする上層部の意向には反発を覚えていた。けれど、今ならば彼らの意図もわかる。全ての魔法を無力化できる彼の存在、下級神器に上級神器に匹敵す

る力を付与する彼の知識は、あまりに危険なのだ。

「少なくとも、劣等民族の情婦風情に、玩具として与えるには、大
きすぎる力だっ」

20（ツヴァンツイヒ）の援護を受けて、倒れていたロゼットは
再び立ち上がり、武器を構えている。彼女の手から放たれる鋼線を、
ヨゼフィーヌは風の魔術で切り裂いて、打ちかかった。

「所詮、お前たちなど我らが掌で遊ぶムシケラに過ぎぬということ
を、……教えてやる！」

ロゼットと20（ツヴァンツイヒ）がヨゼフィーヌを足止めすべ
く奮戦していた頃、メルダー・マリオネッテの先頭を走っていた1
4（セバルツ）は、7（ズイーベン）の指示を受けて、12、16
とともに、北方から回り込む別働隊の頭を抑えに向かっていた。

個々の能力はともかく、人数に劣るのがメルダー・マリオネッテ
だ。挟撃されては万に一つの勝機もなくなる。分散しているうちに
ある程度の損害を与えなければならない。少なくとも、コードRの
準備が整うまでは。

『いいか、14（セバルツ）。もう一度言っておくぞ。1（アイン
ス）の指示は、生存を最優先だ。敵計略を利用しつつ、事前に伝え
た場所での集合をめざす。さきばしるなよ』

『わかつてるツスよ！』

7（ズイーベン）は心配し過ぎなのだと、14（セバルツ）は思
う。死ねない理由は、自分にだってあるのだ。植物に寄生され

た黒尽くめの少年少女の刃を杭槍で受け止めて、岩だらけの赤い荒
野に火花が飛び散った。

「俺もこうなっていたかもなんて、ゾツとしないツスね」

正確には、こう、だったのだろう。ニードル・グレーゲンハ
イトと出会う前の自分、20（ツヴァンツイヒ）がメルダー・マリ

オネツテに帰還する前の自分。よくは覚えていないが、魔術と薬物で意識をいじくられて、なにもかもがいまいだった。

ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングは、いまだ追いついてはいない。アインスト、20（ツヴァンツイヒ）……仲間たちの中で最も幼く、弱かった少女が食い止めている。

「戦わされてるアンタ達にうらみはないスけど」

黒尽くめの少年少女達が、石弓を放って14（セバルツ）を牽制し、距離をとって魔術文字を紡ぐ。

この世界における魔術の根底は文字だ。ヒトが文字を刻むことで世界は変わり、ヒトこそが最も魔術の力を引き出せる。だからこそ、神話の竜や異属はヒトに化け、契約神器やゴーレムはヒトの使う道具やヒトガタを模して造られた。……その延長に、ヒトをドウグとするメルダー・マリオネツテ計画は存在する。

「……っ」

「……っ」

無言で放たれる火の玉の斉射が、雷の矢の狙撃が、14（セバルツ）達に向けて襲いかかる。……あの人は、かつて何と言ったろうか？ こんな魂のこもらん刃や魔術で、この俺様が倒せるか。

「20（ツヴァンツイヒ）。イスカ・ライブニッツ・ゲレーゲンハイト……」

14（セバルツ）が呟くのは、大切に思う少女の名だ。恩人であり、恩人の娘であり、弱い自分が守りたいと願う少女の名だ。もしも、意志が魔力を導くなら、心すら操られた可哀想な人形に、負ける道理などありはしない。

14（セバルツ）は地を蹴った。12と16が浮遊魔法をかけてくれる。火と氷の嵐を空高く跳んで避け、次の文字が刻まれる前に着地、突撃する。敵が刃に持ち替えたところを、魔術の鋼をまとった文字通りの鉄拳でぶん殴った。

何度も使える手じゃない。けれど、モンスターに対処するため武器と魔術の発展したこの世界は、徒手空拳の格闘術が失われて久し

い。ゆえに、実戦においては、”認識できない”打撃となる。それは、”魔法のない世界”で無から火の玉をぶつ放すようなものだから。

二人を叩きのめした14（セバルツ）は、後を12、16に任せて疾走した。狙うは大物。彼の杭槍が活かせるゴーレムだ。

「あの子にカツコいいと見せて、せつくすあぴーるっスよ！」

アースラの荒野。海岸から続く、迷路のようにいりくねった岸壁にも、わずかに開けた場所がある。

その広場を遠くから眺める岸壁の上、不自然な大岩に隠れて、黒尽くめの少年は機会をうかがっていた。

彼が命じられたのは、その開けた場所にメルダー・マリオネットを誘導することだ。逃走可能なルートをメルダー・マリオネットが選択した場合、岩を落として逃げ道を塞ぐ。誘い込んだ後は、北や南に伏せている仲間たちと合流し、四方から十重二十重に追い詰めて、広場に隠し敷いた簡易式の地雷魔法陣で吹き飛ばす。

ターゲットである20（ツヴァンツイヒ）だけは、契約神器に守られて生き残り、弱ったところを捕獲するという作戦だ。

「ふーん。ここもか。キョーカンもいじわるだね。わざわざこんな手の込んだ罠はってさ。でも、お師様ほどじゃないか。あのひとのセーカクの悪さはスジガネいりだから」

背後から掛けられた声に、黒尽くめの少年は動揺も見せず、反射的に襲いかかった。黒い手袋で槍を握り、近づいてくる細身の少女を貫いたが、手ごたえが無い。

5（フェンフト）は、まるで連続して瞬間移動するかのようにコマ送りで消えながら、敵の攻撃をすり抜けて、輪型の刃を回しながら接近した。

「時間加速1・2倍。ちよいと反則の魔術だよ」

5（フェンフト）は、黒尽くめの少年の胸板を十字に切り裂き、そのまま下へと蹴り落とした。

「男の子相手じゃ、楽しくないね。こうボロリもあるよ、アハンみたいな役得が欲しいよね」

ごそごそと地面に魔術文字を描きながら、5（フェンフト）がこぼした発言を聞いて、この場所に近づく為同行した女の子、6と10が、ひそひそと何かをささやきあいながら一目散に逃げ出した。
「ちよっと、なんでアタシからはなれるの！」

羊の群れに狼が紛れ込んでいたのだから当然です。

地雷魔法陣の起爆役を担った黒尽くめの少女は、慎重に機会を伺っていた。

もっとも望ましいのは、イスカ・ライブニツ・グレーゲンハイトが、他のメルダー・マリオネツテとともに逃亡し、爆破範囲に踏み入ったところで起爆することだった。

だが、彼女はヨゼフィーヌと戦闘を続けており、それは予想された事態でもあった。

少女は自らの指を傷つけて、血を魔術文字の刻まれたナイフに垂らす。この刃を足元に刺せば、魔法陣は完成する。ターゲットの半数はすでに爆破予定範囲に入った。これ以上待てば、追撃する友軍にも被害が及ぶだろう。

「任務……」

ナイフを突き刺す。紫の光が円陣と方陣を描きながら進み、広大な有毒ガスの魔法陣を形成する。

「……完了」

「よし、コードR。成功だ」

不意に聞こえた声に、少女は愕然とした。

風の魔法で迷彩したのか、わかめのように伸びたボサボサ髪の少年が、全く気配を感じさせずに眼前まで接近していたからだ。

「え？」

そればかりではない。魔法陣の創造が終わらない。紫の光は複数の六芒星を刻みながら走り続け、更に長大な円を描いてゆく。それは、メルダー・マリオネットだけではなく、追撃する友軍や北と南から挟撃中の伏兵まで、その内側に取り込んでいた。

魔法陣内の大地から、ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキング旗下の黒尽くめの兵士とゴーレムを狙って、一斉に植物性のツタが伸びた。少女達が作った魔法陣のエネルギーを取り込み、上書きする形で、新たな拘束の魔法陣が発動したのだ。

この不意打ちを理解できたのは、黒尽くめの少女だけだったろう。反射的に拘束を有毒の刃で切り裂いて、目の前のメルダー・マリオネットの一個体に襲いかかった。毒に光るナイフをかわし、7（ズイーベン）はうつすらと微笑んだ。

彼の両手が鋼系を操る。荒野に複数の文字と円を加え、風の魔法陣が形成される。立ち昇った強風に煽られて、黒尽くめの少女は跳ね飛ばされ、再びツタの餌食となった。

「なぜだ？ なぜ我々が負けるのだ？」

少女には理解できなかった。自分たちはターゲットの三割増しの性能があると教えられてきた。個々の力で勝り、人数においても勝っているはずの相手にどうして打ち負ける？ そもそも、自分たちに劣る相手が、時間を稼ぎ、魔法陣を書き換え、罠にかけることなどできるものだろうか。

「ニンギョウは成長できなくても、ニンゲンは成長するからだ」

「お前たちだって同じニンギョウのくせに」

「違う。君たちも、僕たちと、俺たちと同じニンゲンなんだ」

「我々は」

叫ぼうとする少女の首の後ろを、7（ズイーベン）はナイフの柄

でついた。意識を失い気絶した少女を、彼は哀れに思う。自分たちと彼女たちにどれだけの差があるだろうか？　ただ出会った相手が違っただけだ。機会は平等にあつて、任務を命じられたのは偶然で、にも関わらず、自分たちだけは己の意思を取り戻すことができた。

世界は不平等だ。自分たちと同じ少数民族は、時に生まれることさえ許されずに墮胎を強いられ、住む土地を追われ、望まぬ結婚を強いられて、飼育殺しの一生を送る。熱核魔術の実験地に住むことを強いられた部族は、生まれながらの奇形や奇病に苦しみ、短い一生を閉じる。

（西部連邦人民共和国パラディース教団。すべてのはじまりをこわさないと、悲劇はなくなるらない。けれど、僕たちは教団を守ることですでに生かされている。なんて皮肉か）

「よお、ぶじかぁ！」

「7（ズイーベン）っ」

遠くから12、16を連れた14（セバルツ）と、2、9に守られた11（エルフ）が走ってくる。

「だいじょうぶだ。見事だよ、11（エルフ）。この急づくりの魔法陣をよくいじしてくれた」

「えへへ。……14（セバルツ）。私、がんばったよ」

ほんの少し頬を染める11（エルフ）を、そばかすの浮いた赤毛の少年、14（セバルツ）は見えていなかった。気絶したツタに縛られた黒尽くめの少女に目を奪われている。

「このかつこう、なんつーか、えろっちくていいなあ」

「っ！」

パン、と頬を打つ乾いた音が、アースラの荒野に響いた。

「ばかつ」

「ちよ、ジョーダンっスよ。11（エルフ）、そんな怒らなくてもいいじゃないスカ？」

「まだ戦いは終わっていないんだぞ。かんべんしてくれ」

こんなところで痴話喧嘩をやらかす二人に、7（ズイーベン）達

は思わず脱力した。

11

静かになった戦場で、ロゼットは荒い息を吐きながら、構えた槌を降ろして、ヨゼフィーヌに降伏を勧告した。

「伏兵と地雷魔法陣をつかったもはんてきな計略。だからこそ、読みやすく、逆用もできます。」

教官。ワタシ達の勝ちですわ。普段の貴方なら、こんな手には引つかからなかった。教え子とあなどったのが、貴方の敗因ですわ」
ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングは俯いた。びゅうびゅうと荒野を渡る風の音だけが響く。赤い大地の土が舞って、青い空の下で踊る。

「ハハハハハ」

風の音に交じって、ヨゼフィーヌがかすかな嗤い声をあげた。

「……教官？」

「1（アインス）。その通りだよ。教科書通りの作戦を、殺戮人形を使って行う。そのことにこそ意味があった。」

教え子だから侮る？ 当然だろう。師を超える弟子など存在しない。そして、劣等民族風情が、我々パラディース教徒に敵うはずもない。これは天の意思で、世界の理だ」

「何を言っているんですの？ もう決着は……」

ヨゼフィーヌの短く刈った黒い髪が、逆立つ。彼女の手握られた鉄扇が、青い光を帯びて、魔術文字を描き出す。次に円、三角、五芒星……。光がはじけた時、そこにいたのは、6mメルカ近い半透明の怪物だった。顔は虎に似て、茶の毛皮と青光りする鱗に覆われた巨大な体躯。6つの脚と、7つ頭の蛇の尾、鷲の爪、竜の翼をもった複合怪異キメラがそこにいた。

「契約神器にも、ヒトと同じように、純然たる階級差が存在する。携帯可能な魔術道具に神器核を埋め込むことで、性能を強化した第六位級。」

青銅人形のような大型魔術道具に埋め込むことで、意志の伝達や高度な使役を可能とする第五位級。

空を飛び深海を泳ぐ、ヒトの限界を超える力を付与する第四位級。けれど、これらは所詮下級の神器に過ぎない。真の使徒たるパラデイス教徒が、世界樹より授かった神々の力を見るがいい」

ヨゼフィーヌが、キメラに跨る。竜巻と見紛う暴風を残し、第三位級神器カリーと担い手が飛翔する。

「情報の収集は終わった。殺戮人形計画は、ベーレンドルフ閥の脅威とはなりえない」

高々度まで上昇したヨゼフィーヌは、キメラとともに急降下し、メルダー・マリオネツテに襲いかかった。

「14（セバルツ）。お前の拳は奇襲にしか使えない」

急降下すると同時に振るわれた、巨獣の風の爪に引き裂かれ、赤い髪の少年は血をまき散らして吹き飛んだ。

「11（エルフ）。支援と回復しか使えぬ術者など無用の存在だ」キメラによる体当たりを受けて、長い髪の少女は真紅に染まって地を転がった。

「7（ズイーベン）。鋼線と魔法陣を組み合わせた戦闘法も、貴様では手品に過ぎない」

再度上昇。高空からのキメラの吐息が、空気による砲弾と化してもさもさ髪の少年を押しつぶした。

「5（フェンフト）。時間加速の魔術は強力だが、紫の賢者には遠く及ばない」

キメラがいなくな。羽ばたく竜の翼から輝く文字が生まれ、複数の小さな魔法陣を作り出す。魔法陣から発する青白い閃光が、5（フェンフト）を中心とする半径50mを薙ぎ払った。^{メルカ}

遠方で、次々と討ちとられてゆく仲間達を、ロゼットはどうする

こともできなかった。

「なんなんですよ、これは」

強さの次元が違う。戦術とか、ヒトの力でどうにか出来る相手じゃないかった。

驕っていたのはヨゼフィーヌじゃない。思いあがっていたのは自分だ。先ほどまでの成功は、絶対的な戦略的優位に立った相手に、いいように弄ばれていただけ。

「地を這え。ムシケラ」

高々度より打ち出された、青白い閃光と風圧弾の爆撃を受けて、ロゼットは爆ぜ飛んだ。

共和国暦1000年の始まりから、ミッドガル大陸中東海地方は、二つの異なる勢力が対立していた。

ひとつは、浮遊大陸アメリカを中心とするアース神教を奉じる国々。もうひとつは、中東海地方土着の宗教であるヴァン神教を奉じる国々。

中東海地方は、発掘される魔法石の利権や、民族紛争を巡り、数多の意思がぶつかりあう火薬庫となっていたのだ。

ヴァン神教原理主義を掲げる複数の軍事組織は、『反アメリカ』

『反資本主義』『反民主主義』を旗頭に多くの犯罪結社と結びつき、

『聖戦の基地』と呼ばれるひとつのネットワークをつくりあげた。

彼らが飛行人形を奪取してアメリカ本土に空爆を加えたことをきっかけに、激怒したアメリカは防衛とテロリズム根絶を訴えて、『聖戦の基地』が潜む複数の軍事介入を開始した。対テロ戦争の幕開けである。

もっとも、自由だの正義だのを掲げていても、アメリカの内心の

目的は中東海地方の魔法石鉱山の奪取にあった。反対した白妖精大陸のいくつかの国も、平和だの人道だの訴えながら、その実、自分がもつ魔法石の利権が奪われるのを嫌っただけである。これらの国々は『聖戦の基地』に協力する一部国家政権の、非道な虐殺や民族浄化に対しては一切口を噤み、そればかりか公然と支援すら行っただから。このような国々のどこに人道や平和を唱える資格があるだろう？

『聖戦の基地』もまた、正義のレジスタンス等ではなく、ただの邪悪な軍事組織と犯罪結社の集団に過ぎなかった。

彼らが襲うのはアース神教徒ではなく、同じヴァン神族の信者達だった。市場を襲い、村を襲い、食糧や女性、子供を略奪する。軍事力を盾に脅して麻薬の栽培を強い、時には井戸を掘ってインフラを整えようとする外国のボランティアを襲った。『聖戦の基地』が権勢をふるうためには、根拠地である地方や国々が貧困と生活苦で絶望していることが望ましかったからだ。そうして彼らは自ら害したヴァン信徒に悪魔のように囁くのだ。「悪いのはすべてアース神教徒だ。彼らを皆殺しにすれば、今より豊かな生活ができる、失われたものの仇を討つことができる」と。

かくて、悲劇は連鎖する。アースラ国や中東海を舞台に、大陸会議連合軍と海賊・テロリスト、双方の支援国による紛争が長期に渡って続いた。

その『聖戦の基地』や大陸諸国の反政府軍に武器を流していたのが、西部連邦人民共和国だった。西部連邦人民共和国は、対テロ戦争に協力すると言う名目で、自国の少数民族を殺し、収奪し、圧制を加えながら、裏ではテロリストを相手に商売を行い、収益をあげていたのである。

アメリカは、軍やNPO・NGOに至るまで、共和国製武器を使用していることをレポートにまとめて告発したが、西部連邦人民共和国はとりあわなかった。というより、何もできなかったのかもし

れない。西部連邦人民共和国は実質、各軍閥による連合統治であり、教主であるアブラハム・ベーレンドルフとて、すべてを意のままに動かすことはできなかったのだから。

時は流れ、『聖戦の基地』の根拠地であつたいくつかの国の政権が倒れた頃、ひとつの陰謀が動き出した。各国の民間人拉致や偽札製造、発掘した弾道弾乱射で悪名を響かせた西部連邦人民共和国の隣国、ナラール国が、遺跡から発掘した大量殺りく兵器『熱核術式弾道弾』を中東海地方のシーラス国に持ち込み、復元と研究を始めたのだ。アース神教側の中東海地方最大の根拠地であるエルサリヤ国は、事態の收拾のため特殊部隊による越境調査を計画する。

時を同じくして、『紅い道化師』として名を馳せる遺跡荒らし、ニーダル・グレーゲンハイトが、突如として西部連邦人民共和国から姿を消した。発見されたのは、共和国および中東海諸国に隣接するパルマーナ国。彼は地元のアース神教との共存を目指すヴァン神教徒の長老たちの依頼を受けて、土地改良のための魔道具を発掘・修繕しつつ、略奪を働く『聖戦の基地』の構成部隊のいくつかを撃退していた。

そして、西部連邦人民共和国ベーレンドルフ軍閥、教主直轄部隊”無限の自由”の將軍の一人、ルートガー・ギーゼギングに、パプティスト・クロイツェル総帥より、ニーダル捕縛の指令が届いたのは、およそ一か月前のことだった。

共和国暦1007年、若葉の月（3月）11日目。

灰の混じった黒髪の壮年の軍人、ルートガー・ギーゼギング中將は、アースラ国南部のパルマーナ国とアースラ国の国境近くに敷い

たキャンプで、時を待っていた。

「御息女が”人形”との交戦状態に入ったと連絡が届きました。援軍を派遣しますか？」

一人の士官の申し出に、ルートガーはゆっくりと首を横に振って、正午を過ぎようとする時計を見た。

「あの子は上手くやるさ。私の自慢の娘だからね」

不精髭の浮いた顎を撫でて、仮設のベンチに深々と座りなおす。

「少尉。疑問があるのかい？ 今回の作戦に」

「いえ、そんなことはありません。我が忠誠は常に教主と共に」

彼は必死で平常心を繕っているが、疑問が部隊全体に霧のように漂っていることをルートガーは感じ取っていた。

たかが一人の魔術師を捕らえるには、今回の動員は大がかり過ぎるのだ。

通常、第六位級契約神器の盟約者はおよそ魔術師10人、一分隊に匹敵する戦力に数えられる。第五位級契約神器の盟約者で数倍にあたる一小隊。第四位級なら一中隊規模だ。そんな貴重な戦力にも関わらず、今回の任務では10名もの盟約者が参加した。純粹戦力においては、一個大隊、あるいは、それ以上にも匹敵するだろう。そんなものを盟約者で足りない、一人の流れ者の魔術師にあてるなど、非常識も甚だしい。

（……といっても、あの機密事項が真実なら、この戦力でも危ういがね）

”無限の自由”に所属する将官以上の首脳だけに知らされた、恐ろしい事実が存在する。共和国歴1006年の夏、総帥、パプティスト・クロイツェルは、ネメオルヒス地方でニードル・ゲレーゲンハイトと遭遇戦闘を行い、彼を取り逃がしたのだ。

ルートガー・ギーゼキングは確信している。パプティスト・クロイツェルは、手を抜いた。だが、どれほどの気まぐれがあっても、

あの怪物から逃れ得る者がいるなど信じ難かった。ベーレンドルフ
閥も、ヴァイデンヒュラー閥も、ニーダル・ゲレーゲンハイトには
幾度も苦渋を舐めさせられている。偶然では片付けられないだけの
価値が、力があるのか、ルートガーは己の目で確かめたかった。

「国境より連絡。」道化師”、国境を越えました。こちらに真つ直
ぐ向かって来ます！」

監視者からの報告を受けて、ルートガーは灰色の目を細めた。

「往こう。出陣だ」

そうして、街道で待ち伏せたルートガー・ギーゼギングは、鷹の
ように鋭い目でを越えてきた人影をいちべつした。

元は白かったのだろう、土で汚れたボロボロの長いシャツドレス
をまとい、赤い首巻を風にたなびかせて、強い足取りで北西部を目
指している。

「ニーダル・ゲレーゲンハイトだな」

道を阻むように立ちはだかったルートガーの問いに、赤い首巻の
男は応えなかった。無言で高低差の激しい街道を歩き続けたが、わ
ずかも進まないうちに200人余りの武装した集団に包囲されてし
まった。

「てめえら……『聖戦の基地』に見せかけて、そっちはシーラス、
そっちはイラーナの兵士かア。スポンサーの無理難題に付き合うの
も大変だな、オイ」

無造作に投げかけられた男の言葉に、兵士達の一部は苦笑した。
繋がりがあるのは公然の秘密とはいえ、彼らもいっぱしの国軍の
兵士だった。支援国の頼みとはいえ、テロリストのコスプレを強い
られるのは、確かに無理難題に他ならない。

「で、俺がニーダル・ゲレーゲンハイトだが、西部連邦人民共和
国パラディース教団のお偉いさんが、しがない穴掘り師に何の用だ
い？」

「私はルートガー・ギーゼギング。共和国の中将だ。貴殿の誤解を
解きに来たのだよ」

ルートガーは慎重に言葉を選んだ。彼の当初の予定では、アメリカを非難しつつ、被害者である『聖戦の基地』に扮した兵士達に戦争根絶を訴えさせることで、ニーダルに協力を仰ぐつもりだった。

この手の偽装や自演行為は西部連邦人民共和国ではよくあることだ。少数民族が暴れたので鎮圧したという記録映像をよく見れば、加害者の集団の民族衣装の着付けが大間違いだったり、あまつさえ共和国兵の軍刀を持っていたり、平和と協調を謳った世界規模の祭典で、五十民族共存の看板を掲げて民族衣装で舞台にあがった子供達が、全員パラディース教徒だったのが後になって他国にバレたりする。

「貴殿と我々の間に、数々の行き違いがあつたことは事実だ。これまでの不幸な経緯ゆえに、貴殿は我らを誤解している。

我々は政府や国、民族といったくびきから人民を解放し、偏見や差別という物をなくすことで、真なる平和をこの地上にもたらそうとしているのだよ」

ニーダルは、黒い目で、ルートガー・ギーゼギングの灰色の瞳をにらんだ。

「その割には、トラジスタンやネメオルヒス、モデュール等の国々を侵略して併呑したな？ 撃退されちまったが、ベトアーナやイシディアにも戦争をふっかけたし、王国や東南海諸国への領海侵犯もしよっちゅうだろう？」

「公海の巡察にいいがかりをつけられただけだ。

そもそも、侵略とは人聞きの悪い言葉を使う。我々は残虐で愚かな指導者達から、貴重な文化と歴史を守るために、保護したのだよ。現にトラジスタンもネメオルヒスも、パラディース教の庇護によつて、蛮人の王の下では得られなかった繁栄を迎えているではないか？」

ルートガーの言葉を聴き、ニーダル・ゲレーゲンハイトはわずかに唇を噛み、こぼれた血を飲み込んだ。生ぬるい、鉄の味がした。「かつては、400以上を数えた西部連邦人民共和国の諸民族が、

パラディース教徒の政権掌握後、みなごろし殲滅と強制結婚で50民族にまで
粛清された。

350民族の血統断絶。それを政府や国、民族といったくびきからの解放というなら、俺はつきあえん。貴重な寺社を焼き払って産廃放置場をおつ建て、口伝や書物を都合よく書き換えることを保護とは言わん。パラディース教徒だけが繁栄する支配の下で、他者の誰もが等しく苦しみ、踏みにじられる社会を平和と呼ぶのなら、それはただの地獄だ」

青空の下、赤い大地の上で、白い衣をまとったニーダル・ゲレーゲンハイトは、黒い防塵コートを羽織ったルートガー・ギーゼギングを正面から見据えた。

「俺は、王国人以外なら、どこの国、どのような地位のヤツの依頼でも受ける。だが、ルートガー、あんたのような奴はア、お断りだ
っ」

ほう、と、ルートガー・ギーゼギングはわずかに不精髭の残る口元を歪めて、ニーダルの挑発的な視線を受けた。

「貴殿の愛人の命が、我々の手中にあると言ってもかね？」

「ぬ、ぬあんだとオ」

ニーダルの顔が、蒼白になった。顔からタラタラと脂汗を流しながら、ガタガタと震えだす。

「ルートガー・ギーゼギング。てめえ、人類の半分を手にかけてうなんざ、とオんでもない大悪党だなッ」

「……世界中の女性全部を愛人認定する貴殿よりは善人のつもりだ」
じゃあ、三丁目のなになにか、それとも4番地のなんちゃらかとお経のように続けるニーダルを無視して、ルートガー・ギーゼギングは本題に切り込んだ。

「イスカ・ライプニッツ・ゲレーゲンハイトの身柄は、私の手の者が押さえている。交渉に応じる気はあるか？」

「断る」

「……………っ!？」

予期せぬ返答に、ルートガーの整った眉と鋭い瞳に動揺がはشتた。

「誰の名前を出すかと思えば。……あんた、勘違いしてるだろ？」
「ほう。それは、貴殿はもう、あの性奴隷を必要としていないということかね？」

「逆だ。あいつに、イスカ・ライブニッツには、もう俺のような口クデナシは必要ないってことだ」

ニードル・グレーゲンハイトは、遠巻きに囲む兵士達を無視して、再び足を進めはじめる。ルートガー・ギーゼキングは、交渉は決裂したと判断し、腕を振るった。

「撃て　　っ」

石弓の矢が雨あられと放たれて、白い衣を蜂の巣のように引き裂いた。真紅のコートに包まれた腕が空に伸びて、中空より炎を、焰の中から三日月十文字鎌槍を召喚する。その槍を大地に叩きつけ、棒高跳びの要領で、ニードルは空を舞う。

彼の手が魔術文字を綴り、無数の火のつぶてが撃ち出される。一撃の威力こそ低い炎の弾丸は、槍を中心に大地へ魔法陣を描き、赤い焰が迸る。

「吹っ飛べ」

魔法陣から生じた爆風が兵士たちを薙ぎ倒す。けれど、爆心地にいるはずのルートガーは、土埃ひとつ浴びてはいなかった。

「狙い撃て　　っ」

シーラス、イラーナより借りた兵士は元より罔。生きた人を盾にするのは、古来より続く共和国の基本戦術。

中空の道化師へ向けて、四方の岸壁の上に伏していた狩人が次々と光の矢を放つ。第六位級契約神器”エルヴンボウ”。その矢より逃れ得る獲物なし！

「だからよ、そうゆうところが、いけすかねエつつてんだッ」

戦場の空気が変わった。光の矢が燃え尽きる。ニードル・グレーゲンハイトが背にまとうは異形の焰。樹にも機にも獣にも似たアカ

イナニカ　　。

狙撃主達は次々と打ち倒されて、燃える流星となった魔術師は、指揮官へと突撃した。その正面へ、風の魔術で迷彩されていた第五位級契約神器”トロール”が巨大な棍棒を叩きつけ、……武器諸共に灰と消える。逃げ出した操者と、援護するつもりで気絶した兵士の群れから飛び出した第六位級契約神器”ルーンソード”の盟約者達は、追撃する彼によって片端から殴り飛ばされた。

「なるほど、ようやく腑に落ちたよ。パプティストをして仕留めきれなかった理由。教主が”鍵”と呼ぶ理由。認めようッ。貴殿は”無限の自由”の一員足りうるチカラを持っている。なればこそ！」
ルートガー・ギーゼキングは、佩剣を抜いた。彼は目前に迫る脅威に対し一步も退かず、不精髭の浮いた口元には笑みすら浮かべていた。

「それだけの見識と力をもちながら、なぜ色に溺れ劣等民族などに拘泥する？ あのケダモノどもは未開地開発に重要な家畜であり、性的欲求を晴らすための娯楽品だ。私の一撃を受けて、目を覚ますがいい
」

「寢言はア、寝てからほざけええ」

アカイナニカをまとったニードルと、ルートガーの赤黒く染まった刃がぶつかりあった。衝突した魔力の渦は互いを相はみながら火花を散らし、……一瞬の後、赤黒い魔力によって、焰は食われて駆逐された。翼を失った獣は、重力によって落下するのみ。

「そうかよ。中將様って時点で気付くべきだったぜ。あんたもエーエマリツヒのクソジジイと同じ……」

地に叩きつけられた哀れな道化師を、偉大な剣士は堂々と見下ろした。

「もう一度名乗りをあげようか。私は、教主直属部隊”無限の自由”が一人、ルートガー・ギーゼキング。

生きとし生けるもの全てを殺す魔剣、第三位契約神器ダインスレイブが盟約者だ。

救世の翼の後継よ。……貴殿の煩惱ぼんのうを殺し、正しき道へと誘おう」

「そいつは悪くない話だ。だが、聖人君子なんざガラじゃない」

大地に突き立った槍を手に、ニーダルは立ち上がる。

生きとし生けるもの全てを殺す。

法螺レヴァティンじみた前口上ではな

い。ニーダルが先程まどつていた”始まりの炎”は完全に消し飛ばされた。

「俺は、ただの」

その翼は、姉も親友も、守りたいものを何一つ護れなかった阿呆が残した末練。

受け継いだのは、恋人も戦友も失い、養女すら幸せにする資格を持たなかったそれ以上のド阿呆。

でも、そんな馬鹿だから出来ること、馬鹿にしか出来ないこと、護れないモノがあるはずだ。

「オトコなんでなっ」

遙かな昔、世界樹を焼き滅ぼした焰の残滓と、生あるもの全てを殺す呪われた魔剣が、青い空と赤い大地の狭間で再び交錯した。

最終話 澄み切った青空の下で

最終話 澄み切った青空の下で

1
2

共和国暦1003年霜雪の月(2月)25日目

メルダー・マリオネツテとニーダル・ゲレーゲンハイトに、別れの朝がやってきた。

見張り小屋の清掃も終わって、あとはヴァイデンヒュラー軍閥から来る、迎えの使者を待つばかりだった。他に人のいなくなった食堂を見渡して、ロゼットは、ここで彼と過ごした時間を決して忘れないだろうと想う。

指揮個体の少女は、薔薇の彫刻があらわれた銀の懐中時計を首から外して、ニーダルに差し出した。

「この時計、お返しします。七日間、ありがとうございました」

最初は討つべき敵だった。けれど今ではロゼット達の命を救い、はじめて人間としての時間をくれた、かけがえのない恩人だった。

ニーダルは黒い眉をしかめて、小さな両手と、その上に載った思いの品を見つめた。

「もってけ。何かの役には立つだろう」

「でも」

「いいんだ。オジョーにゃ、似合ってるしな」

トクンと、心臓の音が高鳴る。赤らめた顔と、湧き上がる情動を隠すように、ロゼットはうつむいた。

「……………」

抱きつきたかった。胸に顔をうずめたかった。助けてと叫びたかった。

でも、できない。できるはずがない。それは人形としての自分自身を否定することだから。同族と殺しあわされ、殺めてきた命を、流してきた血を、無為にすることだから。心が震えて立ち尽くす少女の首に、ニーダルは銀時計を架け直した。

「お前、きつといい女になるよ。10年経ったら殺しに來い。そんなときや優しく抱いてやるからよ」

甘く、重い空気を振り払うように、ニーダルは軽口を叩く。

「10年も待たせませんわ。必ず貴方を、貴方の前にやってきます」
たわいのない冗談に、ロゼットは笑みを形作る。

「期待しないで待つとくさ」

だから、そのときは、どうかワタシを。……殺してください。

「生きのびるよ。ロゼット・クリュガー」

ポンと頭に置かれた手は、幼子をあやすもの。オンナノコにするような、抱擁じゃない。

でも、その掌は熱くて、ニーダルの言葉を、ロゼットは胸に刻み込んだ。

約束、したのだから。

生きる。ワタシは、まだ、生きている。

共和国暦1007年、若葉の月（3月）11日目正午過ぎ。アイスラ国サウド湾近郊の荒野…

ロゼット・アインスは、四肢を苛む激痛の中で、意識を取り戻した。

ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングによる上位神器の空爆を受けて、吹き飛ばされたのだ。即死しなかったのが不思議なくらいだ。

死んだと思った。死ねないと思った。生きていたい、と。

そう、まだワタシは。ワタシの、人間としての気持ちを何一つ、あの人に伝えていないのだから。

本当の気持ちを伝えるまで、倒れてなんていられない。

「しねませんわよ」

生きる。生き延びる。もう一度、逢うのだ。

ロゼットは、足掻くように、痛みに震える手で大地に指を立てた。這う。虫のように無様に、地を這いずる。目はよく見えないし、骨もきつと何本か折れているだろう。

どれだけ進んだろうか、かすかに乾いた音を立てて、鎖のような何かが、赤土で汚れた白い指にひっかった。

「あのひとの……ペンダント？」

不意に、ロゼットの呼吸が楽になる。薔薇をあしらった銀細工の懐中時計から、白く輝く文字が生まれ、赤く染まった少女の身体を覆いつくしてゆく。破られた肌、引きちぎられた肉、露出した骨、そういったものが、光に包まれて、元の肉体へと戻ってゆく。癒しと防御の魔術。それが、懐中時計に込められた力。

「また、すくわれましたわね」

それが、あの人がこめた魔術なのか、もともとマジックアイテムとして備わっていた力なのかはわからない。

……もってけ。何かの役には立つだろう。遠い言葉を思い出して、ロゼットは微笑み、懐中時計を首から下げた。

メルダー・マリオネッテの仲間たちも、作戦の通りに動いたなら、生きているはずだ。

「基本コードをS。I地点で合流の後、コードRで迎撃」 生存を最優先に、敵魔法陣を利用して反撃を図る。

ロゼットが魔法陣に組み込むよう指示した魔術は、範囲内における敵の束縛と、身体能力・魔法抵抗力を向上させる結界の構築。

20（ツヴァンツィヒ）が防戦しているのか、少し離れた場所から轟音が響いてくる。そして、遠方からはボロボロになった、けれ

ど、目だけはららんと輝く少年少女たちがこちらへと近づいていた。

先頭を歩いていた、普段の三割り増しに髪が乱れた、ぼさぼさ頭の少年、7（ズイーベン）が唇をつりあげた。

「1（アインス）の作戦、石橋をたたきすぎだとおもったが、正解だったようだな」

「教官が相手です。用心にこしたことはありませんわ」

互いに笑う。それで、通じた。圧倒的な神器の力をみせつけられてなお、誰一人として、戦意を失ってはいなかった。

「20（ツヴァンツイヒ）の支えんに向かいます」

ロゼットは戦場を振り返る。メルダー・マリオネットの仲間たちも彼女に続く。そこで、14（セバルツ）が制止した。

「ちよつと待って。1（アインス）、その格好、いろいろと見えてヤバイっす」

「14（セバルツ）。オマエというヤツは、時と場合をおおお」

「ばかああ」

「ええ~~~~っ」

7（ズイーベン）の鋼系が14（セバルツ）の喉首にからみつき、11（エルフ）が物凄い勢いで平手打ちを繰り返す。

「男どもはぜんいん、目えつぶれ」

「そう言って、近づいてくる5（フェンフト）はなんなんですよ！」「なんか手をわきわきさせて荒い息で突撃してくる5（フェンフト）を、6と10が必死でしがみついて止める。

「もう、どうして、いつもワタシ達はこうなんですの〜」

そりゃあ、師匠筋のせいじゃないスカねー。絶叫を横に、かすむ意識の中、14（セバルツ）が見上げた青空には、ニードル・ゲレーゲンハイトとドクトル・ヤーコブの、うそ臭いほどに朗らかな笑顔が映っていた…。結局。。

「この予備の布と、これをこうしてああして、できましたっ」

「11（エルフ）、縫うの早すぎっ」

（カーリ：火の巨人ロキ、海の巨人エーギルとならぶ、いにしえの風の巨人のなまえ）

原初神話において、神々と拮抗する力を誇った巨人族は、数々の魔法を用い、巨竜や魔獣に変化する術式を行使したという。

ヨゼフィーヌが駆る、茶の獣皮と青く光る鱗に覆われた巨大な怪物。虎の顔と鷲の爪、6つの脚、7つ頭の蛇の尾、竜の翼もつ複合^メ怪異もまた、第三位級契約神器カーリが宿す力の片鱗が。

「まけないっ」

20（ツヴァンツイヒ）こと、イスカ・ライプニッツは圧倒的に不利な防戦を強いられていた。

彼女の長銃には、戦車や装甲戦術機^{ゴーレム}を一撃で破壊する力があるし、その射程から空中に浮遊する敵を狙撃するのにも向いている。

とはいえ、亜音速で飛び回る標的を狙い撃つなんて無茶が利くほど、便利な代物ではない。

ヨゼフィーヌ・？・ギーゼギングによる急降下攻撃を、彼女は阻むことが出来なかった。

だから、仲間たちが皆殺しにされる前に、狙撃をやめて連射に切り替えた。

切り札も言うべき空中炸裂弾を惜しげもなく使い、ヨゼフィーヌと彼女が使役する怪物、第三位級契約神器カーリを圧封する。

20（ツヴァンツイヒ）が射出する弾丸は、次々と中空で飛散、巨大な球状の魔方陣を形成した。直径20m^{メルカ}に達する魔法陣は、つららをばら撒きながら爆発するも、ヨゼフィーヌが呼び出す嵐のように吹きすさぶ風の刃によって散らされる。

「小娘がつ。邪魔をするなっ」

ヨゼフィーヌは、瀕死のメルダー・マリオネッテから20（ツヴ

アンツイヒ）に標的を変えて、炸裂弾の弾幕を吹き飛ばしながら接近してきた。

次弾を撃つ隙などを与えないとばかりに、吐き出されたキメラの吐息が、風圧の砲弾となって20（ツヴァンツイヒ）の華奢な身体を吹き飛ばす。

「強力ではあるが、所詮は狙撃に特化した下級神器！」

先ほどの実戦を通し、ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングは、メルダー・マリオネッテの性能同様に、20（ツヴァンツイヒ）の銃についての特性も分析済みだった。

同種である他の第六位級神器”エルヴンボウ”に比べ、射程に優れるも、速射性能も追尾能力も無いに等しい。

全長130cmに達する長銃身はどう扱ってもとり回しが悪いし、魔術によるエネルギー弾ではなく、実弾を用いる弊害が如実に出ている。

弾倉への補充は召喚術で行っているようだが、一発撃つことに遊底をひいて、弾丸の装填と排出を行わなければならない。

高速戦闘を前提とする盟約者同士の戦闘では、この隙は致命的と言えた。

作った者たちからすれば、『まともな銃器もない魔法万歳なこの世界でいちからライフル造る者の苦勞がわかってたまるか』と叫びたいところだろうが。

自動小銃なんてものができるには、科学水準からすれば、まだ半世紀は必要だろう。

「そのまま、寝ている！」

キメラに跨るヨゼフィーヌが、鉄扇を振るい、巨大な円状の風の刃が出現する。

けれど、追撃を放つ寸前、態勢を立て直した20（ツヴァンツイヒ）が撃ち込んだ銃弾が直撃した。

氷の割れる音と共に、風刃を形作る魔術文字が碎ける。弾丸はそのまま直進し、カーリが生み出した3枚の魔法防壁を粉碎して、よ

うやく停まった。

（ちい）

魔術によるエネルギー弾ではなく、あえて実弾を使用する。その意味がこれかと、ヨゼフィーヌは戦慄する。

速射性能に劣り、追尾能力もない。だが、弾丸自体に魔術文字を刻むことで、広範囲攻撃を含む複数の攻撃手段を使い分けられる。

特に、魔法防壁を凍結する術式を刻めば、相手の防御魔術を破った上での攻撃が可能となり、ゴーレムの装甲すら貫通する大口径銃弾の威力も伴って、恐るべき破壊力を発揮する。

（たとえ格下とわかつていても、決して油断できる相手ではない。ならば、先に仕留めるまでだ）

ヨゼフィーヌの鉄扇の操作に呼応して、カメラがいなくなる。

羽ばたく竜の翼から輝く文字が生まれ、複数の小さな魔法陣を作り出す。魔法陣から発する青白い閃光が、機銃のごとき勢いで掃射される。

天と地、雲と泥。絶対たる差が、ここにあった。迫りくる閃光の雨を、20（ツヴァンツィヒ）は撃ち返すこともできず、見上げるのみだ。

けれど、この窮地にあつてなお、彼女の瞳は、闘志を失ってはいない。

「ン。かわ、せる」

彼女を育てた父は言った。弾幕兵器は確かに脅威だが、絶対の死を覚悟する相手ではない、と。

『要は命中精度が低いんだよ。こいつはアカエダから聞いた話だが、小銃は一次大戦で一人殺すのに弾丸10,000発。フルオート化されたベトナム戦争じゃ、200,000発以上もかかったらしい。魔法頼みのこつちだつて事情は変わらん。大量にばらまく魔術は、いちいち弾一個のコントロールなんてしてられないし、一撃の威力だつて小さくなる。魔法で盾や障壁を張れる分、こつちの方が差はデカいはずだ』

『パパ。アカエダって、パパのお友達？』

『……誰だっけ！？』

たまに、こういうことは良くあった。

アカエダ。カリヤ。クロード。ミドリ。クウ。ムラサキ。……これらの名前が出た後、パパは必ず”忘れていた”

禁呪であるレヴァティンの後遺症だって言ってたけれど、本当のところはパパもよくわかっていないようだった。

20（ツヴァンツイヒ）に、イスカ・ライプニッツにできることは、父親を信じることだけ。それだけの強さと想いと武器を……与えてくれた。

中空に、足場となる魔法陣を呼び出して跳躍する。空を翔ることには出来なくても、亜音速の移動だけなら、神器から力を引き出せる。もはや召喚する残弾も尽き果て、弾倉に残るはずかに5発のみ。それで、決着をつけなければ、皆を、姉兄を守れない。

20（ツヴァンツイヒ）は、複数の足場となる魔法陣を中空に召喚、驚異的速度で蹴り飛ばしながら、閃光の弾幕を回避、跳躍する。「かわしてっ、接近するだっ！？」 20（ツヴァンツイヒ）、貴様、何を考えている？」

「まもるっ」

本当は、あの後続けたパパの言葉は違っていた。「っわけで、当たらないよう距離をとって速攻で逃げろよ。間違っても突撃なんかすんじゃねーぞ」

逃げる場所なんてないよ、と、20（ツヴァンツイヒ）は思う。

今、姉兄たちを守るのは自分だけ、今戦えるのは自分だけ、ここが20（ツヴァンツイヒ）の戦場だ。

魔法陣の召喚と跳躍を繰り返しながら、20（ツヴァンツイヒ）は空を舞う。目指すは、ヨゼフィーヌの更なる高みだ。鉄扇から繰り出される風刃をかわし、キメラの風弾を避け、高く高く飛翔した。「うちぬく」

徹甲弾を装填し、魔法陣の上から、眼下を飛ぶキメラの左右の翼

を狙って、撃ち込む。

風が巻いた。荒れ狂う暴風が盾となって、迫り来る二発の弾丸を受け止めて切り刻み、磨り潰し、破壊した。

それでも、構わない。暴風の盾を張り続けることは不可能だ。

風の勢いが弱まる瞬間、20（ツヴァンツイヒ）は銃頭に素早く刃をつけ、落下速度を利用し、キメラに騎乗したヨゼフィーヌへと突撃する。

重く、鈍い音がした。

「それが、貴様の切り札か？」

氷をまとった銃剣は、風を帯びた鉄扇によって、阻まれていた。

「最初から私自身を狙うべきだった。絶好の勝機を得ながら、無駄な感傷でふいにする。20（ツヴァンツイヒ）、悪い師の影響が出たな」

ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングの整った能面のような顔に、はじめて、憐れみの様な影が射した。

竜の翼から放たれる閃光の掃射が、巨獣の爪牙が、顎から吐き出される風弾の吐息が、……20（ツヴァンツイヒ）の身体を赤く染めた。

13

あれは、いつ頃のことだっただろうか？

夕食が終わって、御伽噺を聞かせてくれた後、焚き火の傍で毛布に包まったイスカに、ニーダルが訊ねたことがある。

「なあ、イスカ。イスカはオジョー……、姉さんたちのことが好きか？」

「んっ。……すきっ」

「そっか。そうだよな。俺も、あいつらのことが好きだよ」

パチパチと、木の枝の爆ぜる音だけが響いていた。

ニーダルの顔をイスカは見えていない。ただ、自分と同じメルダー・マリオネツテの仲間のことを、自分の姉兄だと、好きだと言ってくれたことが嬉しかった。

そして、別れの日。ヴァイデンヒュラー閥からの迎えを待つ港で、ニーダルとイスカは最後の抱擁を交わした。

「イスカ、忘れるな。離れていても、俺たちは親子だ。

俺は、必ずお前とお前の姉兄達を戦いから解放する。

だから、それまで、イスカがお姉ちゃんたちを守るんだぞ」

「ン。みんなで、またいつしよにくらそう」

ニーダルは答えなかった。

「パパ。パパもいつしよだよ……」

首をゆつくりと横に振る。そのまま、彼は背を向けた。

「イスカ。お前は、幸せにならなきゃ、な」

去ってゆく。その背中が燃えてゆく。脚が、腕が、燃え落ちて灰になり、風の中へ溶けてゆく。

イスカは、追う事も出来ずに立ち尽くす。

きらわれたくないから、すてられたくないから、どうしてもいっぱがふみだせない。

レヴァティン。パパのちからで、パパをくるしませるノロイ。

パパはバカだ。おとこのロマンとか、そんなのイスカにはわからない。

パパがもうすぐ、いなくなってしまうとしても、さいごまでいっしよにいたい。

酷く悪い夢を見ていた気がした。

20（ツヴァンツイヒ）が目覚めると、身体中が酷く痛んだ。

「まだ動いちや、メツですわよ」

「おねえちゃん」

アインスの腕の中に抱かれて、20（ツヴァンツイヒ）は目を閉じた。

とくとくと心臓の音が聞こえる。伝わってくる温もりが嬉しかった。

11（エルフ）や、9、17が治癒の魔術をかけてくれているのがわかる。

そこに、風の音が聞こえ、何者かが乾いた荒地に降り立った。

「勝負はついた。武装を放棄し、20（ツヴァンツイヒ）を引き渡せ」

キメラに跨るヨゼフィーヌ・？・ギーゼギングの恫喝を、ロゼット・アインスは20（ツヴァンツイヒ）を抱いて立ったまま、意地の悪い瞳で受け止めた。

「あら教官。何をチヨーシにノっているんでしょうか？」

「私が調子に乗っている、だと？」

明らかに言葉を崩した、ロゼットの不敵な挑発をヨゼフィーヌは訝しがる。

どんな手を使って生き延びたのかはわからないが、彼女は先ほどメルダー・マリオネットを鎧袖一触とばかりに討ちのめしたばかりだ。 だというのに、どうしてこうも強気でいられるのか。

「ええ、20（ツヴァンツイヒ）を痛めつけてくれたようですが、彼女はワタシたちメルダー・マリオネット姉弟の中では、末っ子。

ここからは、19人の姉兄が彼女に味方します」

「正気を失ったか？ それともあの道化師から習ったハッターか。絶対的な力の差というものを、お前も理解しているだろう？」

ヨゼフィーヌは、再び殲滅せんとばかりに鉄扇に風をまとい、ロゼットは槌を構える。一触即発のびりびりとした空気が、アースラの荒野を震わせる。そこに、14（セバルツ）が場違いな声をあげた。

「あのー、ちょっといいですか？」

「何？」

「何だ？」

にらみ合うロゼットとヨゼフィーヌにねめつけられて、14（セバルツ）は鼻の頭をかいいた。

「お、俺、20（ツヴァンツイヒ）の兄貴よりか、カカカ、…カレシの方がいいなって」

もの凄く場違いな発言に、ヨゼフィーヌだけでなく、メルダー・マリオネッテからも、すさまじい殺気が放たれた。

7（ズイーベン）が半ギレになりながら、14（セバルツ）の耳をひっぱる。

「ちょっとこっちこい、このKY野郎」

「いたっ、いたい。KYって、おれはサンゴ礁傷つけたり、自作自演ほうどうしたりなんてしてないっス！」

「王国のマスメディアのほうどうしせいには疑問があるからな。…ってそんなことは、いまはいいから、僕の話を聞くん」

7（ズイーベン）はぶつぶつと、14（セバルツ）の耳元で何かをささやいた。

「アニキでいいっス。サイコーっす！」

「どうやっていいくるめたのかしら」

ジト目でロゼットに睨まれて、戻ってきた7（ズイーベン）は、長い前髪の下で目を泳がせた。

「全国の実妹もちの兄貴たちが苦笑いするだろう嘘八百で」

「そう、最低ね。7（ズイーベン）」

「え、僕が、……俺がっ!？」

変にやる気になっている14（セバルツ）と、真っ黒な影を背負ってしゃがみこんだ（ズイーベン）を遠巻きに見ながら、他のメンバーたちがひそひそと話し合う。

「うわー鼻血でてるよ。これだから、オトコノコってフジユンだ」

「もう、14（セバルツ）のことなんて知りませんっ」

そして、ヨゼフィーヌ・？・ギーゼギングが、鉄扇を開いた。

「もういいな。メルダー・マリオネッテ・アインス。私は、お前たちを皆殺しにする」

「ええ、ヨゼフィーヌ・？・ギーゼギング。ワタシ達は、貴女を討ち果たします」

それが、合図。全員の気配が、意識が、殺し殺されるための殺戮人形、否、戦士へと変わる。

ヨゼフィーヌがキメラを駆って飛翔した。

「コードF！ 7（ズイーベン）っ、11（エルフ）っ！」

メルダー・マリオネッテの全員がいつせいに魔術文字を綴った。

ある者は飛翔の、ある者は肉体強化の、また、ある者は加速や防護の魔術を。そして、7（ズイーベン）が鋼線で描く魔法陣に、1（エルフ）の文字が刻まれる。

召喚され、成長し、伸びゆくトネリコの樹を、ロゼットと5（フエンフト）、14（セバルツ）が、まるで連続して瞬間移動するかのようにコマ送りで消えながら、駆け上がる。

「まだわからんか足手まといども。これは、私とミッドガルドの華たる資格を得た20との決闘だ。手負いの獣は獣らしく、伏して啼いている！」

「アンタこそに何がわかるんだ！ ヒトをケモノだの、ドウグだの！ パラデ이스教徒はそんなにエライのか！」

5（フエンフト）が戦輪を投げる。その悉くが、風の刃によって斬り散らされ、彼女自身もキメラの爪を受けて墜落する。

「当然だ。我々こそ、太古からの英知と遺産を受け継ぐべき選ばれし人。お前たちなど、我等のための家畜に過ぎん！」

支配者が君臨し、人民が被支配を受け入れる。それこそが、パラデイス教における天の定め。必要なのは、少数のエリートと導かれるべき無知蒙昧な大衆のみ。

それにも関わらず、この獣どもは、「絶対に正しい価値観」に対して異を唱えようとする。無知蒙昧な大衆であることを否定しよう

とする。

そんなことを、栄光あるパラディース教徒として許せるはずもない。野を祭りし獣どもは、分別を知るがいい。

「そうやって、自分達だけがエライ、自分達だけがトウトイって信じなきゃ、生きてけない。教官、そういうの、カワイソウっすね」

「14（セバルツ）！？ 貴様ッ！！」

5（フェンフト）を切り裂いた鷲の爪、その付け根、茶の獣皮と青い鱗に包まれた掌に、長い筒が撃ち込まれていた。

杭槍が、キメラの腕部を撃ちぬき、後方に爆煙が伸びる。同時に吐き出された風圧の砲弾が、14（セバルツ）を大地に叩き落すも、もう遅い。

重ねるように、跳躍したロゼットの槌が、キメラの首背部、翼の付け根を殴りつける。白い閃光と、無数の魔法陣が生み出す青白い閃光の奔流が交錯する。

ロゼットは僅かな隙を縫って、槌で殴りかかったが、ヨゼフィーヌの鉄扇によって受け流された。

光が消える。地上に残るメルダー・マリオネッテの仲間たちは、

20（ツヴァンツィヒ）を残して、全員が倒れ付していた。

「5（フェンフト）の時間加速か。思った以上に厄介な術だったが、ここまでだ。アインス、お前と20（ツヴァンツィヒ）以外は、これで終わり。所詮、劣等民族であるお前達は決して勝てないのだ」全力を投じた奇襲をもってさえ、ヨゼフィーヌと彼女が繰るキメラを落とすことは叶わなかった。

第三位契約神器カーリ。絶対たる力の差が、ここにあった。

（ああ）

ロゼットの胸がしめつけられる。

それは、昨日、20（ツヴァンツィヒ）に救われたときと同じ痛みだった。

「何を言っていますの、教官。ワタシ達は、ここにいます。オモイとチカラのすべてがここに」

まったく胸を、ロゼットは堂々と張った。

違う、違うと、皆の心が叫んでいる。

あの男に並ばなければいけない。

でなければ、振り向かせることなんてできやしない。

生きる。生きて、ワタシ達の本気を見せ付けてやる。

たかが神の器の力を得たところで、思い上がるな。

「ヨゼフィーヌ教官、貴女は強い。けれど、たった一人で、ひとつとなったワタシ達のことをねじふせられると思わないで」

「劣等民族に意思等不要！」

閃光と竜巻が、空を舞った。

仲間達の全ての援護を受けた。それでも、攻撃も防御も速度も、何もかもがヨゼフィーヌには届かなかった。 19人の力では。

(20 (ツヴァンツイヒ)、あなたは、盾になる必要なんてないの)

あるいは、世界にはそういった、守る戦いをする神器や盟約者もいるかもしれない。

けれど、イス力が得たのは、穿つ神器。運命に、呪われた世界に風穴を空ける為の牙。

その牙を届かせるのが、メルダー・マリオネッテだ。

あの人には及ばなくても、ワタシ達は、ワタシ達の役目を全うする。

ロゼットの猛攻は、確かにヨゼフィーヌを足止めすることに成功した。

そうして、末っ子が、残された最後の力を解き放つ。

「まけない。まもるっ」

「風は万物を呑みほし、食らうものなりっ」

ヨゼフィーヌを護るようにキメラの下で風が巻いた。荒れ狂う暴

風が盾となつて、迫り来る二発の弾丸を受け止めて切り刻み、磨り潰し、破壊する。

その弾丸がこじ開けたわずかな穴を、三発目の弾丸が、貫いた。「これで、最後ですわ」

時間加速の呪を受けたロゼットが、鋼線を投げて自らの身体ごとヨゼフィーヌを縛り付ける。

風の音が止んだ。

20（ツヴァンツイヒ）の弾丸は、キメラの上半身に大きな穴を開け、閉じられた鉄扇によって、中空に静止していた。

「とめられた？」

ロゼットとヨゼフィーヌを縛り付ける鋼線が、風の刃によって、引きちぎられる。

「1（アインス）。聞かせてくれないか？」

20（ツヴァンツイヒ）は、お前にとつて、欲しかった場所を奪った女だろう？ なぜあの子を守るために戦った？」

恩人の娘だから？ 最強の武器の主だから？ それとも……？

「だって、ワタシは、あの子のことが好きですから」

それは、友情かもしれないし、姉が妹に抱くような感情かもしれない。

そんなシンプルな感情こそが、彼女が槌を取った理由。

「1（アインス）、変えてみせる。我らパラディース教徒ですら止められない、終わらない輪廻、この破滅への運命を」

荒野を渡る風が、ヨゼフィーヌの短く刈った髪を撫でる。

いい風だ。と、ロゼットが見たことのない、澄んだ笑顔で彼女は笑った。

「私は良い師ではなかったが、お前のことは嫌いでは無かったよ」
トン、とヨゼフィーヌは、ロゼットを押し出した。

鉄扇が砕け、キメラが爆ぜる。乾いた、氷の割れる音が響いた。

槍と剣がかみ合い、火花を散らす。

ニーダル・グレーゲンハイトと、ルートガー・ギーゼギングの戦いは続いていた。

「理解できないな。貴殿ほどの男なら想像がつくだろう？」

我ら主要民族を打ち倒しても、また新たな民族がパラディース教徒として君臨するだけだ。貴様が無意味な感傷で肩入れしても、更なる悲劇が繰り返されるだけ。

異なる民族、異なる価値観があるからこそ、人は互いにあい争う。真なる平和を世界にもたらすために、最も尊いパラディースの価値観に束ねることこそ、必要とは思わないか？」

ルートガーが繰り出すダインスレイヴの切っ先を、ニーダルは穂先の鎌で払い、続く斬撃を柄で受け、後退を続ける。

「ぜんっぜんっ。そうやって、他人を支配することしか頭にねえから、んな寝ぼけた結論が出る。血筋が違あう？ 考えが違あう？

それがどうした？ 見ているものが違っても、手を取りあうことだって出来るだろうが！」

「ならば、我々の価値観を受け入れたまえ。貴殿には、華たる資格がある。野の獣に情けを注ぐのは、君自身の誇りを貶めることになる」

「華だの獣だの決め付ける。肝心なところ、てめえらは、自分が特別でないって認めることで、他人と同じちっぽけな人間であることに、耐えられないだけだろうが」

「特別である我等がどうして野卑と対等なものか！？」

叫びとともに、ルートガーが袈裟懸けに斬り込んだ一撃は、踏み込み過ぎだった。

ニーダルは穂先で受け流しつつ、石突を突きこむ。とっさに避けたところで、足を払おうと槍が伸びて、魔剣で受け止めざるを得なくなった。

攻守が替わり、再び火花が散る。

どれほど打ち合っただろうか、ふと、東の空が赤く染まった。

ニーダルが炎の塊を地面に叩きつけ、距離を取る。同時に、ルートガーもまた退いた。

風が舞う。赤い大地に魔法陣が刻まれて、長い髪をひとつに束ねた女、三つ編みに結い上げた女、まだ年若い、ロゼットたちと同年代の少女が姿を現した。

彼女たちに共通しているのは、艶やかな黒髪と、感情を宿さない硝子玉のような灰色の瞳。

何処からか転移してきた女達に耳元でささやかれ、ルートガーはつまらなそうに苦笑した。

「ニーダル・グレーゲンハイト。先ほど、シーラスにあるナラールの秘密工場がエルサリヤの工作部隊によって破壊されたそうだ。シリラス、イラーナ、ナラールの熱核兵器研究は、若干の延期を余儀なくされるだろう。情報を流したのは貴殿かな？」

「俺っち、ずえーんぜん知りません？」

「責めているわけではない。公の立場としては、ベーレンドルフ閣……西部連邦人民共和国は、大量破壊兵器の拡散を止めようとしているのだから」

両の腕を開いておどけてみせるニーダルに、無精ひげをかいてルートガーは応えた。

「さて、続けようか。こちらのカードは全て揃った。貴殿の奮闘を期待するよ？」

「そんなことより、後ろの綺麗なご婦人方を紹介してくれないか。いい宿を知っているんだ」

「強引過ぎる男は嫌われるよ？」

「出会いは大切にするもんだぜ。こんなご時勢だから尚更よ」

三人の娘は、ルートガーを伺い、彼が頷くのを確認して名乗りをあげた。

「教主直属部隊”無限の自由”が一人、ヨゼフィーヌ・？・ギーゼ

キングと申します」

「同じく、ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキング」

「ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキング。火の巨人口キ、海の巨人エーギルと並び立つ、古の風の巨人を冠る神器が一つ、第三位契約神器カーリが盟約者だ」

「私の自慢の娘たちだよ」

ニーダルは瞳を閉じて、三日月十文字槍を構えなおした。

「姉妹っていうなら、納得できたんだけどよ。この魔術反応、てめえ、複製したな？」

「風とは偏在するものだ。これが、最も契約神器の力を引き出せるやり方だからね」

ルートガーが、柄についた汗を拭って、再び剣をとる。

三人のヨゼフィーヌもまた、手に手に鉄扇、カーリをとって、父親を護るように立ちふさがった。

「てめえら、それでいいのかよ……？」

「家族ですもの。お父様の為に尽くすのがわたし達の悦び」

「私たちの生きる理由の全ては父様」

「それが愛と言うものでしょう」

「さあ、ヨゼフィーヌ。彼に、私たち家族の、愛の強さを教えてあげよう」

風の刃が、竜巻が、様々な獣の部位が組み合わさった異形の竜が召喚される。

「ルートガー・ギーゼキングッ」

アカエダキイチロウ。カリヤコノエ。……記憶にない男と女の名前が、ニーダルの胸を焼いた。

眼前の男は、血の繋がった娘を道具にすることに、何の呵責もなく、それどころか愛情だとすらいつてのける。

「それが人の親のやることかぁ」

「娘を愛人にしたことを公言する貴殿よりは、善人のつもりだが？」
訂正する気すら失せていた。望むことはただひとつ、目の前の男

を殴るのみ。

「父様に手は」

「ガキはだまつてろ」

ア ク セ ス

襲い来る風刃と、竜巻を裂きながら、白い炎が咲く。

魔術を焼き尽くしながら、十文字鎌槍を手に、ニーダルは疾走する。

叩きつけてくる鉄扇を腕ごと巻き取って投げ飛ばし、跳躍した足を柄で叩き伏せ、キメラじみた異形の竜の首を焰と槍で刎ね飛ばす。詩歌に曰く、『突けば槍、薙げば薙刀、引けば鎌、とにもかくにも外れあらまし』と詠われた槍術の開祖が生み出した名槍だ。

無論、習ったことなど一度もない。だが、ニーダルは、王国に伝わる槍術を基礎に、10年もの長きに渡って戦場に身を置き研鑽を続けた。もはや、己が手足の如く扱い得る！

弾き飛ばされる娘達を見て、ルートガーの顔が歪んだ。

「その槍、砕かせてもらう」

ルートガーが、赤黒い呪いの力を乗せて、ダインスレイヴを三日月十文字槍に叩き付けた。

希少なミスリル銀で鍛えたニーダルの槍は、魔力付与によって、自己修復能力すら備えた稀有の武装だ。

とはいえ、所詮はマジックアイテムに過ぎず、世界を書き換える上位神器の力を前に凌ぎ切れるものではない。

穂先ごと叩き斬られ、ニーダルの槍が折れる。続いて、ルートガーが刃を横薙ぎに返す前に、ニーダルの身体が飛んでいた。間合いを一瞬で詰めて、左の足を軸に身体ごとぶつけるように、膝を顔面に叩き込む。

(こいつは、こいで潰すっ)

ニーダルの手のひらに白い焰が集い、太陽よりも光り輝く炎の剣

が創造される。

その瞬間、ニードルの中の怒りと理性がもっていかれた。

視界が閉ざされる。音が消える。四肢の感触が消し飛ぶ。

闇の中で湧き上がるのは純粹なる否定の呪詛。世界そのものを拒絶する破壊の指向。

娘を道具に使って何が悪い？ 命も愛も情も何もかも、すべて平等に価値がない

兵器に感情など不要。

そもそも兵器として重要なのは、予想外のモーションを取らず確実に指示に従う信頼性にほかならぬ。

殲滅せよ。

ただひとつの使命、世界樹と端末を破壊する為に、すべてを焼き尽くせ！

精神に侵食し、押し流してゆくシステムを、ニードルは己が矜持と激情をもって受け止める。

かつては、恐れたこともある。我をうしなつてゆくこと、壊れてゆく自分に恐怖した。

（落ち着けよ。ただ暴れまわるだけじゃ詰まらないだろう？

お前には意味がある。ただ否定するための呪詛ではなく、込められたオモイがあるはずだ。

くれてやる俺の感情も、この魂も。だから、ともに！）

剣を、振るう。

黒き力を焼き滅ぼし、白き焰をもって、敵を崩滅する。

「そうか、それが本来の救世の力。いや、本気になったニードル・ゲレーゲンハイトの強さというべきか。時の果て、死すら滅びるは必定だ」

ルートガー・ギーゼキングの声が聞こえた。

「どうやら、仕留め損ねたらしいと、ニードルは理解する。」

ダインスレイヴの刀身は半ばから焼け落ちて、半壊していた。

彼の娘たちの鉄扇も、それぞれレヴアティンの炎によって少なからぬ傷を負っている。

けれど、ニードルにはわからない。彼の目は、今見えてはおらず、口も満足に動かない。

風によって切り刻まれ、血を流す四肢の痛みすら感じていなかった。

「貴殿が生き延びられたなら、また会おう」

風の音が聞こえた。この場所から、転移したのだろう。

さっきまで静かだったイラーナやシーラスの兵士たちが、怪物が来ると叫んでいる。

時間稼ぎか、スカンクのすかしっぺか、また近くの遺跡の”封鎖結界”を破っていったらしい。

（あゝ、この体調で、コレ？ 酷い嫌がらせじゃね？）

というか、今までやたら静かだった兵士たちは、死んだ振りでもしていたのだろうか。

見捨てていこうかなあ、などと悩んで、結局できなかった。

どうにか手を動かして、魔術文字を綴り、花火を打ち上げる。

『生き延びたけりや、手を貸SE』

青空に、黒い煙でメッセージが刻まれた。

「おい、最後のほう、誤字っているぞ」

（今ツツコムところは、そこかよ！）

傷ついたヨゼフィーヌの遺体を拾い集め、ロゼットたちは風吹き渡るアースラの大地に埋葬した。

「教官」

敵だった。味方だと欺かれていた時も、痛めつけられた記憶しかない。

それでも……。

ロゼットは、石を積み上げた墓前に花を供える。

「ワタシは、あの人の娘になりたかったんじゃない。コイビトですわ」

「ぱ、パクられた」

「14（セバルツ）。そろそろ自重することをおぼえろ……」

7（ズীবアン）の忠告に耳を貸す風もなく、14（セバルツ）はうりうりと肘でわき腹をつついてくる。

「につひつひつ。大変だね7（ズীবアン）は。その点、俺は安全だもんね」

「水をさすようだが……。20（ツヴァンツィヒ）があの人の養女なのは、いまさら誰もうたがわれないが法的なこんきよは無いんだぞ」
14（セバルツ）はしばしぼかんとして、そばかすの浮いた鼻面を近づけてきた。

「ど、ど、どどど、どういうことよ？」

「なにせ僕達には戸籍がないからな。将来20（ツヴァンツィヒ）がイスカ・ライプニッツ・ゲレーゲンハイトとして籍をとった時、その名前が、扶養家族ではなく、配偶者欄に書かれる可能性もあるってことだ」

「ぬ、ぬおおおおおおッス〜〜〜！！」

なんか絶叫している14（セバルツ）と、心配そうに伺っている11（エルフ）、その胸に手を伸ばそうとしている5（フェンフト）を横目に7（ズীবアン）はため息をつく。

（そんなわけがないだろうが……）」

話を聞く限りニーダル・グレーゲンハイトは20（ツヴァンツィヒ）を娘としか思っていないし、20（ツヴァンツィヒ）にとつてのニーダルも同じだ。

そして、ニーダルがどれほど傾いても、最後の一线で恐ろしく頑強なことを、7（ズィーベン）は工作員として追いながら学んだ。

1（アインス）は、恋に恋しているだけ。ニーダルにとつての彼女は、娘の友人とか、教え子とか、そんなレベルでしかないはずだ。

（けれど）

本来ならば、バラバラに運用されるはずだったメルダー・マリオネットのチームとしての再結成。

薬物や魔術による人体実験や改造の停止。わずかとはいえ、保障された自由。

そこに、ニーダル・グレーゲンハイトの意思は絡まなかっただろうか？

全ては憶測に過ぎず、「娘の為」という納得の出来る理由もある。

（僕は、俺たちは変わった。あの人も、きっと。変わりつつけることが、成長することが、俺は怖い）

変化も、成長も、可能性があるということだ。

だからこそ、7（ズィーベン）は思う。1（アインス）の傍に寄り添うのは、自分でありたい、と。

周囲の警戒に回っていた、9と17、12と15が、慌てて戻ってきた。

「南から怪物達がおしよせてくるですって？」

ロゼットは、仲間たちを見回した。治癒の魔術で誤魔化しても、

満身創痍で疲労困憊。頼みの20（ツヴァンツイヒ）は弾切れと
ている。

「ぐずぐずしている時間があるなら、早く逃げればいいだろう」
縛り上げられた黒くめの少女が、枯れたような声で呟いた。

「そうですね。みんな準備して」

壊れた武器や装備を捨てて、最小限の水と食料だけを持つ。そし
て、捕縛したギーゼキング指揮下の殺戮人形達の戒めを解いた。

「何を考えている？ 我々などエサに置いてゆけばいい。そうすれ
ば、時間もかせげる」

憔悴したまま座り込んでいる少女の手をとって、ロゼットは呆れ
たばかりに引き立たせた。

「しっかりしなさい。ワタシ達は戦った。そして、生き残った。な
らば、……教官のためにも生きる努力をしなさい」

「ベーレンドルフにもわたれなない。ヴァイデンヒュラーにも戻れな
い。そんな我々に生きる場所なんてない」

「あら。うらやましいですわね。……それって、ワタシ達と違って、
貴方たちは自由ってことじゃないですか？」

「自由？ 何だそれは！ 散々殺して生きてきたんだ。今は、我々
の番だ。なぜ終わらせてくれない？」

「生きたいだけ生きて、死にたいときに死ぬる？ そんなゼイタク
がワタシ達に許されるとても。思いつかないで」

パン。と、ロゼットが少女の頬をはって、ふらふらと覚束ない黒
くめの少年少女達が立ち上がりはじめた。

「メルダー・マリオネット・アインス。お前を我々の指揮個体とし
て認める。命令をくれ……」

人間は変わってゆくのだ。たとえ、その歩みは遅くても、一歩さ
え踏み出せば、生きている限り。

その機会をくれたことを、ロゼットは、ニードルに、20（ツヴ
アンツイヒ）に、ヨゼフィーヌ・？・ギーゼキングに感謝した。

「命令は、ひとつ。……生き延びますわよ！」

ロゼットたちは走り出す。……その先に、未来があると信じて。

サウド湾近郊にある海岸洞窟を利用して造られたキャンプで、ア
ースラ国反政府海上義勇兵団は、怪物に追われるロゼットたちを待
ち受けていた。

長を務める屈強なひげ面の男が、西部連邦人民共和国の闇商人に
確認した。

「旦那。本当にあのガキどもを殺っちまっただけなんだな」

「ええ。彼らは反逆者ですから」

闇商人に扮した男は、冷たい目で唇をつりあげて応える。

「戦果を上げすぎる奴隷など、必要ないと思いませんか？」

「そいつは、もっともだ」

大型弓などを整備しながら、海賊達はゲラゲラと笑った。

「必要なのは、金髪の娘だけ。あとは人質に、二、三人、腕と足を
もいでダルマにでもすればこと足ります」

「楽しんでいいんだろう」

「相手は子供ですよ？」

「ご覧の通りの男所帯だからな。穴さえあればそれでいい」

再び、下品な笑いがキャンプを満たす。けれど、すぐに笑いは、
戦慄に変わった。

停泊している船が、深紅の閃光に包まれたかと思うと、全て消し
飛んだのだ。

「て、敵襲!？」

「誰が!？」

政府軍の追撃は振り切っていた。大陸連合軍が動くという情報は
得ていない。

「我が声に応え、いでよ。第6位契約神器ルーンソード!」

闇商人は、とつさに己の契約神器を召喚し、魔術文字による障壁を張った。

その障壁は、深紅の閃光の前に、いくらかもたずに消し飛んだけれど、おかげで彼は敵を確認できた。

魔術による光学迷彩で消える直前の、蒼い空を悠々と横切って飛ぶ光の帆を張った戦帆船を。

（空中戦艦。バカな、あれは私と同じ、”絶対の正義”の……）

”無限の自由”と拮抗する武力をもつとされる、ヴァイデンヒュラー閥、前教主直属部隊の一員は、その実力を発揮することなく、光の中へと消えていった。

「マスター。あれは友軍だったのではないのでしょうか」

反政府軍のキャンプを消し去った空翔ける船の艦橋で、操舵輪を握る少女が、艦長席に座った女に尋ねた。

「ノーラは、必ず悪意で足をひっぱって、隙があっても無くてもこちを必ず害するヤツを友達と呼ぶかい？」

「人の身でない私ですが、呼ばないと判断します」

「そゆこと。あいつほど甘ちゃんじゃないのよ。わたしは」

紫色の法衣に身を包んだ女は、洞窟から逃げる馬車を、目を細めて見送った。

「散々邪魔されて時間を浪費させられたんだ。ここらで、牙を見せないと舐められる。」

あいつにも援護くらいしてやらないと、顔が立たないだろう？

……別に心配してるわけじゃないんだからね！」

「マスター。無理やりツンデレばくキャラ付けするのは、無理あると思います。むぐっ」

「そんな余計な口を利く子猫ちゃんは、こうだ」

「むぐ、むぐ……」

女は艦長席から降りて、操輪中の少女の頬をぎゅーと引つ張った。おかげで船が大きく傾き、危うく横転しかかった。事故を起こさなかったのは、不幸中の幸いだろう。

「さあ、行こうか。ノーラ・ドナク・アーガナスト。わたしとキミの奪われたもの、全てを取り返すために。」

ここが異世界だろうが、平行世界だろうが知ったこっちゃ無い。

たとえ”世界”を相手にしても、必ず宿願を果たすでしょう」

「マスター。貴女の与えてくれた名と、第二位契約神器ミールとしての性能の全てにかけても、その願いを叶えて見せます」

赤枝、苅谷、蔵人、美鳥、空、そして、高城……。奪われた名を、女は心に刻む。

「わたしは、取り戻す。すべてを」

洞窟の中から逃げ延びた武器商人と海賊の残党は、必死で馬車を走らせた。

正規軍と違って、賊徒は護るべき拠点を持たない。支援者が居る限り逃げれば、いつまでも戦い続けられる。それが、彼らの強みだった。

「まだだ。まだ再起はできる。武器を必要とするやつは、どこにだっているんだ！」

自分達を襲った不可解な攻撃の恐怖に駆られながらも、彼らは確信する。自分達がこんなところで終わるはずがないと。

進路に、折れた槍を肩にかつぎ、目をぼろ布で覆った赤いコートの男を見てもなお。

「魔術照合終了。”聖戦の基地”幹部のロレンツォだな。ガキの不始末はオトナの責任だ。悪いが、とっ捕まえさせてもらっぜ」

邪魔だとはかりに、護衛が弓を射る。しかし、その悉くを、目が見えていないはずの男は回避し、迫ってくる。

しびれをきらして槍や剣で切りかかった護衛たちは、まとめて槍で大地に叩き伏せられた。

「ガキどもを使え！」

注射を打たれた子供達の、筋ばかりの手足が膨れ上がり、瞳が混濁する。

小さな身体を黒い魔方阵に囚われて、まるで獣のように四つ足で跳ねながら、兵器と化した子供達は赤いコートの男へ突進する。

そして、その体躯は爆発することなく、黒い魔法陣だけが異形の炎に包まれて、ゆっくりと地に倒れ付す。

「赤いコートと炎の魔術！ 紅い道化師かてめえええっ」

「人の呼ぶ字名を気にしてられるかよ！」

叶わぬと見るや、護衛の海賊達はロレンツオを置いて、散り散りに逃げ出した。

石弓で応戦するが、止められるものではない。壊れた槍の柄でしただかに打ち倒された。

「噂は聞いているぞ、クソツタレが。貴様も俺たちと同じ、人の肉を喰らうケダモノだろうが」

「上等。守るべきものの為なら獣にだってなるさ。それがオトコつてもんだらうが」

視界が見えていないので、加減が利かなかった。死んではいないだろうが、動かなくなったロレンツオの上に腰掛けて、ニーダルは水晶球を懐からつかみ出す。

「おい、ジジイ、エルサリヤとアメリカに伝える。ターゲットは確保した。更なる空爆の必要はない」

「ふむ。悪かったな。無理をきいてもらったようだ」

「気にすんな。大量破壊兵器の拡散は、神ラグナロク焉戦争を呼びかねない。イス力達の生きる世界に、そんなものを許せるかよ」

水晶球に映るエーエーマリツヒは、布で隠されたニーダルの瞳を

見て、わずかに沈黙した。

「『紫の賢者』から連絡があったよ。メルダー・マリオネット全員を回収。20番目の引き取りは、許可が下りなかったそうだが、1番から19番までは、彼女が保護すると伝えてきた。」

「そっか」

「信じられるのかね。相手はヴァイデンヒュラー閥の魔術顧問。それも、……絶対の正義の一員だぞ」

「わかんね。わかんねえが、なぜだろう。あいつは、裏切らないって、確信できた」

『まさか、もう一度キミに名乗る日が来るなんてね。紫崎由貴乃だ。もう二度と、わたしに名乗らせるな』

そう言って、彼女はいきなり唇を重ね、ニーダルの口に舌を入れて、歯茎を嘗め回して、拳句に唇を少し噛み切っていた。

『それなら大丈夫。いい女の名前は、忘れないようにしている』

やられっぱなしだと格好つかないので、深いキスを返したが、紫崎由貴乃はただの一度も、ニーダルを見ず、”誰か”を見つめていた。

「馬鹿造。わしは、今になって後悔している。ニーダル。君は、あの娘を引き取ることで、復讐だけでなく、あの子とあの子の姉兄を救うという荷を背負うことになった。そして……」

「クソジジイ。あいつらがいなきゃ、俺の時間はとくに終わってた。イスカが、オジョーやガキどもが、俺に生きる力をくれたんだ。もちろん、……あんたもな」

「だが、お前の身体は……」

「目のことなら、気にするなよ。時間が経ちゃあ、また見えるようになる」

これまでは、そうだった。

けれど、ニーダルだってわかっている。理性の欠落や、感情の喪

失などの精神的な負荷に加え、身体的な影響まで出始めた。

レヴァティンという焔を燃やすローソクは、もう長くないのだらう。

「次の遺跡が最後だ。第一位契約神器、七つの鍵を得ても得なくても、俺はすべてを終えて、イスカの元へ帰る。だから、そのときまで、頼むぜ」

通信は、切れた。

青空の下で、ニーダルは視力の回復を待つ。

その前に、子供達がうめき声をあげた。

「……ここ、どこ？」

「よう、坊主。家はどこだ？」

子供達が、アースラや隣国の村の名前を、口々にあげる。

「そっか、じゃあ、帰ろうぜ」

「どこ、へ？」

ニーダルは立ち上がる。目を覆う布が落ちた。空は青く、土は赤く、子供達は不安と希望の入り混じった瞳で見つめていた。

「決まってるだろう？ 家へ、さ」

人形

FIN

七つの鍵の物語

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0969o/>

七つの鍵の物語 - 【人形】

2010年10月11日18時10分発行